

第58回全国中学校社会科教育研究大会  
第31回近畿中学校社会科教育研究大会

# 大阪大会

令和7年11月13日(木)・14日(金)

## 大会のまとめ

大阪大会実行委員会

## も く じ

大会のお礼と研究集録の発行にあたり	2
研究について	3
大会概要	4
研究主題決定過程と基調提案について	6
地理的分野研究報告	24
授業実践①「アフリカ州」	36
授業実践②「関東地方」	46
地理的分野指導助言	58
歴史的分野研究報告	64
授業実践①「大正デモクラシーの時代」	72
授業実践②「武士の政治の展開」	78
歴史的分野指導助言	84
公民的分野研究報告	90
授業実践①「消費」	102
授業実践②「少子化」	112
公民的分野指導助言	122
おわりに	128
<参考資料>	
大会後の研修会（大阪府公立中学校社会科教育研究会研修会）	134
大阪大会事業報告	135
参加者アンケートまとめ	136

## も く じ

大会のお礼と研究集録の発行にあたり	2
研究について	3
大会概要	4
研究主題決定過程と基調提案について	6
地理的分野研究報告	24
授業実践①「アフリカ州」	36
授業実践②「関東地方」	46
地理的分野指導助言	58
歴史的分野研究報告	64
授業実践①「大正デモクラシーの時代」	72
授業実践②「武士の政治の展開」	78
歴史的分野指導助言	84
公民的分野研究報告	90
授業実践①「消費」	102
授業実践②「少子化」	112
公民的分野指導助言	122
おわりに	128
<参考資料>	
大会後の研修会（大阪府公立中学校社会科教育研究会研修会）	134
大阪大会事業報告	135
参加者アンケートまとめ	136



## 大会のお礼と研究集録の発行にあたり

第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会  
第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会  
実行委員長 渡辺 慶人  
(大阪市立八阪中学校長)

令和 7 年 11 月 13 日(木)・14 日(金)に第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会並びに第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会を開催したところ全国各地より約 800 名もの社会科関係者の皆様にご参加をいただき、誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

さて、数年前、新型コロナウイルスの感染拡大により学びの継続が危ぶまれる中、令和 2 年度の誌面開催(高知大会)や令和 3 年度ハイブリッド型開催(東京大会)と各地域で工夫がされ、研究を継続することができました。その後も名古屋大会、栃木大会、北海道大会と研究は引き継がれ、今年度、大阪大会を迎えました。私たち大阪の教員は、コロナ禍以前も含め、各大会の素晴らしい研究形態を継承しつつも、大阪らしい大会にすべく試行錯誤してまいりました。その中で、今大会は、分野ごとに「ビデオ視聴による提案」と「公開授業による提案」の組み合わせによる形態といたしました。今後も全国の皆様方からいただいたご意見もふまえ、大阪の社会科教育を推進してまいりたいと思います。この後、しばらくは大阪会場での開催はありませんが、これまでの大阪の研究を継続するため、研究集録を発行することといたしました。皆様方の研究にも少しでも役立てればと思っています。

昨年大阪では、「いのち輝く未来社会のデザイン」という主題で、「2025 大阪・関西万博」が開催されました。今大会の主題も「一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～」として、未来を考え創り出せる生徒の育成を目標に掲げました。この研究のプロセスと実践発表等をまとめ、成果と課題について総括することで、全国の社会科研究の未来につながればと思っています。

最後に、大阪大会の開催に当たり、ご支援・ご協力いただいたすべての皆様に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

## 研究について

副実行委員長 中辻 幸男  
(堺市立五箇荘中学校)

私は、平成 30 年近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会（以下、「近中社大阪大会」という。）の地理的分野責任者で、今回の大阪大会の研究全体の取りまとめと地理的分野責任者を担当させていただきました。

今回の研究は、大阪がこれまで大切にしてきた「生徒一人ひとり」の学びを保証していく研究を継承し、「問い」と「資料」により深い学びを研究した近中社大阪大会の成果を取り入れオール大阪で取り組むことを基本としました。さらにはコロナ後、令和の日本型学校教育の構築をめざした答申を受けて「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けた ICT の効果的な活用にも取り組むことも確認しました。大会は大会発表の研究に終わらず、参加者の皆さんが日頃の授業で活用できるもの、一部の研究指定校の実践だけでなく、どの学校で取り組めるものを念頭に研究を行いました。そして何よりも生徒が受けてよかったと思える授業、研究をやってよかったと研究員が思える研究、参加者が大阪に来て学べてよかったと感じる大会を心がけてきました。

本大会当日には各分野の研究の成果を様々な形式で発表させていただきましたが、その発表に至るまでの各分野の研究にかかわってくれた多くの先生方のプロセスをまとめたものは、かかわった先生方の宝物でもあると思います。ぜひとも皆様のお役に立てればと思います。

最後になりましたが、本大会開催にあたり、多くの皆様のご協力にお礼を申し上げるとともに研究にかかわってくれたすべての皆様に感謝申し上げます。

第 58 回全国中学校社会科教育研究大会 第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会  
大阪大会 開催要項

- 1 大会主題 一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～
- 2 期 日 令和 7 年 11 月 13 日（木）・14 日（金）
- 3 開催地 大阪府 大阪市・堺市
- 4 主 催 全国中学校社会科教育研究会 近畿中学校社会科教育研究会  
大阪府公立中学校社会科教育研究会 大阪市立中学校教育研究会社会部  
堺市立中学校教育研究会社会科部会
- 5 後 援 文部科学省  
滋賀県教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会  
和歌山県教育委員会 京都市教育委員会  
大阪府教育庁 大阪市教育委員会 堺市教育委員会  
大阪府各市町村教育委員会 大阪府町村教育長会 大阪府都市教育長協議会  
大阪府公立中学校長会 大阪市立中学校長会 堺市立中学校長会  
大阪府公立中学校教育研究会  
公益財団法人日本教育公務員弘済会大阪支部
- 6 会 場 1 日め〔全体会：開会行事・基調提案・記念講演・閉会行事〕  
興國高等学校（大阪市天王寺区寺田町 1－4－26）  
JR 環状線「寺田町」約 700m  
各線「天王寺」約 1 km  
近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」約 1.3km  
2 日め〔分科会：分野別提案・授業実践・研究協議・研究発表・閉会行事〕  
地理的分野：サンスクエア堺（堺市堺区田出井町 2－1）  
JR 阪和線「堺市」約 270m  
歴史的分野：興國高等学校（大阪市天王寺区寺田町 1－4－26）  
JR 環状線「寺田町」約 700m  
各線「天王寺」約 1 km  
近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」約 1.3km  
公民的分野：大阪市立天王寺中学校（大阪市天王寺区北河堀町 6－20）  
各線「天王寺」約 400m  
JR 環状線「寺田町」約 600m  
近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」約 700m

7 記念講演 演題「アフター万博におけるこれからの外食産業」  
講師 千房株式会社 代表取締役社長 中井 貫二 さん

8 講師 文部科学省 初等中等教育局 視学官 藤野 敦 さん  
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 小関 祐之 さん  
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 磯山 恭子 さん

9 日 程

【1日め】 令和7年11月13日（木）

（全体会：開会行事・基調提案・記念講演・閉会行事）

12:30	13:00	13:30	14:00	14:10	15:30	16:00	16:10	16:55	18:10	20:10	
受付	開会行事	基調提案	休憩	記念講演	閉会行事	移動・休憩	常任理事会	休憩	理事会	移動	レセプション

【2日め】 令和7年11月14日（金）

（分科会：分野別提案・授業実践・研究協議・研究発表・閉会行事）

●地理的分野 サンスクエア堺（堺市堺区田出井町2-1）

9:00	9:30	10:10	10:55	11:05	11:50	13:00	14:00	14:10	14:50	15:00	15:30	16:20	
受付	ビデオ視聴のポイント 分野別提案	授業実践①	休憩	授業実践②	昼食休憩	研究協議		休憩	指導助言	休憩	研究発表	講師講評	閉会行事
						班別協議	全体協議						

●歴史的分野 興國高等学校（大阪市天王寺区寺田町1-4-26）

8:40	9:10	9:50	11:05	11:55	13:05	14:15	14:45	14:55	15:25	16:15				
受付	分野別提案	休憩・生徒移動	公開授業	休憩・生徒移動	ビデオ視聴と解説 授業実践	昼食休憩	研究協議			指導助言	休憩	研究発表	講師講評	閉会行事
							授業者より	班別協議	全体協議					

●市民的分野 大阪市立天王寺中学校（大阪市天王寺区北河堀町6-20）

8:40	9:30	9:50	11:00	11:50	13:20	14:35	15:05	15:15	15:45	16:35				
受付	本日の説明	公開授業①	休憩・生徒移動	公開授業②	昼食・休憩 ※再入場 13:00	研究協議				指導助言	休憩	研究発表	講師講評	閉会行事
						午後 の 説明	分野 別 提 案	授 業 者 よ り	全 体 協 議					

# 『一人ひとりの未来につながる社会科の創造』

## ～問い・探究、そして参画～

第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会  
第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会  
研究部長 川村 由美子（大阪市立長吉西中学校）

### 1. はじめに ～研究主題決定の過程～

研究主題を決定するためにまずは、現在の世界の状況・日本の状況を整理するところから始めることとした。今日、「超スマート社会（Society5.0）」など、急速な技術革新による社会構造の変革や人口減少・高齢化・地球環境問題といったさまざまな課題が山積し、たった数年先の未来のことなど誰にも予測ができない「VUCA 時代」（不安定性・不確実性・複雑性・曖昧性）が到来している。現代の世界は貧困、難民問題、紛争やテロ、気候変動や資源の枯渇、コロナ禍等によるさらなる経済格差の広がりや歴史的背景を伴う人権問題など世界を分断するかのような課題があふれている。日本に焦点を当てても、人口減少社会による社会構造の変化や、都市への一極集中と地方の過疎化、そして経済格差による国民生活への影響など日本も経済、教育、世代間といった分断の課題がせまっている。しかし、そのような不確実な未来の中でも、2030 年の SDGs 達成に向け、一人ひとりと社会全体のウェルビーイングをめざそうとする国際協力が進められており、その国際協力の中で日本が果たすことができる役割もあるのだと私たちは考えている。「VUCA 時代」に生きる子どもたちに社会科としてどのような力を育成し、公民的資質を身につけた子どもたち自身が未来を創りだせるように考えることこそが我々、社会科教師の責務であると考えた。

令和 4 年 12 月 6 日、研究主題決定にあたり、全研究員で「どのような生徒を育てたいのか」についてグループワークを実施し、図 1 にまとめた。これらのワードをもとに研究主題を検討した。



図 1 令和 4 年 12 月 6 日 グループワークのテキストマイニングによるまとめ

### (1) 実行委員会による研究主題についての協議

研究の中心となる研究主題の設定は第2回実行委員会から開始した。これまでの大阪の研究を総括するなかで人権教育を中核とする「一人ひとり」の学びを保障してきた研究を継続していくことを最初に確認し、主題には「一人ひとり」のキーワードを入れることを決定した。その後、第3回実行委員会では「どのような子ども（生徒）を育てたいのか？」をテーマにグループで話し合いを実施した。主な意見は「未来志向」「参画」「民主制」など社会科がめざすべき方向性が多く出された。

### (2) 研究部による研究主題の協議

第3回実行委員会までの意見をもとに研究部において協議を重ねた。研究部でもさまざまなキーワードが出た。「OECD Education2030 プロジェクト」「主体的」「ウェルビーイング」「社会参加」「社会参画」「批判的思考力」「エージェンシー」など、生徒が社会科を学ぶことの意義、学んだことを何に活用してほしいのか、どのような未来を描けるようになってほしいのかなどを議論した。ここで明らかとなったことは、協議の中心も「生徒」の姿であった。その中で研究主題では、本大会におけるめざす子ども（生徒）像とめざす授業のゴールを、副題では研究理論と手法を明示することを決定した。

研究主題の協議における流れは「第58回全国中学校社会科教育大会大阪大会研究総論図」の左上に配置している「現在の世界の状況・日本の状況」の整理から始まった。これらを整理すると『VUCA時代』を生き抜くために必要なことは何か？』にまとめられた。そして、そのためにどのような生徒を育てるべきかを3点にまとめるとともに、これまでの大阪の研究とを融合させ本大会の研究主題とした。

## 2. これまでの大阪の研究

大阪府立中学校教育研究会社会部（以下、「大阪市社会部」という。）は昭和61（1986）年初めての全国大会となる第19回全国中学校社会科教育研究大会（以下、「全国大会」という。）で社会科学習における形成的評価の研究を始めた。その後、新たな教育課題の登場にともなって研究主題も変化を遂げ、平成5（1993）年の第26回全国大会では形成的評価から問題解決学習へ、平成7（1995）年の第1回近畿中学校社会科教育研究大会（以下、「近畿大会」という。）では課題学習へと視点を変えて発展させていった。

平成13（2001）年第34回全国大会は、大阪市社会部と大阪府公立中学校社会科教育研究会（以下、「府中社」という。）と共同で行った初めての大会で、副題に「参画」や「表現」を用いて現在につながる先駆的な取り組みを発表した。その後、大阪市社会部は学習指導要領に基づいた「指導と評価の一体化」を主題にして評価方法の研究を進めた。一方、府中社は、「協同的な学び」による授業研究に取りかかっていた。両研究会は、平成19（2007）年の第13回近畿大会を再び共催することとなり、そこで研究内容の充実と研究体制の拡大・発展をめざすために、両テーマを融合させた共同研究をすることとなった。この第13回近畿大会での共同研究が契機となり、大阪市社会部・堺市立中学校教育研究会社会科部会（以下、「堺市社会部」という。）、府中社が一体となって「オール大阪」での研究体制が整備され、共同研究が発展していくこととなった。平成25（2013）年の全国大会では大阪教育大学附属中学校（以下、「大教大附属中」という。）の三校（池田、天王寺、平野）も加わり、「オール大阪」で、第13回近畿大会の成果と課題をより深化させ、協同的な学びの手法を生かした研究をすすめ、撮影した授業ビデオを視聴することによる検討会や協同的な学びにおける社会科の授業づくり検討会を定期的に開催し、その成果を全国へ発表した。

平成30（2018）年の第24回近畿大会は、「オール大阪」での研究体制を引きつぎ、「問い」と「資料」

から深い学びにつながる授業手法について研究し、その成果を発表した。この大会では、深い学びについて「深い」の定義を次の3点と仮定し研究を行った。3点とは、①生徒の思考レベルの「深さ」、②社会的事象やできごと全般に対する興味・関心の「深さ」、③自分と社会とのつながりの「深さ」のことである。この大会の成果と課題を基調提案において、以下のように述べた。

社会科は内容教科であり、「深い学び」を実現させるためには、学習の内容がいかに深くなるか、にかかっていることが今回の研究を通して確認することができた。そして、学習内容が深くなることによって、私たちが仮定した生徒の思考レベルの「深さ」や、社会的事象やできごと全般に対する興味・関心の「深さ」、自分と社会とのつながりの「深さ」が「深く」なることも、確認することができた。  
(中略) 今回の私たちの研究発表は、「深い学び」を実現していく実践の一例であり、何をもって「深い学び」とし、どのように「深い学び」を実現させるのかという具体例を示せたことが成果である。今後は、さらに多くの実践例であったり、各分野、各単元での「問い(課題)」と「資料」を追究し、研究していくことが課題となる。

(平成30(2018年)11月 第24回近畿中学校社会科教育研究大会 基調提案より)

この大会における成果は、「問い」と「資料」から深い学びにつながる探究の入り口に立つ研究が確立できたことと、これまでの大阪が大切にしてきた「一人ひとり」を基盤としての内容教科として教科の本質をふまえた研究を同時進行することができたことである。第58回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会(以下、「本大会」という。)は、これらの成果と課題が研究の土台となった。

これまでの「オール大阪」の研究の中心は「生徒」である。人権教育を中核にした一人ひとりの学びを大切に形成するための授業検討を長年大阪では継続してきた。また、地域の垣根を越え、研究員同士がつながり互いの授業をビデオで検討しながら「オール大阪」で共同研究を進めてきた。そして大学の研究者に指導助言に入ってもらい、さまざまな先行研究を研究員が学びながら、常に授業を通して生徒たちが学びの中でどのように変容していったかを研究の成果として検討することを大切にしてきたことも研究の大きな柱である。本大会はこれまでの長年の大阪での研究と研究体制を受け継ぎながら進められてきたこと、そして、今、「VUCA時代」の中で社会科と社会科教師が果たす役割について「オール大阪」で研究してきたことの成果を全国の皆さまに発表する大会であった。

### 3. 研究主題について

本大会でのめざすべき生徒像とめざす授業のゴールを表現した。めざす生徒像は、次の3点を設定した。①未来を考え創り出せる生徒、②多様性を認め、協働する力をもつ生徒、③問題を提起し、問題解決の道筋を立てられる生徒である。

#### (1) 一人ひとり

大阪では「人権教育」を中核に、「すべての子ども(生徒)を取り残さない」学習を進めてきた。これまで大阪で開催してきた近畿大会及び全国大会においても、学力の程度に関わらず「すべての子ども(生徒)が参加できる授業」をめざし、授業の手法を工夫し、研究を重ねてきた。本大会でも、これまでの研究を継承し、「すべての子ども(生徒)を取り残さない」という意味で「一人ひとり」というキーワードを主題の先頭にもってきた。

## (2) 未来につながる

未来の形成者である市民を育てることが社会科の本質的理念である。また、2025年は大阪で「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとする大阪・関西万博が開催されることも念頭に置き、「未来につながる」と設定した。どのような「未来」を想定するかは、生徒たち一人ひとりの学びの先にあるものだと考えている。「VUCA 時代」の到来により、誰も解決したことのない新たな課題が「未来」に出現するであろうことは周知の事実である。予想できない未来に生徒たちをどのようにつなげていくか。未来につながる力を形成できる社会科を創造していくことを意義として込めた。

## (3) 社会科の創造

本大会では研究の中核に「単元を貫く問い」を設定したカリキュラム開発を据え、地理的分野、歴史的分野、公民的分野、3分野ともに単元ごとの「単元を貫く問い」の設定を研究し、「一人ひとりの未来につながる」よりよい「問い」を研究した。「創造」としたのは、3分野で「単元」そのものを見直す研究を行うという意義を込めた。特に、歴史的分野や公民的分野では、古代・中世、また政治・経済といった1つの単元が長いことを見直し、単元をどう設定するべきか、さらに、年間指導計画のなかで、あえて単元の軽重をつけることを提案し、実践発表できるように研究を進めた。

## 4. 副題について

副題である「～問い・探究、そして参画へ～」は研究方針を表現した。本大会の研究の中心は「生徒」である。これまで大阪では本大会の研究で生徒たちがどのように変容していくのか、生徒たちの学びの「振り返り」を積み重ねてきた。

### (1) 問い

ここでは、「単元を貫く問い」の設定と各時限での「問い」そして、軽重をつけた単元を設定することを意味している。単元設定については、3分野で年間指導計画の具体例を作成した。詳細は大会誌にまとめたのでご参照いただきたい。

### (2) 探究

ここでは、「単元を貫く問い」を生徒たちが「資料」や「議論」の中から「問い」の意義や本質を探っていくことを意味した。

### (3) そして参画へ

ここでは、「問い」「探究」の先に、「自分はどう考えるのか」「自分ならどうするのか」といった「問い」を自分事として捉えることを意味した。

## 5. めざす生徒像 ～問い続ける生徒～

めざす生徒像については以下の3点を設定している。

### (1) 未来を考え創り出せる生徒

「VUCA 時代」を生きていく生徒たちにとってこれからの時代は不安定・不確実・複雑・曖昧なものである。数年先でさえも見通せない時代の中で、自分はどう考えるべきか、自分ならどうするのかといった内省と自覚を行える力を育成し未来を考え創り出すことができる生徒をめざした。

## (2) 多様性を認め、協働する力をもつ生徒

現代社会は個人を尊重し、意見を表明する自由が認められ、少数派、多数派問わず多様性が認められる社会である。ただ、多様性はしばしば意見の対立やジレンマを生むことにもつながる。しかし、課題があったときに意見の対立やジレンマをそのままにしておくとも何も解決することができない。多様性を認めるからこそ対立やジレンマの中で他者と協働しながら合意形成の方向へ進んでいく生徒を育成することをめざした。

## (3) 問題を提起し、問題解決の道筋を立てられる生徒

本大会がめざす生徒は、ニュースや地域の課題、授業で学ぶ地理的分野、歴史的分野、公民的分野の内容に対して「なぜそうなったのか」「他の方法はなかったのか」と問いを立てられる姿勢をもち、様々な情報源を活用し、事実を整理した上で自分の考えを深めることができる生徒である。また、他者と意見を交流しながら、問題を放置せず、「どのようにすればよいか」を考え、現実的な道筋を立てて提案し、学習で得た知識を自分事として捉え、将来の社会にどのように貢献できるかを考えられる生徒をめざした。このように設定したのは、一方的に与えられた知識を受動的に理解するだけでは、提示された知識を形式的に受容し、表面的に理解するにとどまる生徒が育つだけであり、このことからの脱却を図りたいからであった。

以上3点についてめざす生徒像を述べたが、本大会ではこれら3点を集約し「問い続ける生徒」を共通のキーワードとした。授業の中では「問い」を大切にしているが、この「問い」に対する「答え」が出たとしても「本当にこの答えでいいのか」「もっと最適な答えがあるのではないかと問い続ける生徒をめざした。社会がどう変わろうと、常に自己と社会の関係を問い続け、解決策が今の段階では考えられなかったとしても問い続けることが未来を創り出せる持続可能な社会へつながると考えた。「問い続けること」が粘り強さや自己調整にもつながっていくのである。「問い続けること」ができる生徒を、授業の中で具体的にどのように育成していくか、また、その成果と課題については、各分野の総括をご参照いただきたい。

## 6. 社会参画力とは

### 1 社会参加の3類型

本大会において、「参画」とは、『問い』探究の先に、『自分はどう考えるのか』『自分ならどうするのか』といった『問い』を自分事として捉えることを意味し、この力を「社会参画力」として生徒に育成させることを研究の柱とした。ロジャー・ハートの「子どもの参画」<sup>[2]</sup>によると、「参画のはしご」として8つの段階を示している(表2)。このモデルは、子どもと地域や社会、大人との関係において、どのような参画の段階があるかを示しており、明確に参加と参画の区別をつけていない。社会参画は、社会参加と比較すると時間を要し、能力育成も発達段階に応じて段階的・計画的な指導が必要となる。本大会がめざす生徒像は「問い続ける生徒」であり、これは中学校段階だけで完結されるものではなく、今後もさまざまな問いや課題に対して常に最適解を求めていく生徒を想定した。

表2 「子どもの参画」

1	操り参画	非参画
2	お飾り参画	
3	形だけの参画	
4	子どもは仕事を割り当てられるが、情報は与えられている	参画の段階
5	子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる	
6	大人がしかけ、子どもと一緒に決定する	
7	子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する	
8	子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する	

(ロジャー・ハート(2020)「子どもの参画」萌文社 p.42 をもとに筆者作成) [2]

表2を踏まえて、社会科の授業における「参画」を検討したとき、藤原孝章氏の著作物から社会参加を参加の程度で類型しているもの(表3) [3]、公益財団法人日本教材文化研究財団が発行した「社会参加を視点にした中学校社会科の教材と評価に関する研究 No68」のうち中本和彦氏が執筆したもの(表4) [4][5][6]、星野尊乗氏と鵜沼秀雅氏の『社会参画力を高める社会科授業に関する研究－「提案型社会参画学習」の構想を通して－』(図2) [7]を参考とした。

表3 「社会参加の3類型」

消極的 (潜在的) 社会参加	ポストモダンな消費社会(モノよりも情報やサービスが価値を生み出す社会)では、大人・子どもに関わりなく(子どもが「未熟な大人」ではなく、一個の市民として)社会的行為主体となる。日常生活における消費行為は社会参加であり、社会的価値の創造、すなわち社会形成に関わっている。このことを反省的、自覚的に認識することが社会科の学習になる。
象徴的 ・模範的 社会参加	社会の問題事象には、問題発生および解決に関わる当事者(ステークホルダー)が数多く存在している。当事者は、原因と結果に関与し、複雑で相互関連的な関係を持っている。地球環境や紛争・戦争の問題のように、直接的な関与が困難な場合もある。このような社会に関わろうとするときに有効なのが、シミュレーションやロールプレイである。社会問題に対してシンボリックにあるいは模範的に関わるという意味で象徴的・模範的社会参加といえる。
積極的 社会参加・ 社会行動	公園づくり、ゴミ清掃など地域の課題やコミュニティの形成に子どもたちが直接関わるものである。募金や寄付もこれにあたる。いわゆる狭義の社会参加である。

藤原孝章編著(2009)『時事問題学習の理論と実践－国際理解・シティズンシップを育む社会科教育－』 [3]

表4 「社会参加としての社会科授業構成論の3類型」

	自己の行為を反省的に吟味する消極的社会参加授業論	社会問題に対して模擬的に提案する象徴的・模擬的社会参加授業論	地域やコミュニティの課題に対して行動する積極的社会参加授業論
目標	消極的社会参加 (自己の反省)	象徴的・模擬的社会参加 (学校内での評価・提案)	積極的社会参加・社会行動 (地域やコミュニティでの提案・参加)
内容	他所・過去の社会問題と此所・今の社会問題およびそれに関する個人や集団の社会的行為	ローカル・グローバルな社会問題の原因や解決策およびそれらに関わる当事者の考えや価値観と政治的意思決定・提案 (ロールプレイやシミュレーションも含む)	地域やコミュニティの現実的課題とそれらに関わる政治的意思決定・提案や活動への参加
方法	①現代の社会問題の把握 ②地理的・歴史的な社会問題の事実認識・価値分析 ③現代の社会問題における自己の反省的吟味	①社会問題の把握 ②社会問題の分析(現認の探求と当事者の価値分析) ③解決策の探求と模擬的な政治的意思決定 ④間接的な提案	①地域やコミュニティにおける課題の把握 ②課題の分析(原因の探求・調査) ③解決策の探求と現実的な政治的意思決定 ④地域やコミュニティに向けた直接的な提案・活動への参加 (サービスマーケティングなど)

中本和彦(2016)『社会参加を視点にした中学校社会科の教材と評価に関する研究 第2章社会参加としての社会科授業構成論』<sup>[4][5][6]</sup>

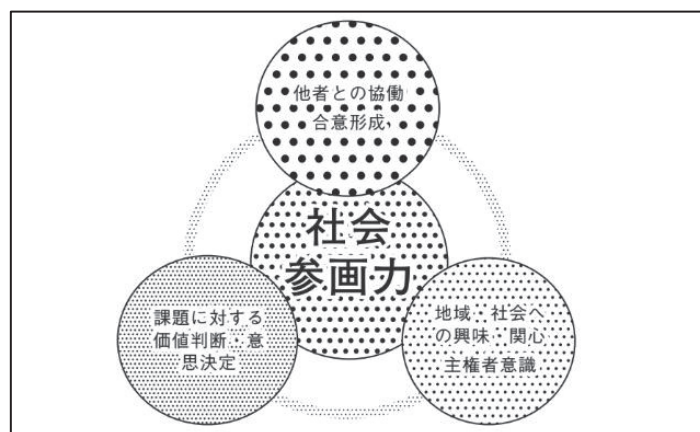


図2 「社会参画力の構成要素」

星野尊乗、鶴沼秀雅(2018)『社会参画力を高める社会科授業に関する研究 - 「提案型社会参画学習」の構想を通して-』<sup>[7]</sup>

### (1) 消極的(潜在的)社会参加

藤原(2010)の「3つの社会参加」をもとに、中本(2016)は「社会参加としての社会科授業構成論」として、表3のように分類している。これによると、「自己の行為を反省的に吟味する消極的社会参加授業論」においては、「自己の反省」を目標としている。ここでは、授業において「時間軸・空間軸の中で、過去と今、他所と此所を柔軟に渡り、過去や他所で起こった社会問題の認識を手段とし、今、此所でおこっている社会問題と自己の関わりの認識。自覚と反省を目的」<sup>[4]</sup>としている。したがって、本大会では、「消極的(潜在的)社会参加」を、「問いに対して『自分ならどう考える』のかという社会認識を内省・自覚しようとするもの」と定義した。

## (2) 象徴的・模範的社会参加

同様に、「社会問題に対して模範的に提案する象徴的・模範的社会参加授業論」においては、目標を「学校内で評価・提案」することを目標としている。ここでは、授業において「ある当事者の立場から模範的・間接的に行われる政治的意思決定・提案する」<sup>[5]</sup>ものとしている。したがって、本大会では、「象徴的・模範的社会参加」を、「問いに対して、他者との合意形成及び自分の考えがどう変化したのかという自身の意思決定を行うもの」と定義した。

## (3) 積極的社会参加・社会行動

同様に、「地域やコミュニティの課題に対して行動する積極的社会参加授業論」においては、目標を「地域やコミュニティでの提案・参加」としている。ここでは、授業においてなされる提案は「現実的な提案が求められ、課題の分析、解決策の探求と政治的意思決定の段階においても地域の人々から情報を集めたり、行政の担当者に相談したりするなど、地域社会と連携した『協働』が求め」<sup>[6]</sup>られる。したがって、本大会では「積極的社会参加・社会行動」を「『自分ならどうするか、自分ならどう行動するか』という行動を考えること」と定義した。本大会では中学生が実際に行動を起こし参画していくことは現実的ではないと考えた。「積極的社会参加・社会行動」において、行動する内容を考えることで十分に参画に達成していると考えている。さらに、その行動が本当に実現可能かどうかは生徒自身が「問い続ける」ことでより現実的な行動に進化していくものだと考えた。

以上3つに分けたが、研究を進めていく中で、必ずしも3つのいずれかに区分されるだけでなく、授業過程において、それぞれの区分を行き来しながら捉えるということもありえる。

## (4) 本大会における社会参画力

図2における社会参画力の構成要素によると「課題に対する価値判断・意思決定」「他者との協働、合意形成」「地域・社会への興味・関心、主権者意識」とある。これらを本大会では「課題に対する価値判断・意思決定」と「他者との協働、合意形成」について、「『消極的（潜在的）社会参加』の中で内省・自覚をもって社会認識しようとしているか」、また「象徴的・模範的社会参加」について、「自分の考えがどう変化したか意思決定できたか、他者との合意形成ができていないか」と設定した。さらに「地域・社会への興味・関心、主権者意識」については、「『積極的社会参加・社会行動』の中で、自分ならどうするか、自分ならどう行動するか」と設定した。中学生段階で、具体的な行動までを求めることは生徒の発達段階においては無責任な行動になりかねない。それよりも、自己の中の社会と社会の中の自己を常にリフレクションしながら問い続ける生徒を育成する授業を実践することが、生徒の社会参画力を育成する授業である本大会では考えた。そのため、社会参画力を育成するために授業では、参画の問いを設定（「7. めざす授業」で後述）している。

## 7. めざす授業～問いと資料で授業をつくる～

### 1 単元構造図

#### (1) 作成の目的

本大会では、「問い続ける生徒」を育成するためにはどのような授業構成が適切であるかを研究してきた。社会科の授業において、生徒に「問い続け」させるためには、問い続けられるための「問い」と「資料」が必要である。生徒が資料を基に探究するとき、問いを自分事として捉えていくためには、

教師から発せられる問いが生徒の探究にとって事象を的確に捉えた問いでなければ、探究することは難しい。そのため、単元構造図を作成することは、生徒教師双方にとって、問いの妥当性を的確なものとしていくために必要であると考え、単元構造図を作成するところから授業づくりをスタートした。

## (2) 作成の意図

単元構造図を作成するためには、「教師の教材研究」が重要となる。その単元で生徒に学ばせたいことは何か。生徒が学ぶべき、獲得すべき知識は何か。学ばせたいことを羅列するのではなくシンプルな言葉で言い換えることができるまで教材研究を進めていくことが必要である。この学ばせたいことが単元の問いの答えとなる。また、1時間ごとの授業から授業を構成するのではなく、まず単元全体を構成し、何を生徒に考えさせたいのかを明確にしたうえで、それらを1時間ごとの授業に分けていくという順番で授業づくりを行っている。このような順番で単元の授業を構成していくことで、生徒の知識と思考に流れができ、1時間ごとの授業がスムーズにつながっていくことができると考えた。

## (3) 授業は「問い」から始まる

本大会がめざす「問い続ける生徒」は思考訓練を繰り返す必要がある。生徒に思考訓練させるためには、生徒自身が問いを発見していくことが大切である。教師の教材研究によりその単元で学ぶべき知識の単元構造図が完成するが、その構造図と対になるように問いの構造図を作成した。この問いの構造図が授業の中で生徒が探究していく問いとなっていく。問いは教師が考えるが、授業構成を工夫し、生徒が資料を探究する過程の中で、生徒自らが問いを発見していくという時間を設けた。具体的には、各分野提案に指導案に掲載しており、この活動は「問立て」の時間として設定した。

## 2 問いと答え

本大会では「問い」について表5のように分類を行った。本大会の中心である「社会参画力」をつけるために「PQ」という参画する問いを設定した。参画する問いは生徒にとって、「本当にこの答えでいいのか」「もっと別の考え方があるのではないか」と頭を悩ます問いとなっているので、問いによっては「PA」を不要とするオープンエンドの場合もある。

表5 全中社大阪大会における問いと答えの分類について

略 称	内 容	備 考
<b>MQ</b> (Main Question)	単元を貫く問い	
<b>MQ'</b>	単元の問い	生徒のための単元を貫く問い (駆動する問い)
<b>MA</b> (Main Answer)	単元を貫く問いの答え	
<b>SQ</b> (Sub Question)	本時の問い	MAにたどり着くための時限ごとの問い
<b>SA</b> (Sub Answer)	本時の問いの答え	MAを分解したもの
<b>PQ</b> (Participation Question)	参画する問い	
<b>PA</b> (Participation Answer)	参画する問いの答え	オープンエンドの問いについては不要

(筆者作成)

## 8. 年間指導計画

本大会では約2年かけて地理的分野 115 時間、歴史的分野 135 時間、公民的分野 100 時間の年間指導計画としてすべての単元において「単元を貫く問い」の作成をめざした。この年間指導計画を作成したねらいは次の3点である。

### 1 カリキュラムによる軽重をつけるため

学習指導要領が定める標準時数の中で、参画の問いも含めたすべての単元を履修し定期テストも実施するためには、カリキュラムに軽重をつける必要性があった。1時間の授業で教科書見開き2ページ分を終えるなどといった授業計画を行っていたら、社会科を構造的に学習することはできないし生徒たちの知識や思考が授業ごとに途切れてしまう。一方、すべての単元を同じ時間数で実施すると、標準時数では足りなくなってしまう。そこで、3年間分の年間指導計画を作成することで、地理的分野・歴史的分野・公民的分野のつながりを意識し、単元の時間数に軽重をつけることで標準時数を守りながらカリキュラムを履修できるように工夫を行った。

### 2 研究会としての資質向上

年間指導計画の作成は各分野の研究者が単元を分担して作成を行った。研究部だけの少人数の研究ではなく、より多くの研究者が自ら単元構造図を作成し、単元の問いと答えを考え、適切な資料を準備することで研究者の資質が向上した。また、作成した年間指導計画は各分野会で何度も協議を行いブラッシュアップも行った。

### 3 「問い続ける」教師

本大会では「問い続けることができる」生徒をめざして研究を進めてきた。この「問い続ける」は教師側にも必要とされる資質である。年間指導計画は作成後に研究者がそれぞれの勤務校で実践を行い、生徒たちの1枚ポートフォリオを研究会に持ち寄り単元の問いが適切であったか、資料の内容・量の妥当性などをさらに検討を重ねた。作成ができたから終了なのではなく、よりよい授業のために私たち教師も「問い続ける」姿勢をもつことがよりよい授業につながっていくと本大会では考えているし、本大会終了後も、実践を継続し、年間指導計画のブラッシュアップを図っていく。

## 9. 学習指導案について ～指導案は仮説である～

### 1 学習指導案の様式

本大会では学習指導案の様式や内容についても検討を行った。本大会の研究を一過性のものとするのではなく、さまざまな学校でも実践できるようにするためにはどうすればいいのか。大会では実際の授業を参観していただくが、大会の時程を考えると授業は2時間分の参観が限界である。これだけの参観では授業を再現することが難しいのではないかと考えた。そもそも時間や距離の制約で参観できなかった先生方に本大会の内容をご理解いただくためにはどうすればいいのか。これらを解決するために、本大会では、学習指導案の再現性を高めることでこの課題を解決できるのではないかと考えた。具体的には学習指導案を2段階構成にしている。1段階めの学習指導案の項目は「単元名」「単元目標」「生徒観」「教材観」「指導観」「単元の評価規準」「単元の指導計画」「引用・参考文献」である。

なお、大会誌では限りがあるため、本大会において、クラウド（Google ドライブ）を活用し、この点についてクリアにさせた。特に、学習指導案の2段階めについては、クラウドのリンク先を大会誌に掲載し、図3のような1時間ごとの細案について閲覧できるようにした。このことにより、実践の直前ま

で検討を重ねることができ、事前授業の充実、大会当日、撮影当日の授業に活かすことができた。

	発問 (◎○・)	教授・学習活動	資料	生徒から引き出したい知識
導入	<p>・南アメリカ州の国名や自然地形について答えなさい</p> <p>・南アメリカ州にどのようなイメージを持っていますか？</p> <p>◎なぜ、南アメリカ州は貧富の差が大きい国が多いのだろうか？</p>	<p>T 宿題の発問をする</p> <p>S 答える</p> <p>T 発問する</p> <p>S イメージを答える</p> <p>T ジニ係数の説明をする</p> <p>T 発問して、予想させる</p> <p>S 予想を考える</p>	<p>宿題プリント</p> <p>スライド資料</p> <p>単元プリント (ポートフォリオ)</p>	<p>・国名 ブラジルなど7か国</p> <p>・自然地形 アンデス山脈やアマゾン川など</p> <p>・サッカーやサンバが有名</p> <p>・植民地支配をされていた</p> <p>・2016年リオオリンピック</p> <p>・ジニ係数より格差が大きい (予想される生徒の反応)</p> <p>・植民地支配されていたから</p> <p>・産業が遅れている など</p>
展開 I	<p>・このコーヒー豆の原産地は？</p> <p>◎なぜ、南アメリカ州原産ではないコーヒーがブラジルで盛んに栽培されているのだろうか？</p>	<p>T 発問する</p> <p>S 答える</p> <p>T 発問して、予想させる</p> <p>S 予想を考える</p>	<p>コーヒー豆</p> <p>スライド資料</p>	<p>・コーヒー豆の原産地は南アメリカ州が多い (予想される生徒の反応)</p> <p>・ヨーロッパから伝わったなど</p>

図3 「南アメリカ州」についての学習指導案の細案（筆者作成）

## 2 指導案は仮説である

本大会では「指導案は仮説である」と位置づけ学習指導案の細案作成に取り組んだ。本大会の研究主題の副題に「問い・探究」とあるように授業は問いを中心に構成されている。問いは細案では「発問」と表記している。この「発問」に対して「資料」を用い、「教授・学習活動」という探究を通して、「生徒から引き出したい知識」につながる。「生徒から引き出したい知識」が問いに対する答えとなっている。「発問」と「生徒から引き出したい知識」の繰り返しが小さな仮説となっており、この通りの知識が引き出せないとなると「問い」や「資料」が適切ではないことが証明されるのである。その逆もしかりであり、細案通りの知識が引き出せるということは「問い」や「資料」の適切さの証明になるのである。「発問」の「◎」は単元の問い (MQ、MQ´) や本時の問い (SQ) を、「○」は本時の問いをさらに分解した問いや本時の問いに迫るための簡単な問いを表している。この細案を実践することでより再現性の高い授業やそれぞれの生徒に即した授業づくりに役立てると本大会では考えている。

## 10. 研究の成果と課題

### 1 成果

#### (1) めざす生徒像を中心とした生徒の変容

本大会の中心は常に生徒であった。知識の単元構造図、問いの単元構造図の作成は目の前にいる生徒たちに、どのような力をつけさせたいかを常に意識しながら作成してきた。単元を貫く問いである「MQ」も生徒がより考えたいような問いへと変化球をつけた「MQ´」にするために教材研究を重ねてきた。1枚ポートフォリオを丁寧にみとることで生徒の思考の変遷を見逃さず、実践した1枚ポートフォリオを研究会に持ち寄り、さらなる問いの開発もしてきた。これらはすべて生徒が社会参画力を身につけるための研究であり、生徒たちからも「もっと考えたい」「この場合ならどのようにすればいいのだろうか」といった自発的に問いを探究しようとする声があがった授業が多い。この生徒の姿こそが本大会の成果の1つであった。

## (2) 社会参画力の定義付け

本大会では社会参画力を定義付けできたことも成果であった。ロジャー(2000)、藤原(2010)、中本(2016)を参考にしながら、「消極的(潜在的)社会参加」、「象徴的・模範的社会参加」、「積極的社会参加・社会行動」を達成できるための授業を単元ごとに開発してきた。また、参画についても行動することに重点をおくのではなく、中学生の発達段階における「自分ならどうするか、自分ならどう行動するか」という行動を考えることと定義できたことも成果であった。中学校の3年間の学びをそこで切ってしまう、思考を停止させるのではなく、「本当にこれでいいのか」「もっと最適な考え方があるのではないか」と将来にわたって「問い続ける」ことを意識できるようにすることに重点をおいたことで、研究主題にあるように「未来につながる」授業構成にすることができた。

## (3) 単元構造図による深い学び ～問い・探究、そして参画へ～

単元構造図を作成することから授業づくりを始めること、すべての授業は問いから始まり、問いを生徒自身が資料を用い探究することを毎時間繰り返すことで単元の学びを深めていくことができたことも成果であった。教師の教材研究の質が単元構造図の質につながり、単元構造図の質がより最良の問いにつながっていくことが確認できた。

## (4) 研究会・教師の資質向上とオール大阪のネットワークの構築

約3年間の研究の中で、単元構造図の作成、参画の問いの作成、年間指導計画作成等を通して、研究会・教師の資質向上ができたことが成果である。また、本大会ではGoogle Classroomを活用し、研究成果を常に全研究員で共有してきた。勤務校における校務も多用にある中、オンライン会議も活用しながら本大会を研究員それぞれが「自分事」として捉え、所属する研究分野だけでなく3分野それぞれの会議に熱心に参加しながら同僚性を高めることができたことは今後の大阪の研究にとっても未来につながる大きな成果であった。

## 2 課題

### (1) 年間指導計画の追実践が未達

本大会では年間指導計画を作成し研究員がそれぞれの勤務校で実践を行い、1枚ポートフォリオを研究会に持ち寄りさらに単元の開発に取り組んできた。しかし、まだすべての年間指導計画を実践できていないことが課題である。こちらについては今後も大阪の中で追実践を実施し、さらに単元の開発に取り組む予定である。

### (2) 社会参画力における評価の研究が不十分

本大会において評価の研究が不十分であった。単元構造図、問いの作成、探究を進めるための資料の収集や提示の仕方、参画の問いなど研究を多岐にわたって進めてきた。しかし、評価規準については、1枚ポートフォリオでの見取りを中心とすることで行っており、また1枚ポートフォリオの記入も授業時間の中で探究の時間を確保するあまり家庭学習となる場面も多くあった。提示する資料の数が適切なかどうかや探究の時間と生徒が1枚ポートフォリオに記入できる時間の確保の両立については課題が残った。

最後に、本大会では「問い続ける生徒」の育成を中核におき研究を進めてきたが、「問い続ける生徒」の育成には、「問い続ける教師」が不可欠であると考えている。私たち教師こそが、「この問いでいいの

だろうか」「もっと適切な資料はないだろうか」と常に問い続け学び続けることこそ、生徒にとってもっとも大切なことである。

### 11. 大会をふり返って 次の研究へ向けて

実行委員会・研究部の立ち上げから始まり約3年間にわたって本大会の実施に向けてオール大阪で取り組んだ。大阪の研究を牽引された先輩方の研究を継承しつつ、次世代の社会科教員へと研究をつないでいくことも本大会の大きな役割だと考えていた。教員の働き方改革が話題にのぼる中、自校での校務と研究、それぞれの生活のバランスを取りながら、かつ、持続可能な研究会のあり方を模索した。前回(2013年)の大阪大会と比較するとオンラインでの会議が増え、データのやり取りをクラウドを用いて行い、研究の履歴をオンライン上で共有できたことは大きな進歩であった。ただ、オンラインだけに頼らず、全実行委員での対面での研修や会議も厳選して行い、研究部の進捗共有会議などではできるだけ対面で実施し連携が密接に取れるように会議のあり方も工夫して行った。また大会2日目の分野別の分科会提案については、ライブで行う授業提案、単元全体をビデオ撮影しそれらを編集して行ったビデオ授業提案など、全国大会がコロナ禍を通して経験したことを教訓として、大会実施のあり方に一石を投じた。この形式については、大会実施前からさまざまな賛否があったが、アンケートを取りまとめたところ、好評であったと実行委員会では捉えている。

また、本大会の中心軸は常に「生徒」であった。生徒たちが社会科授業を通して、常に「問い続ける」ことができるようにするためにはどうすればいいのかを必死に研究してきた。私たちは今後もオール大阪でこの問いを問い続けていきたい。

最後に、本大会に向けてさまざまなご協力をくださった皆さま、ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます、大会のふり返りとします。ありがとうございました。

### 引用文献・参考文献

- [1]辻純也(2018)『「自ら学ぶ力を育み、未来を拓く社会科学習」～ひと・もの・ことをつなぐ学習の創造～』、「第24回近畿中学校教育研究大会大阪大会基調提案」、p.17
- [2]ロジャー・ハート(2000)「子どもの参画」、萌文社、p.42
- [3]藤原孝章編著(2009)「時事問題学習の理論と実践－国際理解・シティズンシップを育む社会科教育－」、福村出版、p.155
- [4][5][6]中本和彦(2016)『社会参加を視点にした中学校社会科の教材と評価に関する研究 第2章 社会参加としての社会科授業構成論』、「公益財団法人日本教材文化研究財団調査研究シリーズ No.68」、p.16、17、18
- [7]星野尊乗、鶴沼秀雅(2018)『社会参画力を高める社会科授業に関する研究－「提案型社会参画学習」の構想を通して－』、「福島大学総合教育研究センター紀要第25号」、p.34
- ・川村由美子(2025)「第58回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会、第31回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会基調提案」

(参考資料1) 主なオール大阪での取り組み日程と内容について

ここに掲載している他にも地理・歴史・公民分野会を随時開催し、授業検討会、年間指導計画検討会を実施してきた。また研究の進捗については、研究部長、分野委員長、授業者で構成する研究部会を随時開催し分野ごとの研究と全体研究がずれないように工夫を行った。

開催日時		主な内容
R4. 6. 23	第1回実行委員会	これまでの研究の総括
R4. 8. 24	第2回実行委員会	研究員の顔合わせ、研究主題の検討
R4. 12. 6	第3回実行委員会	大会要項を検討、研究体制の検討
R5. 2. 24	第4回実行委員会	研究主題についての進捗を報告・検討
R5. 8. 23	第5回実行委員会	研究主題、研究方針を共有 指導助言者による全体研修
R6. 3. 7	第6回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告
R6. 5. 14	第7回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告
R6. 8. 2	第8回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告 指導助言者による全体研修
R6. 10. 21	第9回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告
R7. 2. 1	第10回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告
R7. 5. 8	第11回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告 基調提案の報告
R7. 7. 8	第12回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告 基調提案の報告
R7. 8. 5	第13回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告 基調提案の報告
R7. 10. 7	第14回実行委員会	研究進捗確認・分野研究の報告 分野別発表リハーサル

# 第58回 全国中学校社会科教育研究大会 大阪大会 研究総論図

## 現在の世界の状況

- Society 5.0 と呼ばれる社会の変化
- 「VUCA 時代」  
貧困・難民・紛争/人口気候変動/資源の枯渇/人権/経済格差…
- 2030 年の SDGs 達成に向けた国際協力
- コロナ禍等による分断・教育の分断

## 現在の日本の状況

- 人口減少社会による社会構造の変化
- 都市への一極集中と地方の過疎化
- 経済格差による国民生活の影響
- 国際社会の中での日本の役割

## これまでの大阪の研究

- 人権教育を中核にした一人ひとりを大切にすることを社会科学学習
- 一人ひとりをみつめ、ともに学ぶ社会科学学習(2013年)
- 協同的な学び
- 自ら学ぶ力を育み、未来を拓く社会科学学習(2018年)
- 深い学び、「問い」と「資料」

VUCA 時代を生き抜くために必要なことは何か？

育てたい生徒像を具現化するために、  
中学校の社会科教育としてどのような授業を構造化していくべきか

- 未来を考え創り出せる生徒
- 多様性を認め、協働する力をもつ生徒
- 問題を提起し、問題解決の道筋を立てられる生徒

大阪大会 大会主題

一人ひとりの未来につながる社会科の創造  
～問い・探究、そして参画へ～

自分事として問い続ける生徒  
「本当にこれでいいのか？」

## 問いと資料で授業をつくる

- 単元を貫く問い(MQ)  
→ 生徒が素朴に思う「なぜ・何」の形で(MQ)
- 単元を貫く問いの答え(MA)  
…単元に対する教師自身かたどり着いた最も説得ある仮説や解釈
- 本時の問い(SQ)と本時の答え(SA)  
…4W1Hをなぜの形で問う
- 参画する問い(PQ)と参画の答え(PA)  
…本質的な問いを最終授業で問う
- 資料は①問いを見つげるための資料, ②仮説をたてさせるための資料,  
③ ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- 問いを資料の読解で探究していく授業構成

## めざす授業

- 問いを中心に単元を構造化する
- 第1次に単元を貫く問いを設定する
- 第2次から単元を貫く問いを分解した本時の問いについて資料をもとに探究していく
- 資料の読解を授業の中心に据える
- 単元の最後に参画の問いを探究する
- 1枚ポートフォリオを活用し、生徒自身が探究の中で問いについて自分の言葉で説明できるようにする

### 研究主題

- 一人ひとり=すべての子ども(生徒)を取り残さない
- 未来につながる=未来の形成者である市民を育てることが社会科の本質的理念である
- 社会科の創造=3年間の社会科授業を「単元」ごとにカリキュラム開発を行う
- 「一人ひとりの未来につながる」よりよい「問い」を研究

### 社会参画力とは

- 課題に対する価値判断・意思決定
- 他者との協働、合意形成
- 地域・社会への興味・関心、主権者意識

### 授業の分類

- 地理的分野の研究・公開授業
- 歴史的分野の研究・公開授業
- 公民的分野の研究・公開授業



# 地 理 的 分 野



### 1 はじめに

地理的分野では、「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業～『科学的探求』と『リフレクション』を通じて～」をテーマに、午前は分野別提案と2つの授業実践を報告し、午後は班別協議、全体協議、指導助言、研究発表、講師講評を行なった。2つの授業実践は、ビデオ収録による発表で、単元全体や複数の単元、1年生から2年生の変化など子どもの変容に焦点を当て、ビデオ発表だからできる長いスパンでの研究を発表した。班別協議では約200名の参加者が30班に分かれ、ファシリテーターを中心に5つの協議の柱を中心に積極的な協議が行われ、全体協議では「ふきだしくん」という参加者の意見を一齐に可視化できるサービスを利用し、意見が多かった内容について返答した。龍谷大学中本和彦教授の指導助言では、「Whatの問いを中核にした地理授業～問い続ける社会科授業をめざして～」と題して、地理的分野会の提案と実践に理論的価値づけをしていただいた。

### 2 地理的分野の研究のプロセス

地理的分野会は、「授業を中心とした研究」と「持続可能な研究」の2つを柱に研究を進めていった。1つめの「授業を中心とした研究」は、公開授業と研究討議を中心とした研究とし、めの前の生徒と授業者の学びに重きを置いた研究をめざした。2つめの「持続可能な研究」は、できる限り勤務時間内で会議を終わらせたり、土日などの休日に会議設定をせず、研究疲れにならない、また研究したいなと思える研究をめざした。

全中社大阪大会の研究主題である「一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～」が決まったあと、地理的分野会では「参画」をテーマに研究を進めていった。龍谷大学の中本和彦教授のご指導の下、社会参加の程度をもとに分類した「社会参加の3類型」<sup>[1]</sup>に注目し、「参画」の授業とはどのようなものか、そして、その授業を具体的にどのように開発するかをテーマとした。「社会参加の3類型」の研究と授業実践を行っていく中で、自己の行為を反省的に吟味する「消極的（潜在的）社会参加」、社会問題に模範的に提案する「象徴的・模範的社会参加」、地域やコミュニティの課題に対して行動する「積極的社会参加・社会行動」のうち、1つめの「消極的（潜在的）社会参加」に焦点を当てることにした。

授業研究では、小谷教諭が「アフリカ州」、久井教諭が「関東地方」を発表することを決め、日本地誌では単元のつながりを踏まえ、その前に学習する「中国・四国地方」「東北地方」の授業開発も併せて行った。開発した授業は、大阪市と堺市の研究員を中心に実践しあい、中本教授の指導と研究員の研究討議で、ブラッシュアップしていった。ビデオ発表ということで、ほとんどの収録が1学期ということで、授業者は急ピッチで授業を仕上げ、収録に挑んだ。収録後は、当日の発表に向け、ビデオ業者や編集をサポートする研究員と連絡を密にとり、ビデオ編集や資料作成に取り組んだ。

分野別提案は、平成30年度に行われた第24回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会の成果を踏まえ、研究対象の「問い・探究」については森分孝治氏の「科学的探求」<sup>[2]</sup>を引き続き研究した。また、「参画」については、「消極的（潜在的）社会参加」を授業化した中本教授の論文<sup>[3]</sup>を中心に研究

した。そして、分野の研究主題を両氏の研究を踏まえて『自覚的・内省的に社会を認識し「問い続ける」子どもを育てる地理の授業～「科学的探求」と「リフレクション」を通じて～』とした。

表 1 地理的分野の研究会（筆者作成）

月/日	分野会・打ち合わせ	内 容
2023（令和5）年度		
7/28	第1回地理的分野 分野会	講演「社会参画に関わる教材開発のポイント」 龍谷大 中本教授
9/15	第2回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「アフリカ州」 授業者 赤坂台中 畠中教諭
11/7	第3回地理的分野 分野会 第1回地理的分野 研究部会	研究授業・研究討議「東北地方」 授業者 金岡南中 水野教諭・柿原主幹教諭 研究方針の検討
1/18	府中社教育研究会	講演「どうする？社会参画の授業-問い・探究、そして参画へ-」 龍谷大 中本教授
2/8	第4回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「アフリカ州」・「東北地方」 授業者 大桐中 小谷教諭・原田教諭 講演・演習 「どうする？知識の構造図！」 龍谷大 中本教授
2024（令和6）年度		
6/5	第2回地理的分野 研究部会	研究スケジュール等の検討
6/28	第5回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「関東地方」 授業者 金岡南中 柿原主幹教諭 講演「「問い・探究、そして参画へ」に向けた社会科授業づくり基礎論-なぜ、「なぜ」の問いや「構造図」が必要なのか?-」 講師 龍谷大 中本教授
9/10	第6回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「関東地方」 授業者 赤坂台中 畠中教諭
10/21	第7回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「関東地方」 授業者 大桐中 小谷教諭
11/8	全中社 北海道大会	研究発表 「社会」と「自分」を「問い続ける」子どもを育てる地理の授業～単元 中国・四国地方「四国新幹線に賛成？反対？」 を例に～ 発表者 金岡南中 柿原主幹教諭
11/28	第8回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「アフリカ州」 授業者 宮山台中 久井教諭 講義「都市について」 龍谷大 中本教授
12/11	第9回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「東北地方」 授業者 喜連中 末森主席 講義「オーストラリアの授業は、なぜ指導案通り進んだか？」 龍谷大 中本教授
12/25	検討会	「関東地方」の教材開発
12/26	検討会	「関東地方」の教材開発 龍谷大 中本教授
1/23	第10回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「関東地方」 授業者 宮山台中 久井教諭 指導助言 龍谷大 中本教授
2/1	3分野合同研修会	講演「社会科教育実践研究の不易と流行-単元構造化の意味」 大教大 峯教授
2/3	第11回地理的分野 分野会	研究授業・研究討議「アフリカ州」 授業者 宮山台中 久井教諭 指導助言 龍谷大 中本教授
2/27	検討会	分野別提案、関東地方の授業について 龍谷大 中本教授
2025（令和7）年度		
5/20	第12回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「世界各地の人々の生活と環境」 授業者 大桐中 小谷教諭
6/2	第13回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「中国・四国地方」 授業者 宮山台中 久井教諭 指導助言 龍谷大 中本教授
6/23	第14回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「東北地方」 授業者 宮山台中 久井教諭

6/30	第15回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「アフリカ州①」 授業者 大桐中 小谷教諭 指導助言 龍谷大 中本教授
	第16回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「関東地方①」 授業者 宮山台中 久井教諭
7/3	第17回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「アフリカ州②③」 授業者 大桐中 小谷教諭
7/7	第18回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「アフリカ州④」 授業者 大桐中 小谷教諭
7/17	第19回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「関東地方②」 授業者 宮山台中 久井教諭 指導助言 龍谷大 中本教授
7/22	第20回地理的分野 分野会	冊子原稿 読み合わせ
8/5	実行委員会 全体会・分野会	ビデオ発表方法の検討 指導助言 龍谷大 中本教授
8/19	地理的分野全体打ち合わせ	ビデオ視聴と研究協議の進め方について
9/16	検討会	ビデオ発表方法の検討 指導助言 龍谷大 中本教授
9/29	第21回地理的分野 分野会	授業収録・研究討議「近畿地方」 授業者 宮山台中 久井教諭
10/7	地理的分野 リハーサル①	授業実践①「アフリカ州」 発表者 大桐中 小谷教諭、 班別協議、全体協議、指導助言 龍谷大 中本教授
10/28	地理的分野 リハーサル②	分野別提案 発表者 金岡南中 柿原主幹教諭、 授業実践②「関東地方」 発表者 宮山台中 久井教諭、班別協議、全体協議
10/31	検討会	分野別提案、授業実践①、授業実践② 検討会 指導助言 龍谷大 中本教授
11/7	検討会	当日配布資料 最終確認
11/13	全中社大阪大会①	全体会
11/14	全中社大阪大会②	地理的分野会 当日

### 3 当日の地理的分野分野別提案について

#### (1) はじめに

全中社大阪大会において発表した「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業 —『科学的探求』と『リフレクション』を通じて—」の実践および研究内容をまとめたものである。本研究は地理的分野会が約三年間にわたって継続してきた取り組みであり、VUCA時代と呼ばれる不確実な社会において必要とされる市民性育成という観点から、地理教育における「参画」の意味を捉え直し、学習者が社会と自己を往還しながら問い続ける態度の育成をめざした点に特徴がある。大会主題である「一人ひとりの未来につながる社会科の創造 — 問い・探究、そして参画へ —」を地理的分野としてどのように具現化するかを課題として、本研究は授業の基礎構造を問い直す作業から始まった。

#### (2) 研究の背景と問題意識

##### ① 予測困難な時代と社会科の役割

現代社会は、国際紛争や国際経済の変動、環境問題の深刻化、SNSによる情報環境の急激な変容など、多くの不確実性を抱えている。特にSNS空間では感情的・断片的な情報が急速に拡散しやすく、事実の吟味よりも印象の強さが優先される状況が生まれつつある。このような環境下では、学習者自身が自らの認識の偏りや限界を自覚し、事実を基にした論理的な判断を行うための力が強く求められる。社会科教育は、そのための土台を形成する役割を担っていると言える。

しかし、多くの授業実践では「参画＝最終的な提案活動」「役所や地域への政策提案」というよう

に、参画が狭義の活動に限定される傾向がある。その場合、学習者が日常生活の中で社会形成に関わっているという視点が欠落し、授業が「特別な活動」に偏ってしまう。本研究では、そのような参画の限定的理解を批判的に再検討し、「日常の行為と社会構造を自覚的に結びつけることこそが参画の基盤である」という立場に立って研究を進めた。

## ② 藤原による「社会参加の三類型」

本研究の理論的基盤となったのが、藤原孝章による「社会参加の三類型」である。それによれば、社会参加は「①消極的（潜在的）社会参加」、「②象徴的・模範的社会参加」、「③積極的社会参加・社会行動」の三つに区分される。このうち「①消極的（潜在的）社会参加」は、日常生活の行為が社会的価値の創造に関わっていることを反省的・自覚的に認識する段階をさす。本研究は特にこの「①消極的（潜在的）社会参加」を重視した。なぜなら、地理的分野で扱う国際理解・世界の諸問題・空間的構造の学習は、学習者自身の日常生活と地球規模の事象の関係に気づかせることに直結しているからである。

例えば、日常の消費行動が国際貿易構造・環境問題・世界の貧困といった地理的な課題と接続していることを理解することは、学習者が社会の「行為者」であるという認識を持つための第一歩である。地理部会は、このような認識を育てることこそが参画の前段階であり、「参画の準備段階」とも言うべき基盤づくりであると整理した。

## （3）本研究の理論モデル

本研究は、学習者が社会を「自覚的」に、そして「内省的」に認識する力を育成するため、次の3つの視点を中核に据えた。

### ① 自覚的社会認識

自覚的社会認識とは、学習者が自身の行為が社会に影響を与えること、また社会の構造が自身の行為に影響していることに気づく認識である。アフリカ州の単元で扱う「チョコレートの購入」などの例は、自身の消費行動が世界の貧困構造とつながっていることに気づかせる典型的な教材である。本研究では、自覚的社会認識を「社会の中の自分に気づく力」と定義した。

### ② 内省的社会認識

内省的社会認識とは、学習者が自身の社会認識がどのような生活経験・情報・価値観によって構成されてきたかを振り返る力である。関東地方の単元で扱った「東京のイメージ」に関する学習では、生徒は自分が抱く東京像が、テレビ・SNS・家庭の会話といった複合的な要因から形成されていることに気づく。こうした気づきは「自分の中の社会」を問い直す重要な契機となる。

### ③ 自覚的・内省的認識を育てる二本柱

本研究は、これら二つの力を育てるために「科学的探求」と「リフレクション」を単元に組み込み、学習過程を再構成した。

## （4）授業構成の柱①：科学的探求

科学的探求は、次の過程を踏むことで成り立つ。

### 1、「なぜ」という問いの設定

- 2、予想・仮説の形成
- 3、資料に基づく検証
- 4、新たな見方・考え方（概念）の形成
- 5、応用・転移

この学習過程を機能させるため、本研究では次の4つの項目を重視して研究を行った。

#### ① 知識と問いの構造図の作成

「知識と問いの構造図」は、単元に必要な概念や因果関係を可視化し、それに対応する問いを配置するものである。地理的内容は相互に関連し、因果の連鎖を理解しなければ深い学習に到達しないため、構造化された図は不可欠である。この構造図を基に、各時の問い（SQ）および単元を貫く問い（MQ）を設定した。

#### ② 問いの分類（MQ・SQ・PQ）

本研究では、問いを三段階に分類した。

- ・MQ：単元を貫く問い
- ・SQ：本時の問い
- ・PQ：参画の問い（単元末に自己の行為・認識と結びつける問い）

この分類により、単元の流れを「問い→探究→参画」として体系的に整理できた。

#### ③ 資料の分類

科学的探求では資料の扱いが重要となる。本研究では資料を以下の四類型に整理した。

- 1、問いを発見させる資料
- 2、仮説形成を助ける資料
- 3、仮説を検証する資料
- 4、概念の応用・転移を促す資料

#### ④ 年間指導計画の検討

年間を通して概念形成が円滑に進むように、単元配列を再検討した。特に、世界の諸地域を扱う際には、学習者が「なぜの問い」に慣れ、資料読解の技能を段階的に習得できるよう、先行単元と後続単元のつながりを意識した構成とした。

#### （5）授業構成の柱②：リフレクション

リフレクションは、学習した知識を自分自身の行為や認識に照らし合わせ、問い直す過程である。「自覚的・内省的社会認識」を育てるためには、科学的探求だけでは不十分であり、学習者が知識を自己化する時間が必要である。

アフリカ州の単元では「アフリカが貧しいのは誰のせいかな」、関東地方の単元では「あなたの東京のイメージはどのように作られたか」といった問いを用い、生徒が社会の中の自分・自分の中の社会を再認識できるようにした。

#### (6) 実践① アフリカ州の学習

本単元では「なぜアフリカ州は貧しいのか」という MQ を中心に、モノカルチャー経済、植民地構造の残存、資源の呪い、政情不安などの複合的要因を科学的探求により明らかにした。各時の SQ を段階的に設定し、資料を用いて仮説検証を行わせた。

最終時にはリフレクションとして「アフリカが貧しいのは誰のせいかな」を問い、学習者自身の消費行動がアフリカの構造的貧困とつながっている可能性を検討させた。これにより、生徒は自らの行為が世界のどこかに影響を与えていることに気づき、自覚的社会認識が深化した。

#### (7) 実践② 関東地方の学習

関東地方の単元では「なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのか」を MQ とし、人口構造、企業集積、交通インフラ、政治的中枢機能などの要因を科学的探求により明らかにした。

リフレクションでは「あなたの東京のイメージはどのように作られたか」を問うことで、学習者の社会認識の構成要因を可視化し、内省的社會認識の育成を図った。

#### (8) 実践①及び実践②における成果と課題

##### ① 成果

本研究により、学習者の社会認識が一年めから二年めにかけて段階的に成長している様子が確認できた。特に、資料を基にした科学的探求の力が高まり、自覚的・内省的社會認識がリフレクションによって深められる様子が見られた。

##### ② 課題

一方で、世界の地域学習における概念配列や資料選択の妥当性については改善の余地がある。また、生徒の資料読解力の発達段階を踏まえた問いの距離の調整や、単元配列の検討も今後の課題として残された。

#### 4 地理的分野研究全体を通しての成果と課題

成果は5つある。1つめは、当日の地理的分野会では参加者から高い評価をいただいたことである。特にビデオ発表ということで、発表の方法や配布資料、協議の柱を設定した班別協議などの工夫が高評価につながり、新たな教育研究会の形を提案できた。2つめは、社会科教育学の成果を学び、授業化に成功したことである。中本教授のご指導の下、「科学的探求」や「リフレクション」だけでなく、「問い」「構造図」「学習指導案」の意味を学び、授業で実践することができた。3つめは、研究や運営を通して、横のつながりができたことである。大阪市や堺市、和泉市、泉大津市、忠岡町などの研究員が公開授業や研究討議を通じて交流することができた。4つめは、「授業を中心とした研究」を通じて生徒の成長が見取ることができたことである。生徒の資料を読み取る姿や記述及び発言内容が変容し、深まっている様子が確認できたことは、大きな成果である。5つめは、「持続可能な研究」が一部達成できたと考えている。私自身第二子の誕生と育児のため、育児休暇を取得しつつも、研究を進めた。また、オンラインによる会議や発表を実施するなど、方法を工夫することで、校務や子育てと両立することができた。

課題は、「持続可能な研究」が一部できなかつたと考えている。ビデオ発表という新たな取り組みのため、授業者に大きな心身的負担をかけてしまった。主に1学期に収録するため、研究期間が短く負

担が大きかった。また、ビデオ編集や当日資料の著作権の取り扱いなど、これまでに無かった準備が必要であり、組織的な対応ができなかった。さらに、働き方改革が叫ばれる中で、少数精鋭となり、実働できる研究員を多く集め、人員を配置することができなかった。今後、一層進む働き方改革の中で、研究の魅力を伝え、多くの先生方に参加してもらえる研究にしていくにはどうすればいいか、考えていかないといけない。

## 5 謝辞

本研究に携わっていただいた教諭の先生方、運営として私たちのわからないところでご尽力いただいた校長先生方に感謝申し上げます。特に、私たちの研究に伴走及び指導していただいた龍谷大学中本和彦教授、多くの時間を研究に割いてくださった授業者の小谷彩花先生と久井健史先生、校務が忙しい中研究に参加してくださった研究員の先生方、地理的分野の研究を見守り、運営を計画・実施しリーダーシップを発揮してくださった中辻幸男校長、本当にありがとうございました。

## 参考文献

- [1] 藤原孝章編著（2009）『時事問題学習の理論と実践—国際理解・シティズンシップを育む社会科教育—』、福村出版
- [2] 森分孝治（1978）「社会科授業構成の理論と方法」、明治図書
- [3] 中本和彦（2017）「自己の社会認識を反省させる中等社会科地理教育内容開発—成熟した主権者の育成をめざす単元「大統領選挙から見るアメリカ」を事例として—」、全国社会科教育学会『社会科研究』86巻

**地理的分野 研究提案**

自覚的・内省的に社会を認識し  
「問い続ける」子どもを育てる地理の授業

～「科学的探求」と「リフレクション」を通じて～

地理的分野研究委員長  
大阪府堺市立金岡南中学校  
主幹教諭 柿原 啓太

全中社大阪大会 大会主題

すべての子どもを取り残さず  
未来の形成者としての市民を育てる  
社会科の授業をつくる

一人ひとりの未来につながる社会科の創造  
～問い・探究、そして参画へ～

【方法】子どもたちが「問い」を「探究」すること  
【目標】参画できる市民を育てよう

参画できる市民を育てる社会科の授業とは？



大会冊子p.35

参画の授業とは、どのようなものなのか？

表1 「社会参加」の3類型 (藤原孝章)

消極的(潜在的)社会参加	ポストモダンな消費社会(モノよりも情報やサービスが価値を生み出す社会)では、大人・子どもに関わりなく(子どもが「未熟な大人」ではなく、一箇の市民として)社会的行為主体となる。日常生活における消費行為は社会参加であり、社会的価値の創造、すなわち社会形成に関わっている。このことを反省的、自覚的に認識することが社会科の学習になる。
象徴的・模倣的社会参加	社会の問題を解決する際、当事者は結果に関与し、複雑で相互関連的な関係もあろうが、問題のように、直接的な関与が困難な場合もあろう。シミュレーションやロールプレイなどの場を通じて、社会参加という形で象徴的・模倣的社会参加といえる。
積極的(潜在的)社会参加	公民館や地域センターなど地域コミュニティの形成に子どもたちが直接関わることがある。この場合、子どもは「市民」として認められ、いわゆる狭義的社会参加である。

藤原孝章編著(2009)「時事問題学習の理論と実践—国際理解・シティズンシップを育む社会科教育—」、福村出版、p.155

なぜ、自己の行為を反省的、自覚的に認識する授業を研究するのか？

これから子どもたちが生きる時代

↓

- ・VUCA(目まぐるしく変転する予測困難な)時代
- ・SNSが普及し、自分の考えをすぐに発信できたり、他者の考えを受信できたりする時代

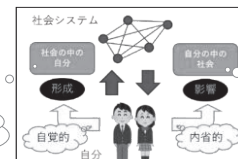
・参考文献 中本和彦(2017)『自己の社会認識を反省させる中等社会科地理教育内容開発—成熟した主権者の育成をめざす単元「大統領選挙から見るアメリカ」を事例として—』、全国社会科教育学会『社会科研究』86巻、p.2

大会冊子p.37

地理的分野 研究主題 ～目標～

自覚的・内省的に社会を認識し  
「問い続ける」子どもを育てる地理の授業

図1 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子ども(中本和彦の講演スライドをもとに筆者作成)」



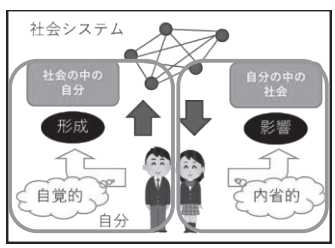
自分の行動が社会に影響を与えていたのではないかな？

自分の認識は本当ではないかな？

大会冊子p.37

自覚的・内省的に社会を認識し、問い続ける子どもとは、どのような姿なのか？

図1 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子ども(中本和彦の講演スライドをもとに筆者作成)」

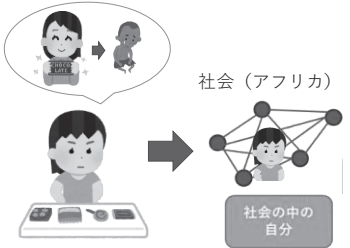


・参考文献 中本和彦(2017)『自己の社会認識を反省させる中等社会科地理教育内容開発—成熟した主権者の育成をめざす単元「大統領選挙から見るアメリカ」を事例として—』、全国社会科教育学会『社会科研究』86巻、p.3

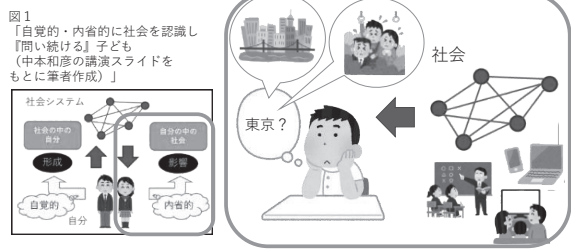
大会冊子p.37

①自覚的に社会を認識し「問い続ける」子ども

図1 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子ども(中本和彦の講演スライドをもとに筆者作成)」



②内省的に社会を認識し「問い続ける」

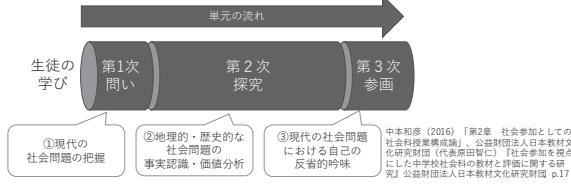


自覚的・内省的に社会を認識し、  
問い続ける子どもを育てる地理の授業とは？

自覚的・内省的に社会を認識し  
「問い続ける」子どもを育てる地理の授業  
～「科学的探求」と「リフレクション」を通じて～

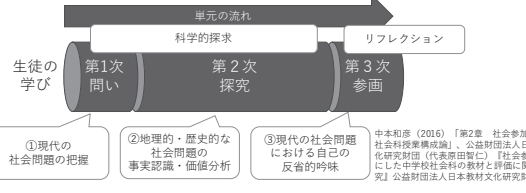
「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業」の単元構成とは？

図3 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業の単元構成図」 (筆者作成)



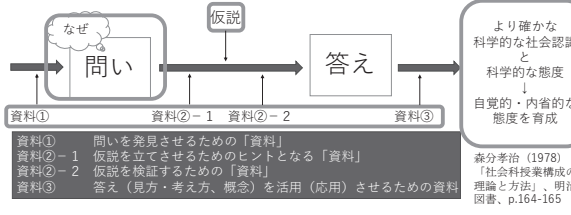
「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業」の単元構成とは？

図3 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業の単元構成図」 (筆者作成)



なぜ、「科学的探求」の学習過程を取り入れるのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」



「科学的探求」を実現するための研究

- 1, 知識と問いの構造図
- 2, 問いの分類
- 3, 資料
- 4, 年間指導計画

なぜ、知識と問いの構造図を研究するか？

・アフリカ州の「知識と問いの構造図」



なぜ、「問いの分類」を研究するか？

表2 「全中社大阪大会研究部による問いの分類と答え」 (筆者作成)

略称	問いの種類	備考	問いに対する答え
MQ	単元を貫く問い		MA
MQ'	単元の問い	生徒のための単元を貫く問い(駆動する問い)	MA'
SQ	本時の問い	MA (MA') にたどり着くための各授業での問い	SA
PQ	参画の問い	参画する問い	PA

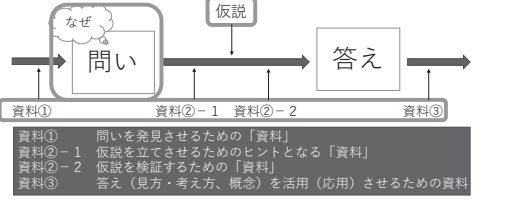
なぜ、「問いの分類」を研究するか？

図3 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子どもを育てる地理の授業の単元構成図」 (筆者作成)



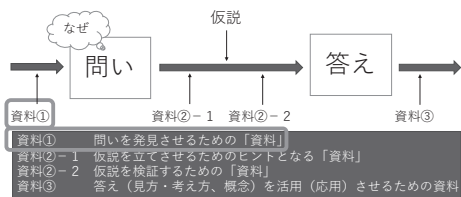
なぜ、「資料」を研究するのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」



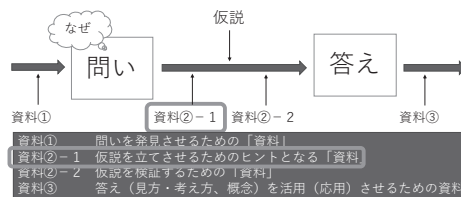
### なぜ、「資料」を研究するのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」  
(中本和彦『社会科教育 2021年9月号/2 定審資料とは一味違う！ 授業で使える秘)新資料 私のおすすめベスト5 グラフ・統計資料-私のおすすめベスト5 優れた授業デザインが資料を輝かす』をもとに筆者作成)



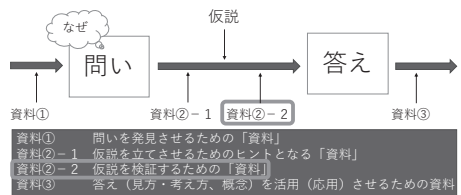
### なぜ、「資料」を研究するのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」  
(中本和彦『社会科教育 2021年9月号/2 定審資料とは一味違う！ 授業で使える秘)新資料 私のおすすめベスト5 グラフ・統計資料-私のおすすめベスト5 優れた授業デザインが資料を輝かす』をもとに筆者作成)



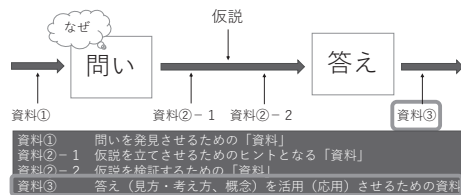
### なぜ、「資料」を研究するのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」  
(中本和彦『社会科教育 2021年9月号/2 定審資料とは一味違う！ 授業で使える秘)新資料 私のおすすめベスト5 グラフ・統計資料-私のおすすめベスト5 優れた授業デザインが資料を輝かす』をもとに筆者作成)



### なぜ、「資料」を研究するのか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」  
(中本和彦『社会科教育 2021年9月号/2 定審資料とは一味違う！ 授業で使える秘)新資料 私のおすすめベスト5 グラフ・統計資料-私のおすすめベスト5 優れた授業デザインが資料を輝かす』をもとに筆者作成)



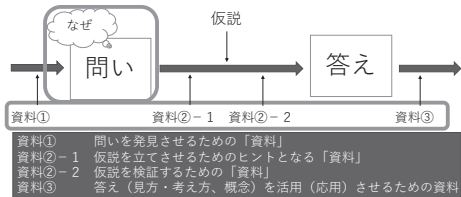
### なぜ、「年間指導計画」を研究するか？

・表 大阪大会 地理部会が提案した年間指導計画

1単元		2単元	
1 世界と日本の地域構成⑤	なぜパリオリンピックは東京で行われているのだろうか？	10 日本の地域的特色⑤	日本はなぜ様々な課題を抱えているのか？
2 世界各地の人々の生活と価値観⑤	なぜ、日本では米が食べられているのに、海外では小麦が食べられているのだろうか？	11 中国・四国⑤	四国新幹線の建設に賛成？反対？
3 南アメリカ州⑤	なぜ南アメリカ州は貧富の差が大きい国が多いのだろうか？	12 東北⑤	東日本大震災は日本になぜ大きな影響を与えたのか？
4 アフリカ州⑤	なぜアフリカ州は貧しいのだろうか？	13 関東⑤	関東にヒト・モノ・カネが集まるのはなぜか？
5 ヨーロッパ州⑤	ヨーロッパは2度の世界大戦の戦場になったのに、EUとしてまとまろうとするのだろうか？	14 近畿地方⑤	なぜ大阪は東西しどりと負けたのか？ ～どうする？大阪！～
6 オセアニア州⑤	なぜオセアニア州には移民が多いのだろうか？	15 中部地方⑤	中部地方は農業が盛んなのか？
7 アジア州⑤	なぜユーラシア大陸にはヨーロッパ州とアジア州があるのだろうか？	16 九州地方⑤	なぜ、九州地方は農業が盛んなのか？
8 北アメリカ州⑤	なぜ北アメリカ州には世界最大の国があるのだろうか？	17 北海道⑤	北海道は寒いの、なぜ農業が盛んなのか？
9 地域調査の手法⑥	私たちが住んでいる地域には、どのような特徴があるのだろうか？	18 地域の在り方⑤	なぜ、東北ニュータウンは「ザル」状態になったのか？ ～どのような未来のまちの姿を描き、提案するか？～

### なぜ、「年間指導計画」を研究するか？

・図4 「『科学的探求』学習の過程を成り立たせるために必要な『資料』」  
(中本和彦『社会科教育 2021年9月号/2 定審資料とは一味違う！ 授業で使える秘)新資料 私のおすすめベスト5 グラフ・統計資料-私のおすすめベスト5 優れた授業デザインが資料を輝かす』をもとに筆者作成)



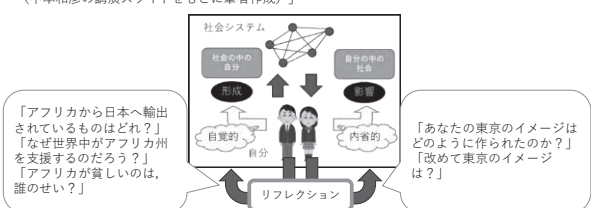
### なぜ、「年間指導計画」を研究するか？

・表 大阪大会 地理部会が提案した年間指導計画

1単元		2単元	
1 世界と日本の地域構成⑤	なぜパリオリンピックは東京で行われているのだろうか？	1 「なぜの問い」や「資料」に慣れる	「なぜの問い」や「資料」に慣れる
2 世界各地の人々の生活と価値観⑤	なぜ、日本では米が食べられているのに、海外では小麦が食べられているのだろうか？	2 「貧富の差と植民地構造の名残」という社会認識を習得	「貧富の差と植民地構造の名残」という社会認識を習得
3 南アメリカ州⑤	なぜ南アメリカ州は貧富の差が大きい国が多いのだろうか？	3 「貧困と植民地構造の関係性」という社会認識を理解しやすく	「貧困と植民地構造の関係性」という社会認識を理解しやすく
4 アフリカ州⑤	なぜアフリカ州は貧しいのだろうか？		
5 ヨーロッパ州⑤	なぜヨーロッパは2度の世界大戦の戦場になったのに、EUとしてまとまろうとするのだろうか？		
6 オセアニア州⑤	なぜオセアニア州には移民が多いのだろうか？	4 中部地方⑤	なぜ、中部地方は農業が盛んなのか？
7 アジア州⑤	なぜユーラシア大陸にはヨーロッパ州とアジア州があるのだろうか？	5 九州地方⑤	なぜ、九州地方は農業が盛んなのか？
8 北アメリカ州⑤	なぜ北アメリカ州には世界最大の国があるのだろうか？	6 北海道⑤	北海道は寒いの、なぜ農業が盛んなのか？
9 地域調査の手法⑥	私たちが住んでいる地域には、どのような特徴があるのだろうか？	7 地域の在り方⑤	なぜ、東北ニュータウンは「ザル」状態になったのか？ ～どのような未来のまちの姿を描き、提案するか？～

### なぜ、「リフレクション」を取り入れるか？

図1 「自覚的・内省的に社会を認識し『問い続ける』子ども  
(中本和彦の講演スライドをもとに筆者作成)」



### 自覚的に社会を認識し社会の中にある自分に気づく地理の授業の開発と実践～アフリカ州～

単元	学習過程	各授業の①「社会の中の自分」	②科学的探求	③自覚的リフレクション	④「社会の中の自分」
1	①問いの設定	PQ アフリカが貧しいのは誰のせい？ MQ なぜアフリカ州は貧しいの？			①「社会の中の自分」 行為者として 未自覚
2		SQ なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？ ⇒SA ヨーロッパ州のために原料を供給する植民地支配の構造が残っているから			
3		SQ なぜ資源があるのに貧しいの？ ⇒SA 民族分断による争いと不安定な政治に加え、 カカオと同様ヨーロッパ州の資金・技術協力なしに開発を進めるのは難しいから			
		SQ なぜ世界中がアフリカ州を支援するのだろうか？ ⇒SA 資源を安定輸入するために関係性を築き、見返りを求めている ＝植民地支配に代わる支配が続いている			
		MQ なぜアフリカ州は貧しいの？ PQ アフリカが貧しいのは誰のせい？			④「社会の中の自分」 行為者として 自覚

内省的に社会を認識し自分の中にある社会に  
気づく地理の授業の開発と実践～関東地方～

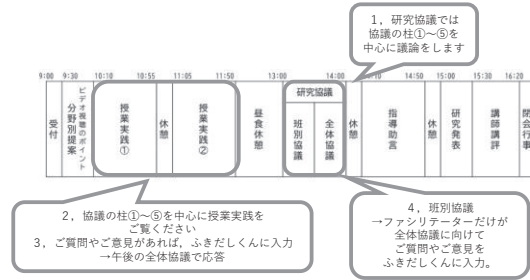
時	学習過程	名辞
第一時	①問いの設定	PQ あなたの中の東京のイメージは？ MQ なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのか？ SQ なぜ東京に流入する人が多く若い世代で就職や進学をきっかけに移動してくることに気がつくのか？
	②科学的探求	SQ なぜ東京に企業が多いのか？ ⇒人口が多さによる市場の幅の高さや関連企業の集積による効率の良さ しやすさ、スタートアップのしやすさなどの要因に気づく。
		SQ なぜ東京に本社を構える企業が多いのか？ ⇒全国へのアクセスの良さ（インフラの共有）や中央政府との意見交換、情報の集積などに本社を置くことの価値に気づく。 SQ 一極集中はメリットが多いのになぜ抑制しようとするのか？ ⇒人口が集中することで起こる都市問題に気づくだけでなく、他地域にも衰退の影響を及ぼすことに気づく。
③内省的 リフレクション	MQ なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのか？	
第二時	④「自分の中の社会」 再構成された私の中の東京	PQ 一極集中をどう思うか？ PQ 授業で学んだうえで東京のイメージは？

成果と課題

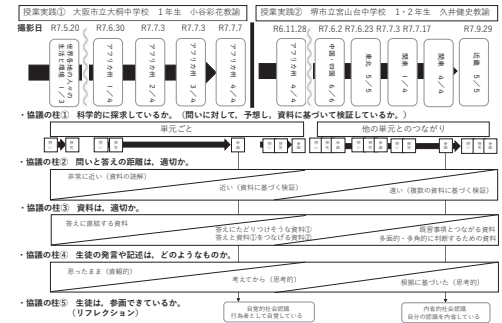
成果 生徒の成長をおよそ2年という長いスパンで  
授業とともに示すことができた。

課題 年間指導計画の検討が不十分であった。

地理的分野 分科会の進め方



全中社大研究会 地理的分野 授業実践概要～ビデオ発表のために～





### 1 はじめに

スマートフォン一つで世界と瞬時に接続できる現代において、中学校社会科地理的分野ではいかにして「問い続ける生徒」を育成すべきか。この3年間の研究を通じ、教師自身が既存の指導観に安住せず、その在り方を問い続けることの重要性を痛感した。

平成27年度に大阪市全市社会科研究発表会において筆者が行ったアフリカ州の実践では、「日本がアフリカとともに豊かになるには」という問いを立て、支援や自立の策を生徒に探究させた。しかし、中学生が既与の資料から導き出せる解決策の多くは、すでに現実社会で試行されているものであり、解決策をひねり出すことに、どれほどの意味があるのだろうか。

むしろ重要なのは、複雑な社会と自己との接点を見出し、社会問題を自分事と捉えられると「問い続ける」姿勢である。リフレクションを通じて、社会問題に無自覚に関与していた自分を自覚させる。そうした問いに基づく探究のプロセスこそが、生徒を社会参画へと導くものであると考える。

### 2 単元構想について

本研究では、あえて「アフリカ州＝貧困」という既存のステレオタイプを正面から扱い、その深層を掘り下げてきた。単元構想にあたり、まず教師自身がアフリカ州の本質を構造的に理解し、自身の言葉で定義する必要がある。しかし、この単元を貫く問い「なぜアフリカ州は貧しいの」に対する答えを導き出す過程は、筆者自身が未熟であったこともあり、多大な教材研究の時間を要し、約1年におよぶ本研究の最大の挑戦でもあった。

アフリカ州では近年、経済発展を遂げる国が増加しているものの、GDPやハンガーマップ等の指標を俯瞰すれば、依然として多くの国が貧困に直面している現実は否定できない。その背景には、加工による付加価値を享受できない「モノカルチャー経済」の脆弱さと、人為的な国境線に起因する「国家への帰属意識の希薄さ」が招く政治腐敗や紛争という重層的な構造が存在する。

例えば、旧宗主国主導で始まったカカオ栽培が今なお低利益な原料輸出に留まる一方で、高付加価値なチョコレート市場は欧州企業が独占している。また、産油国であるナイジェリアが、欧州企業に採掘を依存し、精製されたガソリンを逆輸入せざるを得ない現状がある。つまり、原料を供給し加工品を享受するという「植民地支配の構造」は、形を変えて今なお再生産されているのである。また、資源を巡る民族対立や政治の不安定さも、民族分布を無視したかつての境界線に端を発しており、ここでも植民地支配の負の遺産が影を落としている。

結論として、アフリカ州の貧困の本質は「植民地支配の構造」から脱却できていない点にある。終わったはずの支配は、現在も支援とその見返りという形で継続されており、アフリカは依然として世界の原料供給地として固定されているのだ。日本も例外ではない。先端産業に不可欠なレアメタルの多くをアフリカに依存しており、資源の安定確保という戦略的意図のもと、互惠関係という名目で多額の支援を行っている実態が見えてくる。

このような構造を、生徒自身が問いと探究を通じて解き明かし、参画する問い「アフリカが貧しいのは誰のせい」をさらに探究することで、自分自身もまたその構造を支える一端である可能性を自覚すること。それこそが、本実践がめざす社会参画および「問い続ける生徒」の育成の第一歩である。

### 3 単元構成について

本研究では、ご協力いただいた追実践を参考にして、他者による実践の「再現性」を重視し、全4時間からなる単元を構成した。各次のねらいは以下の通りである。

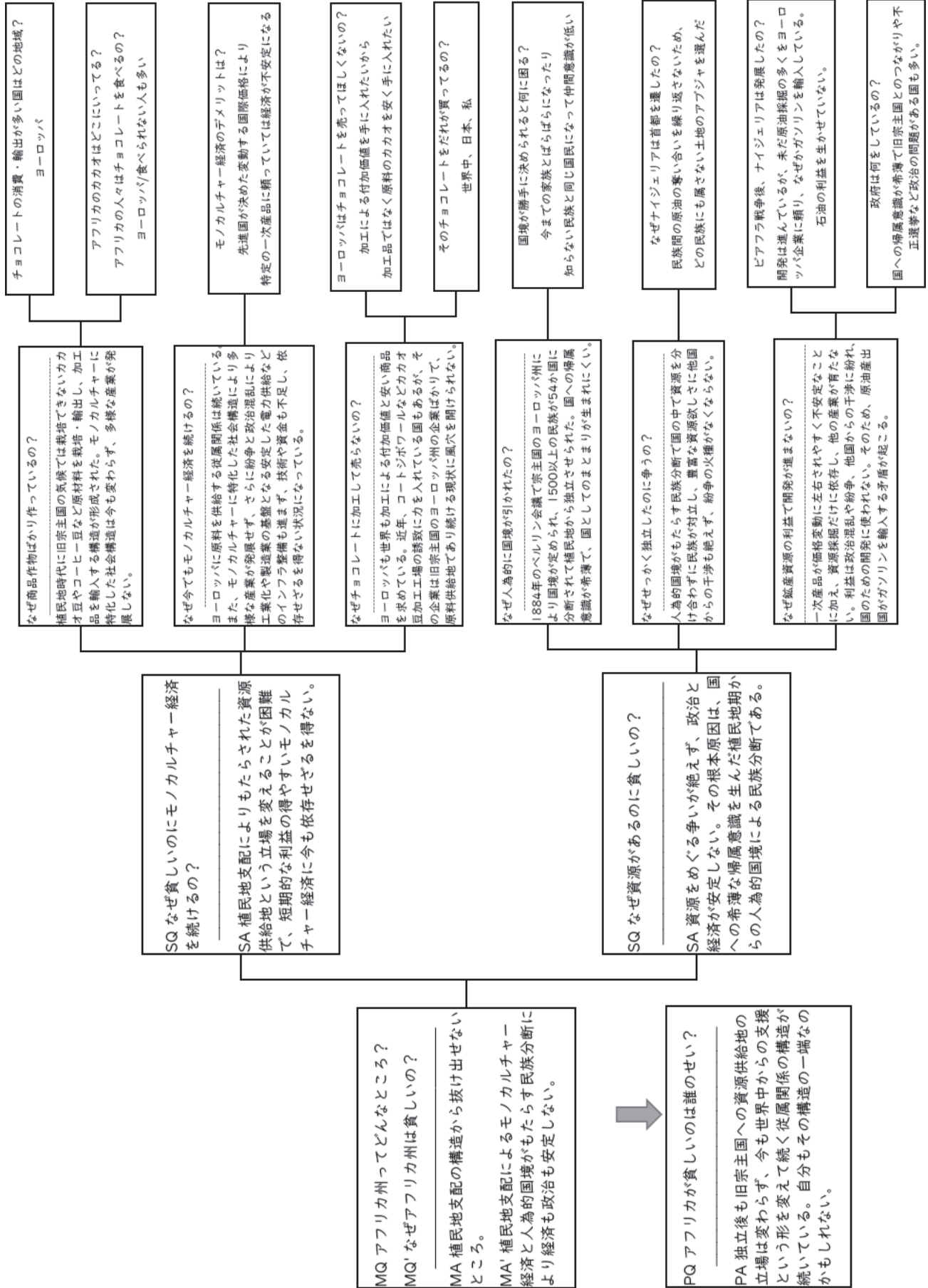
【第1次：問いの生成と予想】提示した資料に基づき、生徒自らが「確かになぜだろう」という素朴な疑問を抱くプロセスを重視し、単元を貫く問い（MQ）を設定する。同時に、この時点での参画する問い（PQ）に対する考えを記述させ、4時間を通した変容を追うための起点とする。

【第2次：構造的な探究】教材研究で導き出した「植民地支配の構造」を解き明かすため、「モノカルチャー経済」および「国家への帰属意識の希薄さ」という二つの側面について、問いと資料に基づいた探究活動を展開する。

【第3次：概念の統合と社会への参画】これまでの探究内容を統合して単元を貫く問い（MQ）に対する解答を共有し、地理的な構造理解を深める。さらに一步踏み込み、参画する問い（PQ）を通じて、日本や自分自身とアフリカの構造的課題とのつながりを考察させ、社会への関与を自覚させる。

学習過程	次	時	各授業の問いと指導内容	評価の観点			評価基準
				知	思	主	
問い	第1次	第1時	<p>・MQ. なぜアフリカ州は貧しいの？ →MA. 植民地支配によるモノカルチャー経済と人為的国境がもたらす民族分断により経済も政治も安定しない。</p> <p>・PQ. 誰のせいでアフリカは貧しいの？ →PA. 独立後も旧宗主国への資源供給地の立場は変わらず、今も世界中からの支援という形を変えて続く従属関係の構造を理解する。自分もその構造の一端なのかもしれない。</p>		○	●	<p>・南アメリカ州などの既習事項と資料から、アフリカ州を概観し、他地域と比較して貧困が課題となる地域であることを理解する。</p> <p>・社会問題に関与していると未自覚であった自分を自覚させる問いを通じて探究する。</p>
探究	第2次	第2時	<p>・SQ. なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？ →SA. 植民地支配によりもたらされた資源供給地という立場を変えることが困難で、短期的な利益の得やすいモノカルチャー経済に今も依存せざるを得ない。</p>	○	●		<p>・モノカルチャー経済を続けるのは、原料を供給するという植民地支配の構造を変えられていないから、やめられないのだと理解する。</p>
		第3時	<p>・SQ. なぜ資源があるのに貧しいの？ →SA. 資源をめぐる争いが絶えず、政治と経済が安定しない。その根本原因は、国への希薄な帰属意識を生んだ植民地期からの人為的国境による民族分断である。</p>	○	●		<p>・国への帰属意識の希薄さに由来する紛争ですら植民地支配の構造の影響があると前時との共通点に気づく。</p>
参画	第3次		<p>・PQ. 誰のせいでアフリカは貧しいの？ →PA. 独立後も旧宗主国への資源供給地の立場は変わらず、今も世界中からの支援という形を変えて続く従属関係の構造を理解する。自分もその構造の一端なのかもしれない。</p>		○	●	<p>・アフリカ州はどこかを自分なりにまとめる。誰のせいかわかると考え、今も変わらない社会構造と社会の中の自分の存在を自覚する。</p>

#### 4 知識と問いの構造図



# 1枚ポートフォリオ

名前 \_\_\_\_\_  
年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番 \_\_\_\_\_

単元の最後にアフリカ州のすべてのプリントを集めます。それまで社会科ファイルにじておくように。

単元の問い **なぜアフリカ州は 貧しい の？ ~アフリカが 貧しい のは誰のせい？~** 単元名 アフリカ州 地理プリント 14-17

格差が大きいから、モノカルチャー植民地支配のせい  
経済だから、植民地時代のなごり 経済と政治のせい

これまで学んだこと 南アメリカ州  
なぜ南アメリカ州は貧富の差が大きい国が多いのだろう？  
キーワード  
植民地 大土地所有制 鉱産資源 スラム  
熱帯林の伐採→開発 GDP コーヒー豆

**15 なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？**

加工したほうが利益があって原料を供給するだけでは大きな利益は見込めないとわかっていても、ヨーロッパ州のために原料を供給する植民地支配の構造が残っているから。	分かったこと・授業を思い出したためのキーワード カカオ豆 モノカルチャー経済 鉱産資源	気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと
	知 S - A - B	再 - 休

**16 なぜ資源があるのに貧しいの？**

資源による利権争いが起こり、対立が紛争に発展している。民族分断による争いに加え、大統領も国を私物化し不安定な政治で国が安定しない。そのため、カカオと同様ヨーロッパ州の資金・技術協力なしで開発を進めるのは難しい。	分かったこと・授業を思い出したためのキーワード 民族対立 2世代大統領 紛争 資源の奪い合い	気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと
	知 S - A - B	再 - 休

**16 単元の問い 答え** 単元の問いが一番上に書いてるよ！  
ヨーロッパによって人為的に引かれた実際の民族分布とは一致しない国境が残されたことで、政治の中心者に国への帰属意識はなく、独立後の国境紛争、部族紛争が絶え間なく起こっている。そのため、政治・経済は安定せず、本来農業や鉱産資源で経済成長するはずが、むしろ争いの火種となり、植民地時代と社会の仕組みが変わらず貧困が続いている。


**17 アフリカが貧しいのは誰のせい？**

根源は植民地支配したヨーロッパ州のせい、そのあと国を省みない政治の影響も大きい。でも、もしかしたらあの製品を何も考えずに買う私もアフリカを貧しくしている一人なのかもしれない。	分かったこと・授業を思い出したためのキーワード 援助 資源の供給	気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと
	態 S - A - B	再 - 休

**17 アフリカ州ってどんなところ？** 一言で表そう！  
自分なりの植民地をはっきり書こう！ アフリカ州は植民地支配の仕組みが残っているところ。  
なぜなら、日本の暮らしに欠かせないものばかりアフリカから来ているのに、今でも植民地支配の仕組みが変わらず、モノカルチャー経済や民族対立が経済発展を妨げ、貧しいままである。近年、変化させようとしている国が増えてきたが、今後のアフリカ社会の変化は日本にとっても関係のないことではない。

(思) S - A - B 再 - 休

6 研究の推移

年月日	研究内容	
2023年 7月	龍谷大学中本教授の知識と問いの構造図を学び始める。 地理部会で議論し、「暗黒大陸」「植民地」「奴隷」「共生」などキーワードが出る。	
12月	中本教授から構造図の作り方を中心としたご指導をいただく。 文献を読み、思いついた言葉を書きだすが、「どんなところ (How) = 事実・いったいどんなところ (What) = 解釈」が混乱していることを指摘される。	
2024年 1月	資源、モノカルチャー、民族、発展している国に注目し「MQ アフリカはなぜ発展しないのか」「MA 植民地支配の構造があるから発展しない」と設定する。 「MQ なぜアフリカは貧しいままなのだろう」「SQ1 アフリカって日本にとって本当に遠いところなのかな」「SQ2 なぜアフリカにゴディバはできないのだろう」「SQ3 なぜ独立後も争いはなくなるのだろう」「SQ4 アフリカの未来はどうなるのだろう」に見直す。	
2月	地理的分野会において授業者本人によるプレ授業(3次)と中本教授による講話。 MQ はそのまま、「SQ1 なぜアフリカ州はチョコレートにして輸出しないのだろう」「SQ2 なぜ植民地支配が終わったのに争いは終わらないのだろう」の2つの柱にし、PQ を「アフリカ州はこのまま貧しいままなのだろうか」と設定した。社会参画に関する問いと資料について指摘いただき(上記)、修正する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男子ではなく女子の意見を中心につなぐほうが良い</li> <li>・資料が難しい、展望できる資料ではない</li> <li>・生徒に自由に調べさせたため模範解答と方向性が違った</li> <li>・社会参画ができていなかった</li> <li>・2・3限の授業プリントみたいに吹き出しヒントがあるといい</li> <li>・授業者が協動的な学びの授業スタイルから変えられていない</li> <li>・自分の意見を持って帰るので○△×は逆にやりにくい</li> <li>・単語にこだわらず生徒の分かった！をもっと拾うべき</li> </ul> <p>いただいた意見をもとに、次のクラスではエキスパート班は個別の資料、ジグソー班では比較資料を減じて、○△×を廃止したところ、議論が活発になり、前時までの学習とのつながりがより良くなった。全国に向けて特に4限のデザインの再考性が重要である。</p> 
4月	PQ案を作っては削除し、「なぜ日本はアフリカ州への支援を増やすのだろう」「誰のために世界はアフリカ州を支援するのだろう」など参画できる問いを書籍を読み、模索する。	
8月	中本教授による授業デザインについての講話。問いの重要性を再認識する。	
10月	追実践【大阪市立大正中央中学校 寺井和弘先生】 スモールステップでの問いに変更し、資料の精選や差し替えを行った。	
11月	プレ公開授業Ⅰ【堺市立宮山台中学校 久井健史先生】 参画する問いが適切か議論を行い、自分事とする問い方を議論した。	
2025年 2月	プレ公開授業Ⅱ【大阪市立天王寺中学校 上嶋一志先生】 学校によって問いと資料をミドルステップに変更する必要があると感じた。	
	追実践【大阪市立長吉西中学校 川村由美子先生】 【大阪市立緑中学校 土倉ゆかり先生】 【泉大津市立小津中学校 西村朋之先生】 【堺市立鳳中学校 町田翔先生】 【大阪市立梅香中学校 森下翔吾先生】 【大阪市立蒲生中学校 山中延宏先生】	<p>たくさんのご協力ありがとうございました。 公開授業と追実践の生徒の反応から以下の細かな変更を行った。 問いの文言を短くわかりやすく変更・資料の細かなミスや矛盾の訂正・視聴覚資料の精選・難易度の調整など。</p>
5月25日	ビデオ撮り『世界各地の人々の生活と環境』	<p>単元を始めてからも、補足が必要だと感じた部分など、特にプリントの資料などを最後まで変更した。理解が不安な部分は模範者のものを共有するようにした。</p>
6月30日	ビデオ撮り『アフリカ州1時間目』	
7月3日	ビデオ撮り『アフリカ州2・3時間目』	
7月7日	ビデオ撮り『アフリカ州4時間目』	

## 7 生徒の成果物と変容

本大会の地理的分野会はビデオ発表であったことから、特に生徒の変容に焦点を絞り発表を行った。

入学直後の単元「世界各地の人々の生活と環境」および7月履修の「アフリカ州」をビデオ発表したが、入学後に履修した全ての単元でMQを設定し、資料に基づく探究活動を構成した。その結果、単元を追うごとに資料を根拠とする発言が定着し、1枚ポートフォリオの記述においても、単語レベルか根拠を伴う文章表現へと深化する生徒が見られた。

PQ「アフリカが貧しいのは誰のせい？」という問いへの反応では、ヨーロッパ州やアフリカ州の構造的問題に留まらず、安価に消費する日本や自分自身の生活へと視点を向ける生徒が現れた。関わりの薄かった国際社会を自分事として捉え、社会とのつながりを再構築していく変容の過程が確認できた。

男子生徒Cの記述の変化 (単元前の予想と単元後の答えの成長が顕著)

15 なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？  
 今まではヨーロッパの植民地支配の関係を続けているから、モノカルチャー経済が維持されてきたからではない。  
 16 なぜ資源があるのに貧しいの？  
 カロエでできない、資源が取れても、ヨーロッパに売って加工されたものをヨーロッパから又輸入しないといけないから利益がない。  
 単元前の答え: アフリカ州ってどみかどう? 単元後の答え: アフリカ州は資源に恵まれているが、利益がなくて貧しいから。

よくあるアフリカのイメージから、資料から読み取ってほしい2点を根拠に貧しい理由を述べられるようになった。

17 アフリカが貧しいのは誰のせい？  
 世界中の人がアフリカを利用して安く買っている。  
 大統領や国のせいにしてはいたが、少しベクトルが自分の方にも向き、安く買う世界中の人だと考えが大きく変化した。自分も入ってる?  
 アフリカ州ってどみかどう? 単元後の答え: アフリカ州は資源に恵まれているが、利益がなくて貧しいから。

2時間目の授業プリントの生徒の記述 (カカオが作れないなど資料を読み取れていない生徒も目立った)

5 なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？  
 カカオが作れないから。  
 15 なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？  
 ヨーロッパとの植民地支配の関係が今も変わってないし、国内で加工して輸出して利益をあげていくから、ヨーロッパがお金をかせげなくなるから、そうほおっておかない。  
 3時間目の授業プリントの生徒の記述 (複数資料を関連させた気づき)

⑧ 資料A・B・D・Eから、なぜナイジェリア人同士なのに争いが起こるの？  
 民族が違ったり、イデオロギイが異なるから。  
 ⑨ 資料A・B・D・Eから、なぜナイジェリア人同士なのに争いが起こるの？  
 ほとんどが同じ民族なのに争いが起こるから。  
 ⑩ 資料F・Gから、戦争が終わったらナイジェリアは石油(原油)の利益で発展したのか？  
 石油の利益で発展したから。  
 民族を分けておいてあげよう。  
 資源争いが原因で争いがあるから。

4時間目の授業プリントの生徒の記述(数名は自分の世界とつながった)

17 アフリカが貧しいのは誰のせい？  
 安く買っている私たち。ヨーロッパのせい。  
 ヨーロッパのものを安く買っている日本(俺たち)のせい。  
 男子生徒Bの記述の変化 (資料と関連しない→前時と関連)

私は何を食べているの？  
 食べ物を残さず食べる。食べ物を残さず食べるから。  
 【今日の問い】なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？  
 予想 他に売ってあげたいから。  
 【今日の問い】なぜ資源があるのに貧しいの？  
 予想 1つの資源を出しているから。  
 資源を売ってあげてほしいから。  
 ⑩ 資料F・Gから、戦争が終わったらナイジェリアは石油(原油)の利益で発展したのか？  
 カカオが作れないから。  
 ヨーロッパに原油の利益を出しているから。

女子生徒Aの記述の変化 (資料から根拠を示す一問いと問いがつながり「もしかして？」と探究が始まっている)

なぜ米を食べる地域と食べない地域があるの？  
 気候や気温が違ったり、土壌が違ったり、水が足りなかったり、宗教や文化の違いがあるから。  
 【今日の問い】なぜ貧しいのにモノカルチャー経済を続けるの？  
 予想 植民地支配が原因で、技術の進歩がないから。  
 ⑨ A-Eからアフリカ州でカカオが育てられるようになった理由をまとめよう。  
 資料Cを見ると、植民地支配されている国がカカオを育てて、輸出しているから。  
 【今日の問い】なぜ資源があるのに貧しいの？  
 予想 その資源を安く利益を出しているから。  
 ⑩ 資料F・Gから、戦争が終わったらナイジェリアは石油(原油)の利益で発展したのか？  
 カカオが作れないから。  
 ヨーロッパに原油の利益を出しているから。

## 8 研究協議のふりかえり

公開授業後の研究協議では、ICT ツールやテキストマイニングを活用し、参観者との双方向的な議論を試みた。協議の中で焦点となった主な論点は以下の通りである。

以下、当日の参観者からの質疑および事前リハーサルでの検討内容を要約して紹介する。

Q	後半にかけ、資料や自身の記述を参照しながら意見を述べる姿が見られた。どのような工夫をしたのか？
A	生徒が資料読み取りに不慣れであったため、問いをスモールステップで設定しました。また、「なぜ？」という根拠を繰り返し問いかけ、模範的な記述を称賛・共有するサイクルを徹底したことで、自然と根拠に基づいた論理的文章で答えられるようになりました。
Q	座席配置の工夫、および「フォーメーション」の意図は何か？
A	本実践では、学習場面に応じて以下の3つの形態を使い分けています。(大阪市立長吉西中学校川村先生に教わりました。)特に単元の終末など、教師主導で全体共有を行いたい場面では、互いの顔が見える「コの字」型が有効だと考えています。 A(一斉):知識の習得や映像視聴。B(4人班):協働的な学びあい。C(コの字):全体での共有・聞きあい。
Q	若手教員がすぐに実践できるポイントは何か？
A	教科書を徹底的に読み込み、まず答え(MA)を明らかにし、問いを設定します。教師が教材研究を通じて確固たる軸を持つことで、生徒がいかなる反応を示しても授業がブレなくなります。筆者は他資料で学びつつも、必ず最後は教科書に立ち返るようにしています。
Q	単元を貫く問いの答え(MA)までのプロセスが誘導的ではないか？
A	1年生の1学期段階では、資料の読み取り技能が未熟です。まずは教師が教材研究で導き出した単元を貫く問いの答え(MA)をベースに、「どのように読み取り、考えるか」という思考の型を習得させる必要があります。この段階では意図的な誘導も必要だと考えています。
Q	構造図を示しながら、なぜ「オープンエンド」と言えるのか？
A	参画する問い(PQ)においては、答えの内容(誰のせい)を限定していないという意味です。大切なのは「何と答えたか」ではなく、学習した資料を根拠に自分事として考えているかです。探究のプロセスと根拠の有無を重視しています。
Q	何が達成されたら「問い続ける生徒になった」と判断するのか？
A	授業での探究経験を経て、日常の諸課題に対しても「もしかしたらあの問題も関係しているのではないかと多面的・多角的に視野を広げ、社会と自分のつながりを自覚的に認識できるようになった状態を指します。
Q	評価の方法と、授業中の指名はどのように行っているか？
A	毎時間「1枚ポートフォリオ」を回収・評価し、優れた解答は次時の導入で共有しています。机間巡視の際、発言を促す生徒の順番をあらかじめメモしておき、必要に応じて事前に声をかけつつ、自由な発言が生まれる雰囲気作りも並行して行っています。評価は本大会の研究では課題に残っている部分ですが、MQに関しては、資料からSA・MAに導いているかを見ています。
Q	「アフリカ=貧しい」と一概に言い切れるのか。ステレオタイプを助長する偏った見方ではないか。
A	確かに、アフリカの多面的な姿の一部を切り取っているという点では偏りがあるかもしれませんが、限られた時間でアフリカ州のすべてを網羅することは困難です。学習指導要領でも、地域学習において主題を設ける重要性が説かれており、本実践ではハンガーマップや1日2ドル未満で生活する人々の分布などの客観的な統計資料をもとに、あえて現状の課題に焦点を当てた問いを構成しました。この単元では、遠いアフリカの出来事で終わらせず、断片的であっても自

分とのつながりを実感させることを優先しています。他の側面については、他の単元や3年間を通じた学習の中で補完し、多角的な視点を養いたいと考えています。

**Q** なぜ中学生に具体的な「解決策」まで考えさせないのか？

**A** 学習指導要領解説（社会編）における中学と高校の接続を踏まえています。中学校段階では、具体的な解決策の提示よりも、まずは社会の一員として「状況に目を向ける」「自分自身を振り返る」といった、内省を伴う「消極的社会参加」を確実に経験させることが重要だと考えています。

**Q** 授業プリントの構成が非常に機能的で、ぜひ参考にしたい。作成にあたっての工夫は何か？

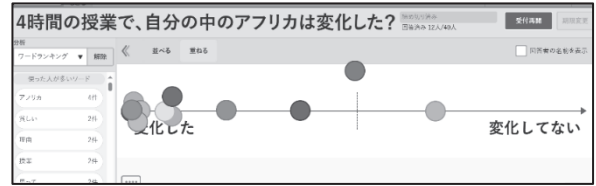
**A** すべて Word で作成しています。特に意識しているのは、初見の教員でもそのプリントで授業が成立し、欠席した生徒でも友人の助言があれば内容を補完・理解できる再現性の高い構成です。資料選定については、以下の3点を大前提としています。①問いとの整合性 設定した問いの根拠となる資料を厳選すること。②資料の優先順位：読み取る練習をするためにもグラフを最優先し、次いで表を活用すること。③生徒の知的好奇心：生徒が見た瞬間に「おもしろそう」「調べてみたい」とワクワクするような、インパクトのある資料を選ぶこと。以下、授業プリント。

**Q** 授業内でタブレット PC 等の端末を積極的に活用させないのはなぜか？

**A** 本実践は資料から問いを探究する力を養うことに焦点を置いています。1年生の1学期という導入段階では、あえて ICT 活用による情報収集のプロセスを最小限に抑え、提示した資料と徹底的に向き合わせる時間を確保すべきだと考えています。自ら調べたり、展望を持ったりする活動は、この基礎的な探究の型が身につくからでも遅くはありません。また、文章作成において AI 等に頼ることなく、自分の言葉で思考する習慣をつけることも重視しています。そのため、「1枚ポートフォリオ」の記述は授業最後の5分間に手書きで行わせ、その場で回収しています。この時間は、教師が机間指導を通じて要支援生徒への個別フォローを行うための貴重な対話の時間としても機能しています。

## 9 おわりに

本研究では、あえて児童労働やフェアトレードといった情動的なトピックを排除し、感傷的なかわいそうという感情に流されないよう、社会の構造に冷静に迫る工夫を凝らした。参画する問い(PQ)においては「アフリカが貧しいのは誰のせいか」という、あえて生徒を揺さぶる言葉を選んで設定したことで、生徒は社会の問題を自分事として探究し始めた。「安価に消費する私たちの責任」といった生徒の記述からは、アフリカが世界の原料供給地となり、支援と見返りという形で現代まで続く構造的な支配に生徒が気づき始めたことが見てとれる。



単元履修から3か月後のアンケートでは、「チョコレートを食べる際に学習内容を思い出した」「買い物の際に原産国を確認し、親と対話した」といった回答が得られた。これは、授業での探究を起点に、生徒が日常生活の中で多面的・多角的に物事を捉え、社会と自分との繋がりを自覚的に認識し始めた証拠である。構造を理解してこそ、初めて社会参画へ踏み出せるという本実践の意図は、一定の成果を得たと言える。

また、本発表で採用したビデオ発表形式は、入学当初から1学期間にわたる生徒の長期的な変容を可視化したものであり、参観者からは「生徒の思考の深化を克明に確認できる画期的なスタイル」との評価をいただいた。ICTを駆使した新しい授業研究の方法論を提示できたと考えている。

最後になりますが、本実践は、龍谷大学の中本和彦教授をはじめ、諸先生方、撮影に協力いただいた業者の方々など、多くの方々の多大なるお力添えによって完成いたしました。筆者がこの実践を通して伝えなかったのは、個別の成果以上に、日々の校務や私生活に追われる多忙な状況下でも、ここまで「挑戦」できるというプロセスそのものです。このささやかな挑戦が、日本の教育現場へのささやかな貢献となることを願っています。筆者自身、これからも「問い続ける」存在でありたいと思います。皆様に心より感謝申し上げます。

## 参考資料

- ・文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編」2017年。
  - ・森分孝治「社会科授業構成の理論と方法」明治図書、1978年。
  - ・中本和彦「単元「オーストラリア」の授業設計—社会構造を中核にした地誌学習—」地理教育フォーラム(2)、2001年。
  - ・峯明秀・唐木清志「子どもと社会をつなげる!見方・考え方を鍛える社会科授業デザイン」明治図書、2020年。
  - ・福西隆弘「経済成長の持続に向けて:産業多様化への高い壁」国際問題 No. 650、2016年。
  - ・森本真「躍動するアフリカ」ベレ出版、2023年。
  - ・椿進「超加速経済アフリカ」東洋経済新報社、2021年。
  - ・坂口安紀編「途上国石油産業の政治経済分析」アジア経済研究所叢書6、2010年。
  - ・外務省HP「日本とアフリカ」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100498557.pdf>。
  - ・別府正一郎「アフリカ人類の未来を握る大陸」集英社新書、2021年。
  - ・平野克己編「アフリカ経済学宣言」研究双書No.529、2003年。
  - ・星野尊兼・鶴沼秀雅「社会参画力を高める社会科授業に関する研究—『提案型社会参加授業』の構想を通して—」福島大学総合教育センター紀要第25号、2018年。
  - ・落合雄彦「ナイジェリアにおける軍事政権と個人支配」佐藤章編『アフリカの「個人支配」再考』調査研究報告書/アジア経済研究所、2006年。
  - ・安田夏菜「みんなはアイスをなめている」講談社、2020年。
  - ・倉成英俊「伝説の授業採集」宣伝会議、2022年。
  - ・ポール・コリアー「最底辺の10億人」日経BP、2008年。
  - ・井田仁康監修「地図でスッと頭に入る世界の地理」昭文社、2025年。
  - ・松田素二「アフリカを学ぶ人のために」世界思想社、2023年。
  - ・野村修一・ジェームス・クリア「最後の市場アフリカ」日本実業出版社、2014年。
  - ・ティム・マーシャル「地政学で分かるわたしたちの世界」評論社、2020年。
  - ・寛将英「考えるスキルを武器にする」フォレスト出版、2023年。
  - ・ギョーム・ピトロン「レアメタルの地政学」原書房、2020年。
- その他、大会冊子掲載資料・授業プリント内参照資料ほか多数参照。



## 授業実践②「関東地方」

地 理 的 分 野 授 業 者

久井 健史（堺市立宮山台中学校）

### 1 研究の流れ

2023年頃から本格的に研究を開始し、研究部会において本大会の目標やテーマを決めていく中で、今までの堺市の研究では踏み込んでいなかった「社会参画」が挙げられた。授業における社会参画とは何なのか、どうすれば参画したといえるのかなど、新たに考えなければならぬことが多くあった。本大会のテーマと実際に作った授業が一致しているのか、子どもたちの姿はどうか、他の単元とのつながりはどうかなど、中本教授をはじめ、堺市・大阪市・その他の大阪府下の先生方から研究部会のたびに多くの意見をいただくことができ、その結果、当日の発表を成功裏に終えることができた。この機会を可視化するために、以下のように研究部会や日本地理の授業づくりにおける過程をまとめた。

表1 本授業実践にいたるまでの経過（筆者作成）

	日付	内容	場所
2024	1月18日	中本教授による講演(堺市中教研) 「社会参画の授業をどうするか？」	堺市共用会議所
	2月13日	中本教授による講演「知識の構造図」	大桐中学校
	3月23日	地理的分野分科会 単元構成・授業の検討	金岡南中学校
	3月29日	全中社研究部会	天王寺中学校
	6月28日	関東地方プレ実践(堺市中教研)	金岡南中学校
	8月2日	全中社研究部会・分野別研究	大阪市総合教育C
	8月5日	関東地方授業検討会	宮山台中学校
	9月中	関東地方プレ実践	赤坂台中学校
	10月21日	関東地方プレ実践 地理的分野分科会	大桐中学校
	12月26日	全中社研究部会・分野別研究	大阪市総合教育C
2025	1月23日	関東地方プレ実践(堺市中教研)	宮山台中学校
	2月1日	全中社研究部会・分野別研究	大阪市総合教育C
	2月3日	全中社研究部会・地理的分野分科会	天王寺中学校
	2月27日	地理的分野分科会	天王寺中学校
	3月11日	中本教授と関東地方の単元構造の打ち合わせ	四天王寺大学SC
	3月26日	全中社研究部会・分野別研究	大阪市総合教育C

実際の研究としては、表の過程では表れない部分も多く存在する。中本教授とは会う機会が限られているためメールによるご指導もいただいたり、2024年10月21日の大桐中学校でのプレ授業に向けて、授業実践Ⅰの小谷先生と関東地方の各時の授業を綿密に打ち合わせを行ったりと見えない部分も多い。ここでは多く書かないが、研究は、一人では難しく、部会や集まりで多くの人の意見をいただき議論することで有意義になると改めて感じた。

### 2 本研究の目標と取り組み

- ・関東における一極集中を中心に複数単元を構成することで問い続ける子供の姿を育成することができるのではないか。
- ・一年時から問いと資料でせまり、単元マップで思考整理しながら課題に取り組むことで思考が深

まるのでないか。

- ・最終的な目標は近畿の授業において「リアルな私たち」について内省・自覚する。

### 3 本研究に関わる部分の単元の構想

R6 12月	R7 1月	R7 2月～4月	R7 6月	R7 6月	R7 7月	R7 9月
アフリカ州	北アメリカ州	日本の 地域的特色	中国 四国地方	東北地方	関東地方	近畿地方
アフリカの貧困 と植民地構造	産業を 中心とした 都市の形成	日本の課題 地形と災害 少子高齢化 過疎・過密化 産業の停滞	少子高齢化 ストロー現象	少子高齢化 ストロー現象 都市と地方の 供給関係	少子高齢化 ストロー現象 都市と地方の 供給関係 首都(都市)	少子高齢化 ストロー現象 都市と地方の 供給関係 首都(都市) 行政との関わり

図1 本研究を含めた単元構想（筆者作成）

一年時の世界地理の学習過程から、本研究のための授業に取り組んだ。実践Ⅰのアフリカの授業だけでなく北アメリカ州においても都市の形成に重点を置いた授業を構成した。その際の問いは農地だった場所にシリコンバレーはなぜできたのか？と設定し、今回の一極集中を考える際にも大事な要素である「大学」「企業」「政治」などの要素についても触れている。その後、日本の各地域の学習に入る前に行う日本の地域的特色の単元では地形や人口、産業などを中心に日本全体を概観し、少子高齢化や過疎・過密、産業の停滞などの日本の課題を見つけることを目的としている。その上で、なぜそのような社会構造になっているのかを各地域の学習で探究していくことを伝え、各地域の学習に入る。

初めの中国・四国地方では、少子高齢化を中心に南四国・山陰の現状を把握し、その要因として交通網の発展による都市部への人口移動に気付き、ストロー現象を探究過程でつかむ。その後、参画の問いとして「四国新幹線建設に賛成か反対か」を問う。

続く東北地方では、前時の学習を踏まえた予想を立てさせたうえで東北がどのような地域なのかを探究する。東北の産業と交通網の関係を学習したうえで、東北を中心に発生した東日本大震災が関東地方へ大きな影響を与えたことに気付かせる。その結果、首都東京を中心とする都市部への供給関係に気付く。その後、参画の問いとして「南海トラフは日本にどのような影響を与えるか」を問う。実際の予想データから、生徒自身が住む地域への影響の大きさに気付くこととなる。

そして、本研究の中心単元である関東地方では、日本経済の中心でもある首都東京を題材に、どのような都市なのか？と産業や企業の集積の面から捉えさせることで、首都東京における一極集中について深く考察し、その弊害として地方の衰退につながっていることに気付くことで、自分の中で考えている東京のイメージを変化させて自分事として捉えることができるように工夫している。このように新たな社会認識によって既存の自己の社会認識を自覚し、内省しなおすことを目的としている。

日本の一極集中の現状と、そこから危惧される未来について探究したうえで最後に、生徒自らが生活の基盤としている近畿地方を扱う。関東で学びを得た今の日本の状況から自分たちの住んでいる大阪の現状は？未来は？と考えることでもう一度社会の中の自分について考え、社会参画活動につなげることを目的としている。前半は古都保存法や琵琶湖の条例などの法が近畿の人々の生活に大きな影響を与えたことを探究し、現状の大阪の経済発展上の課題の一つと考えられる工場棟制限法と大阪の街づくりに着目し、行政と日常生活の関係に気付いたうえで、現大阪の行政政策に触れ、今後の大阪はどうしてい

くべきか？自分自身はどうするのか？を考えさせることを目的としている。

こうした単元ごとの流れは複雑で、思考の整理が難しい部分もあるため、全単元で単元の学びマップを作ることで、前時の復習がしやすく、最終的なまとめを書く際にも単元が振り返りやすくなるようにしている。

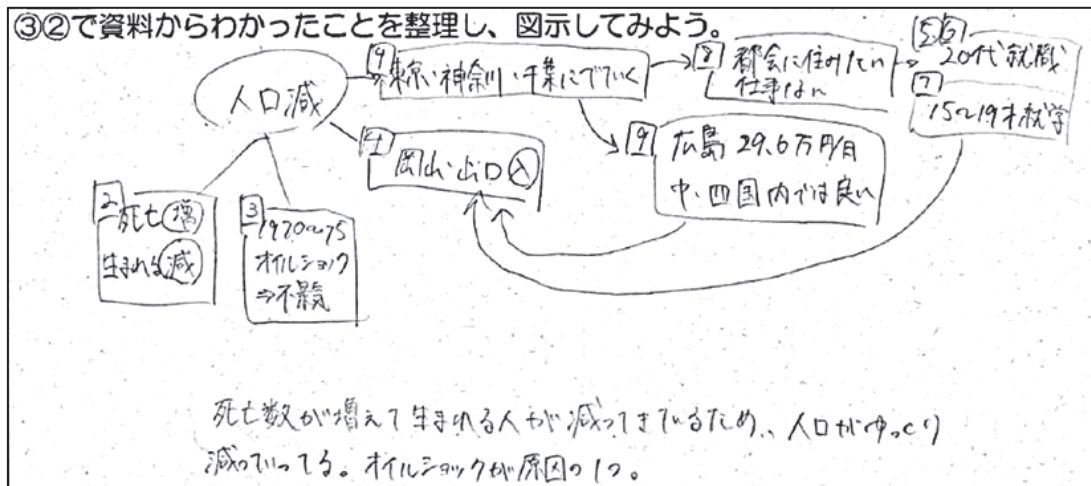
#### 4 各単元の構成について

##### (1) 中国四国地方

中国四国地方の探究過程では、過疎化や高齢化に気付き、交通網の発達がストロー現象を生んでいる中四国の現状を把握することを目的としている。そのうえで、中四国で必要性が行政機関を中心に訴えられている「四国新幹線」を扱い、新たな交通網の必要性を子どもたちに問うことで意思決定を試みる単元である。

また、すべての単元の中で最も多くの資料を採用し、時間をかけて取り組んだ単元でもある。読み取った資料をつなげる場面なども意識的に設けた。

##### 【第二時の授業プリント】



・授業プリントでの記述

##### 【第三時の授業プリント】

第3部 日本のこまごまな地域 第3章 四国地方 第4節 中国・四国地方 1. 中国・四国地方の現状と課題 1. 中国・四国地方の現状と課題 p.187~202  
 [ 地理 53. なぜ交通網が整備されると、四国の人々に良い影響があるのか？～本州四国連絡橋を例に～ ] p.187~202  
 (めあて) 交通網の整備が中国・四国地方の人々に良い影響を与える理由を理解する。また、それを踏まえて、新幹線の建設に賛成か反対か考える。

●授業のメモなど自由に使いましょう。

①本時のテーマの予想をしよう。 ほかの国へいこしかできる。 移動手段 時間も減る 人が入ってくる。	資料14 ⇒ みょうかの取り扱い量が東京・大阪が倍以上に増加した。(東7 → 1944・大5 → 2078)
②資料でたしかめたり、新発見しよう。 (例)資料1 ⇒ 移動時間が橋ができて半分くらい減った。(これも減った) 資料2 ⇒ 橋ができて思ひすべからず？船より車の方が困らない。(渡るのに) 資料3 ⇒ 事故がなくて資料2の次航が増えた。事故が少なかった。(死亡事故) 資料4 ⇒ フリーの移動が減っている。自動車を使って橋と通行か 資料5 ⇒ 交流人口が約2倍に増えた。大島門橋での増えた。 資料6 ⇒ 大阪や神戸方面への高速バスの便数かとても増えている。 資料7 ⇒ 41兆円も影響があった。フリーより車やバスなど 資料8 ⇒ 橋ができてから進歩が就職が4倍かとても増えた。 資料9 ⇒ 船がなくなると10年後には岡山大学では四国の人が増えて香川大学は近畿・中国の人が増えた。 資料10 ⇒ 橋ができて、コンビニが8倍に増えた。高速付近コンビニ 資料11 ⇒ 新渡屋集の生産数が2.5倍になった。 資料12 ⇒ フロコリーの全国出荷額量が10倍くらいに増えた。(1280 → 12700) 資料13 ⇒ 東京市場・大阪市場のシェアが共に全国一に(集約)	資料15 ⇒ 橋ができてから観光客数が1.2 ~ 2.1倍に増加した。(2021年にはコロナなどで減少した) 資料16 ⇒ 橋ができたから観光客が増えるようになった。(命が多く救えるようになった) 観光客か 2021年以降は減ったり フリーでないから、車の通る数か減ったのはコロナのせい 車が増えた
③ポートフォリオに今回の資料を経てわかった本時のテーマの答えを書きましょう。	
④語句の確認 本州四国連絡橋: 本州と四国をつなぐ橋の総称で以下の橋がある。 i 瀬戸大橋: 1988年に作られ、本四連絡橋の中で唯一鉄道かとおる橋。 ii 岡山倉敷市と香川県坂出市をつなぐ。 iii 明石海峡大橋・大島門橋: 1998年に完成し、兵庫県神戸市と徳島県鳴門市をつなぐ。 iv 瀬戸内しまなみ海道: 1999年に完成し、広島県尾道市と愛媛県今治市をつなぐ。	

冒頭でも述べた通り、第三時では16の資料を使った。班で協力しながらすることで、内容も深く読み取ることができていた。また、前時の影響もあってか自然と矢印で読み取った事実をつなげる様子も見られた。

○参画の問いに対する結果と生徒記述

クラスの約半数が授業後に意見が変わった。意見が変わらなかったものも、記述内容に根拠が多く見られた。

動画中にも発言があった「どちらでもない」と述べた生徒も見られ、現地の人の意見と他地域の人の意見（自分）と両側面から述べている生徒も見られた。

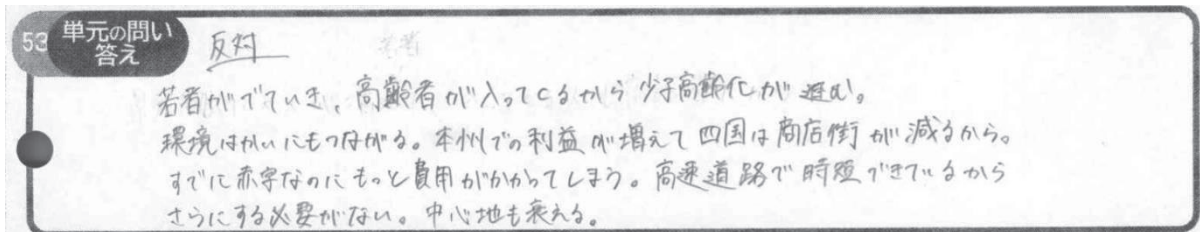
事実を基に意思決定を行ったので、後の単元においても印象に残った生徒が多かった。

○ポートフォリオのまとめの記述

授業前	授業後	人数
賛成	賛成	6
賛成	反対	4
賛成	どちらでもない	1
反対	賛成	3
反対	反対	7
反対	どちらでもない	3
どちらでもない	反対	3

※上記データは撮影クラスのみ

授業前は費用と環境の面から反対であった生徒



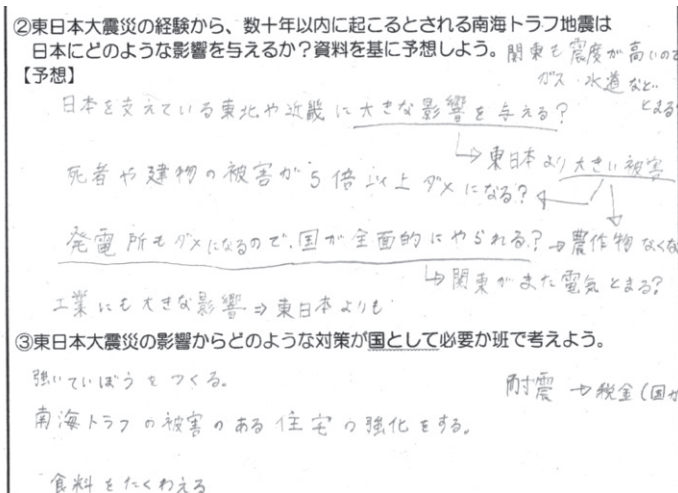
(2) 東北地方

東北地方の探究過程では産業を学んで、終盤に東日本大震災を扱うことで東北地方が他地域へのモノやエネルギーの供給地として価値が高いことに気付くことが目的である。

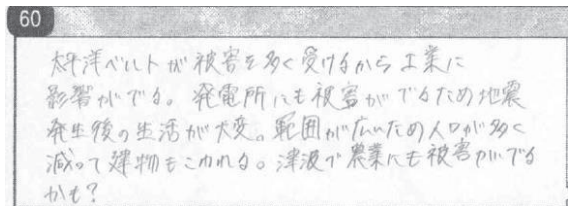
そのうえで、自らも経験するであろう南海トラフ地震を題材に設定し、影響や対策を資料を基に考え、班活動を通して未来予測を試みる単元である。

○生徒の書き込み（単元マップと授業プリント）

第四時の授業プリントの記述



生徒7：南海トラフに対する記述



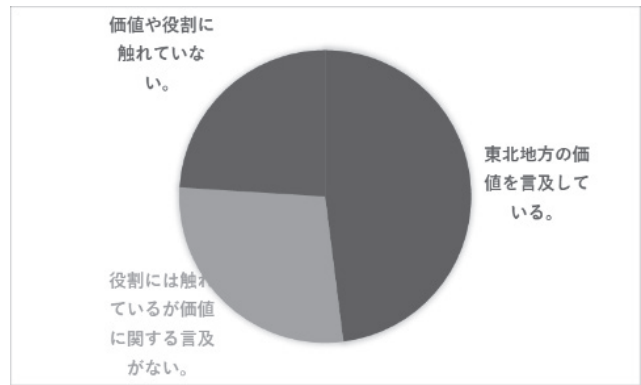
中四国の活動の影響で問いの答えを書く際にも矢印でつなげている様子が見られた。

成果を感じると同時に、これを文章にすることができるよう指導も必要と感じた。

また、記述にもある通り関東への影響についての疑問も出てきているのは単元構成の狙い通りともいえる。

○東北の成果

ポートフォリオの記述から、東北地方の役割やその価値について、記述できているのが半数、役割はかけているが価値について記述できていないのが4分の1程度であった。



(3) 関東地方

関東地方の探究過程では、東京一極集中について、その理由やメリット、デメリットを学び、各地の知事や国政の取り組みから、首都と地方との格差の関係に気付くことが目的である。

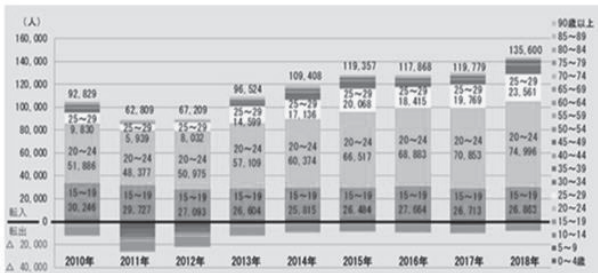
そのうえで、導入時に考えた参画の問いへリフレクションを行いメタ認知することで、自分の中の社会を再構成させる単元である。

学習内容	配当時間	○単元を貫く問い(MQ)	単元を貫く問いの答え(MA)
		●単元の問い(MQ') 本時の問い(SQ)	本時の問いの答え(SA)
単元名	4	○なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのか?	行政機関との連携による人口や企業の集中や市場価値の高さ、情報の集積地など首都としての特性がさらなる集積の利益を生み、その利益を求めて全国からヒト・モノ・サービスが集まることで成長を続けているから
	1	なぜ東京にヒトは集まるのか?	東京に流入する人の多くが若い世代であり、企業や大学が関東の占める割合も多いことから、就職や進学をきっかけに移動してくる人が多いから。
	1	なぜ東京に企業の本社が多いのか?	人口の多さによる市場としての価値の高さや関連企業の集積による効率の良さに加え、本社が集まる理由として全国へのアクセスの良さ(インフラの共有)や中央政府との意見交換、情報の集積など本社を首都東京に置くことの価値が高いから。
	1	一極集中はメリットが多いのになぜ抑制しようとするのか?	人口が集中することで多くの都市問題が発生し、近隣県に住宅地を造成するなど改善を図ってきたが未だに多くの都市問題が残っているから。
	1	なぜ全国の知事が一極集中の是正を求めるのか? 一極集中を続けることができるのか?	地方の過疎化や産業の衰退を生み、止めなければ地域経済の衰退・消滅へとつながる可能性があるから
参画する問い(PQ)		あなたの東京のイメージは?	
参画する問いに対する答え(PA)		(予想される生徒の答え) 地方からの供給で生み出したものを地方に返している 他県に支えられている・生きにくそう・住みにくい街 首都・都会・悪いところ	

○関東地方で使用した問い立てのための資料。

【第一時】

・ **東京都の流入人口と年齢**



(国土交通白書2020より引用)

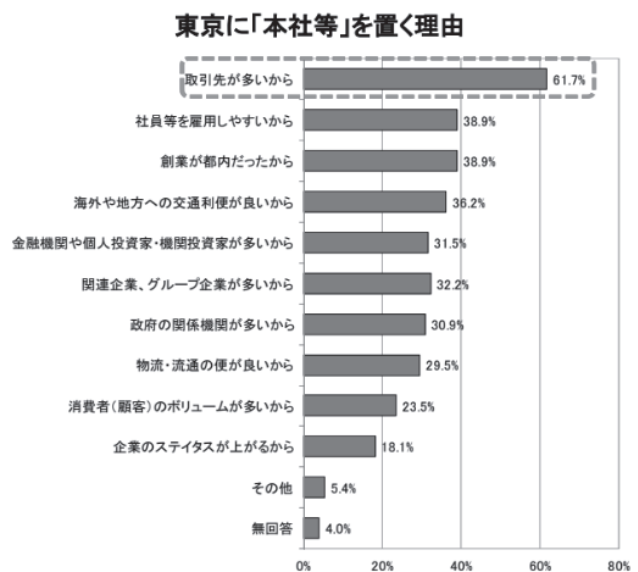
【第三時】

・ **23区内の大学定員抑制のニュース**

※著作権保護の観点より掲載いたしません。

【第二時】

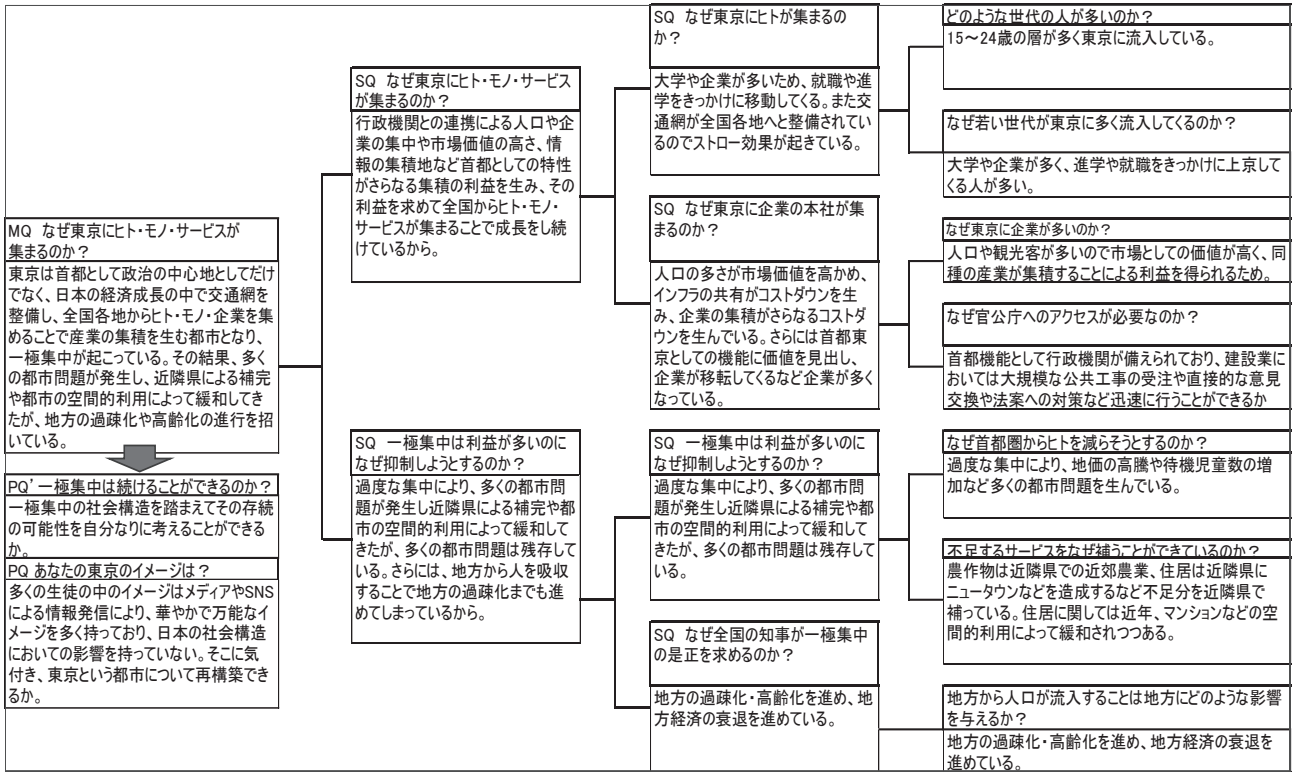
・ **東京に本社を置く理由**



(国土交通省：企業等の東京一極集中に関する懇談会とりまとめ(参考資料)より引用)



○単元構造図



# 単元の学びマップ

単元の問い

なぜ東京にヒト・モノ・サービスが集まるのだろう

単元名

関東地方

地理

235-251

日本の首都 たから 平野 あるから 歴史 → 成長 して これまでに つけている

えらい人 か たくさん いるから? 栄えている → 建物 や 交通 た やすい

#東京圏って知ってる? #関東だけで日本の人口の3割 #もともと江戸時代から日本の中心地だったよね!

中四国地方など  
日本全体  
少子高齢化・産業の空洞化  
中四国 ストロー効果  
東北 関東への電力供給

先生チェック

プリント61のSQ なぜ東京に人が集まるのか?

大学や就職に便利だから  
→ 自分の好きな所やあった所に  
給料高いから。 外資系企業 いけるから。  
いさわしい?

分かったこと・授業を思い出すためのキーワード: 外資系企業  
気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと: これか銀行のやつにもつながる?

知 S A B 態 S A B

プリント62のSQ なぜ企業の本社は東京に多いのか?

エリート が多いから。  
交通が便利で国に関する所が 情報 か 伝わり やすい  
近く、社長が少しの時間しか外に出ないから。(トラブル か お ま て も す ぐ に な る か ら)

分かったこと・授業を思い出すためのキーワード: 東京はエリートが多い。  
気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと: 天皇のめいわくにはなしはないのか?

知 S A B 態 S A B

プリント63のSQ メリットが多いのになぜ抑制するのか?

周りの県が補っているから た ん か 多 く な る し、土 地 か な い か ら (高 い か ら)

分かったこと・授業を思い出すためのキーワード: 東京23区  
気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと: 周りの県は大丈夫なのだろうか?

知 S A B 態 S A B

プリント64のSQ 東京一極集中は続けることができるのか? 土 地 問 題、限 度 か あ る、子 ど も の た め を 思 っ た ら ど う か な ら う か ?

できない。他の県がそれなりに移住手当とか、寄付金とかしたら続けられない。(よく考えたら他の県の方がいいよねと思う人もでてるから)

分かったこと・授業を思い出すためのキーワード: 一極集中  
気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと: 他県の情報がいい。

知 S A B 態 S A B

単元の問いの答え 考えたことを書いてみよう!自分の予想と比べてどうか?

いい大学 か あ っ て 自 分 の 好 ま な 企 業 に い け る か ら。  
→ 優 秀 な 人 才 を 手 に 入 れ る こ と か で き る か ら。  
便利  
情報 か 伝 わ り や す い の と、企 業 の 本 社 多 い か ら。  
交通 か 便 利 な か ら。  
国に関する所 多 い か ら。

分かったこと・授業を思い出すためのキーワード: 便利だから。  
気づいたこと・疑問に思ったこと・調べたいこと:

知 S A B 態 S A B

参画の問い  
東京のイメージは?

61 授業前 便利・移動 便利?  
都会、うるさそう、人が多い、物高そう、イベント多そう

64 授業後 他 県 か な が た ら、何 も で き な い く ら い。  
交通 か 便 利 で、人 の こ と を 考 え て い る 所。  
いい大学・就職ある。メリット大きい。ありと問題のある地域。

一極集中  
どう思う?

あまりよくないと思います。交通 制 限、人 数 制 限。東京入るのに料金とるようにする?  
今、たまたま、東京のサービス(電力)が足りなくて補ってもらっているのに、これ以上多くなったら、他県の方がめいわく、大変になると思います。

知 S A B 態 S A B

大阪とか自分が住んでいる県と比較して? テレビとかのやつでイメージがつく。

・一極集中に対する意見と評価

一極集中  
どう思う？

悪くはないと思う。  
東京以外の都市の経済が活性化し、交通が便利  
になつたので発展し、と思ったから。

知 S A B 感 S A B

一極集中  
どう思う？

周りの県でのカバーができなくなるから一極集中はよくないと思う。  
↓  
一極集中しすぎて、他県がおとろえるから。

知 S A B 感 S A B

一極集中  
どう思う？

自分が東京に住んでいたら良いことだと思うがもしはなりの自分は  
大阪に住んでいるからめいあ、↓(はがら)  
他の県にもヒト・モノ・サセをなんとか集めて東京だけが極集中のを防いでほしい

知 S A B 感 S A B

・過去のイメージはどのように作られたのかに対するリフレクション

ティックトックなどインターネットでの情報。

ニュースとかスマホとかのちよとした事を見て、その部分だけ判断して  
自分の中へ入れ込んでるから。

・東京のイメージの変化

参画の問い  
東京のイメージは？

61 授業前 都会・栄えてる  
人が多、人口密度高そう。

64 授業後 一極集中。  
企業や本社が集まる大都市。人口が多くて  
住む場所やエ地が足りてない。  
同様の県が支えてるから栄えてる。(農業とか)  
(東京だけじゃなく栄えてない)

参画の問い  
東京のイメージは？

61 授業前 大都市・人多い新幹線  
がある。都会。有名人が多い。サがある。  
電車が多く通っている。

64 授業後 一極集中しすぎて、他県がおとろえてしまう。経済的に不安定にな  
る。周りの県でのカバーができなくなる。

○関東地方における成果

イメージに変化が見られた生徒は多かったが、変化の内容ごとに分けると右図の通りである。変化の結果は個々の判断によるため答えはない。ただ、漠然とした都会というイメージから、なぜ栄えているのか？という根拠をもって記述できている生徒が増えたように感じる。

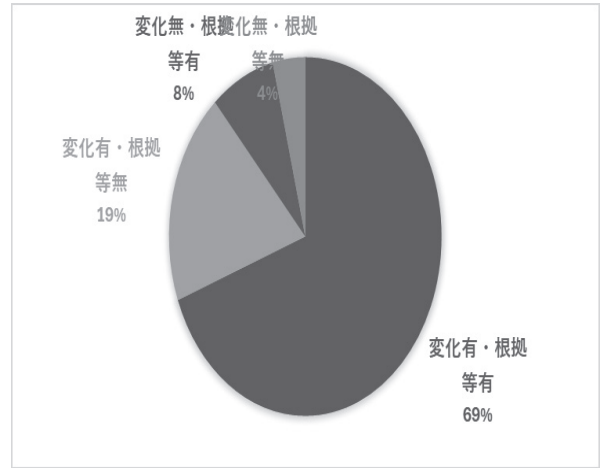


図 関東地方における変化の内容に分けたもの

リフレクションの記述にもあるように、自らの持っていたイメージはメディアを通して形成されたものであり、学習をすることで事実や現実気付いた生徒も少なくない。

映像中にもある通り、わかっていても説明が苦手で、文章で表現ができずに発表時に可視化できなかった生徒も多く、文章を書く力を育成するのも課題であると感じた。

(4) 近畿地方

近畿地方の探究過程では、大阪を中心とした近畿の社会環境や経済の現状を学び、関東で学んだ一極集中から、地方が衰えていく中で大阪はどうか？大丈夫なのか？と自らの住む大阪の価値を考えることを目的である。

そのうえで、日本地理学習の最終として近畿を扱うことで自らの住む地域の現状と取り組みを把握し、社会の中の私たちを考えさせる単元である。

○動画場面で使用した主な資料

- ・副首都ビジョン (大阪府HPより引用)

**副首都ビジョン【改定版】～若者・女性のチャレンジにあふれ、ワクワクする副首都・大阪～** 2023年3月作成

**大阪がめざす副首都の姿の再定義**

大阪が、平時の日本の成長、非常時の首都機能のバックアップを担う副首都として、『東西二極の一端』さらに、複数の都市が日本の成長をけん引する新たな国の形』を先導。

**経済**

- ◆ 駆動力となるのが、若いまちとして再んできた『民都』の力。これを最大限生かして、西日本の中核拠点(分都)として、アジアとの交流(アジアの主要都市)のなかでグローバルに経済成長。
- ◆ 今後の成長には、都市として、経済産業のイノベーション、構造転換に向けた『チャレンジの後押し(ビジネス環境等)』と、『暮らしやすさ、働きやすさ、楽しさ(ウェルビーイング、社会課題解決)』を兼ね備えることが必要。
- ◆ この理念のもと『産業を先取りし、誰もがワクワクする都市』として、『国内外の若者や女性をはじめ多くの人の新たなチャレンジ』で成長を成し遂げ、東西二極の一端をめざす。こうした取組により、『経済的ポテンシャル』を向上。

**バックアップ**

- ◆ 大阪自らの安全・危機管理機能の強化のうえで、さらに、経済力を背景に、経済面、行政・政治面でのバックアップ機能を強化し、非常時に日本を支える『バックアップ拠点(豊都)』として、名実ともに広く国内外の信頼を得る。

**行政・政治**

- ◆ 府市一体の強化と府域の基礎自治強化、将来の選制制を視野に入れた関西、とりわけ、一体の経済圏をなす府域の連携強化、さらには、大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携等を進める。
- ◆ 副首都推進(平時の日本の成長、非常時の首都機能のバックアップ)のための法整備について検討を深め、国にその実現を促す。
- ◆ あわせて、引き続き、大都市における国と地方、広域自治体と基礎自治体のあり方について、公民連携や海外の取組事例も視野に、調査・知見収集。

こうした取組により、『行政・政治的ポテンシャル』を向上。

**副首都・大阪実現への全体イメージ図**

東西二極の一端 さらに 複数の都市が日本の成長をけん引(拠点分散・分権型の国の形)

経済成長、首都機能のバックアップ、行政・政治基盤 充実

変革を先取り 魅力にあふれ ワクワクする都市 国内外から多くの人や投資を惹きつける

(副首都・大阪のめざす都市のイメージ)

チャレンジの後押し (ビジネス環境等) → 人が中心 (若者がチャレンジできる、女性が活躍できる、次世代を育む) → 暮らしやすさ 働きやすさ 楽しさ (ウェルビーイング、社会課題解決)

都市としてのベーシックな基盤 (交通・まちづくり、安全・危機管理機能 + スマートシティ等)

チャレンジを促す経済政策 (大阪人口質を生かしたスタートアップの創出→成長の加速支援、「健康・医療関連分野」、「グリーン開発分野」をターゲットに、イノベーションを創出) → 多様な観光産業の発展 (ヘルスツーリズム、MICE等) → 中小企業の新たな挑戦と万博レガシーの継承

**目標と戦略・工程の再構築**

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

副首都・大阪の実現(経済、バックアップ、行政・政治)を全面的に東京一極集中でなく複数の都市が成長をけん引する国の形への転換が進んでいる

大阪・関西の国出力機関等の機能強化と府市との連携

『経済的ポテンシャル』に注力『行政・政治的ポテンシャル』向上 ※『経済面、行政・政治面でのバックアップ機能』向上

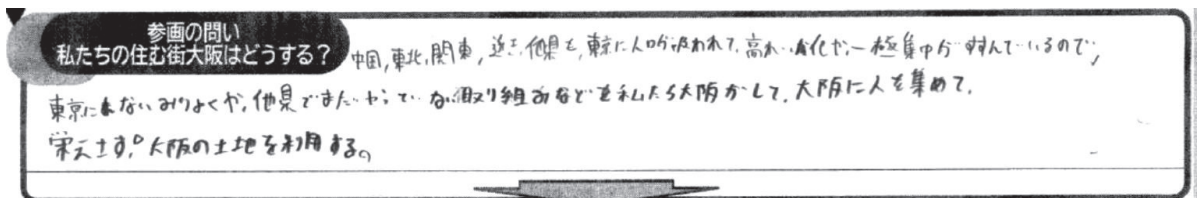
東洋一 一極集中・中央集権 → 拠点分散・分権

他にも、万博の跡地利用案、大阪府高校無償化の目的、中之島アゴラ構想など企業や行政などが発表している資料をそのまま使用した。

#### ○近畿地方の成果

行政が発表しているような難しい資料に対しても前向きに読み取ろうとしていた。これは、今までの授業の中で多くの資料と戦ってきた成果であるとする。実際に細かいところまで読み取ることもできていた。現状の大阪府の取り組みを踏まえて、最後に今後の大阪を考えた際に自分自身が社会を変える一人であり、自らの行動に移そうとするような意見が見られたのも成果であろう。また、昨今の政治の中で今回取り扱った「副首都構想」がメディアで取り上げられており、ニュースなどで見た生徒が授業で扱ったものだと話になることもある。そのうえで万博に行けばよかったと過去の自分の反省をする生徒も多く見られた。授業内容が社会とつながっていると持つようになった生徒がいるのは大きな成果と言えるだろう。

#### ・参画の問いに対する答え



### 5 全体の成果と課題

今回の研究を通して得た成果は3点ある。

1つめは、単元単体で構成するのではなく、社会科全体で指導構成をすることで子どもが問い続けられるようになることである。一年時は世界地理を中心に、諸外国の気候や地形、産業などについて人々の営みとともに多様な地理的（歴史的・経済的）な概念を獲得し、二年時に生かす。日本の地域的特色で日本を概観し、各地の特色とともに日本の諸課題を考察することで社会科学学習が自らに関係することだと自覚させることができた。このようにできたのも、どの概念をどこで使うかや必要な概念の整理が必要であり、そのための問いが繋がっていることが大事だと改めて実感した。柿原が大会冊子本紙で述べている通り、学びのデザインはまだ改良の余地があり、アメリカの授業は実際には今回に活きなかったのは課題であり改善の余地があるとする。

2つめは、難しい資料や膨大な資料であっても問いに対して前向きに取り組める工夫をすれば、子どもたちも慣れて考えが深まることである。最も大事なものは各単元の最初の授業における単元を貫く問いの設定とそのための資料である。今回の地理的分野の研究課題である「自覚的・内省的に社会を認識する」ためには、そもそものイメージや認識がないと難しい。そのために子どもたちに少しでも身近にかつ答えまでの距離が遠い問いを考えるのに苦戦した。もっと最適な問いがあったのではないかと授業後であっても教師自らも問い続けることが大切だと気付いたのも成果である。実際、獲得させたい概念や考えさせたい課題が難しく、導入が強引になった単元はうまくいかなかった。今回発表の授業では導入でのつかみがそれなりにうまくいき、予想以上の問い続ける姿を見ることができた。しかし、関東の最後でリフレクションに時間がかけられなかったため、PQに対する答えが思ったものにならなかったのは課題である。

3つめは、問い返しの重要性である。子供たちの発言に対し、なぜそう思ったのかと改めて考えさせ根拠を明確させ、思考を整理させるために問い返しを行う。根拠を持った発言に対しては深掘りすることを意識した。また、子どもたちの思考を発言させることで、発言者以外の子どもたちの考察を深めることが分かった。発言者に偏りがあったのは課題だが、評価は単元の学びマップで行うため全ての子どもたちの思考を可視化できたが大きい。改良の余地は多くあるが、改めて研究の大事さを感じたのが大きな成果である。

課題については成果とともに記述したが、研究大会を終えて出てきた課題として2点挙げられる。

一つめは編集を意識した撮影時の細かい設定の必要性である。事前に誰のどのシーンを撮るかをある程度撮影スタッフや授業を見に来る研究委員と共有しておけば、もう少しいい場面を見せることができたと考えられるからである。授業は生ものではあるが、ある程度の予測は考えられるのでしておくべきだったと考える。ただし、その共有のためのそれぞれの時間の確保が難しく、校務や私生活といかに折り合いをつけるかは大きな課題である。

二つめは、研究体制である。平成30年度に行われた近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会に研究委員として参加した際には、毎週のように火曜日に集まって授業や理論について討議・研究をし実践を重ねながら授業を作り上げた。当然勤務時間外である。働き方としては間違っていたであろうし、今回もそうだったとは思わない。だが、有意義であったのは間違いない。研究委員になった時は教員として三年めであった私にとって、授業とは何か、教材研究とは何か、研究とは何か、ということを経験者と議論を重ねる中で自分のスタイルが出来上がっていったような気がする。今回はその土台があったからこそ、多くの協議を重ねなくても終えることができたと考えている。ただ、研究も授業も少し物足りなかったのは否めない。働き方改革が大きく謳われる現代社会において有意義な研究とワークライフバランスは今後も大きな課題として残ると考える。私もまだ教員として11年めと若い方ではあると思うが、時間が多く取れる若いうちに研究大会や研究授業などに多く積極的に参加し土台を築くことが大事だと改めて気付いた。子どもたちに多くを学んでもらうためにどうするか、どのような方法や資料が必要か、今なお自身の学びも尽きず、時間の限り続けていこうと考える。

### I 本研究・実践の全体的意義

#### —「問い続ける」ことを中核に据えた社会科授業の価値—

本研究は、「WHATの問い」を中核に据え、教員自身が問い続け、子どもとともに思考を深化させていく社会科授業の在り方を実証的に示した点に大きな意義がある。単なる授業技法の工夫にとどまらず、現代社会における分断、無関心、ポピュリズムといった課題を踏まえ、社会科が育てるべき市民像を正面から問い直している。

とりわけ、社会問題が「簡単には解決できないからこそ社会問題であり続けている」という認識に立ち、安易な解決策提示に終始しない授業構造を構想している点は重要である。解決できない現実を前に、なお問い続け、考え続ける姿勢そのものを学習の中心に据えることは、持続可能な民主社会を支える市民性育成に直結する。

---

### II なぜ「問い続ける」のか

#### —参画・参加と社会問題理解の関係—

本実践が問い続けることを重視する背景には、現代社会における「見たいものしか見ない」「信じたいものしか信じない」状況への強い問題意識がある。SNSやフィルターバブルに象徴される環境は、正義と正義の衝突、社会の分断を生みやすく、民主主義の基盤を揺るがしかねない。

こうした状況に対し、社会科は「社会参加」「社会参画」を特別な行為としてではなく、日常生活そのものが社会と結びついていることを自覚させる役割を担う必要がある。個人の合理的な選択（例：安い商品を選ぶ、利便性を優先する行動）が、結果として環境問題やフードロスなどの社会問題を生み出しているという構造を理解することが不可欠である。

社会問題は、

- 個々人の合理的行為の積み重ねから生じる「社会的ジレンマ」
- 「痛い」と訴える声によって初めて可視化される「構築された問題」

という二重の性格をもつ。この複雑性を理解するためには、「どうしたらいいか」という結論志向の問いだけでなく、「なぜそうなっているのか」「私たちはどう関わっているのか」を問い続ける学習が求められる。

---

### III 社会参加を支える思考の段階性

#### —育てたい子どもの姿を見据えて—

研究で示された消極的社会参加、象徴的社会参加、積極的社会参加という整理は、社会科・総合的な学習・特別活動の役割分担を考える上で示唆的である。重要なのは、いきなり行動や意思決定に向かわせるのではなく、段階的に思考の質を高めていく点である。

社会科が主として担うべきは、

- 社会の中の自己を反省的に捉える力

- 社会の仕組みや構造を理論的に説明する力
- 行動や提案の限界を見極める熟考力

である。これらが十分に育たないまま意思決定や行動に進めば、感情論や単純な善悪二分法に陥る危険が高い。社会科は、思考の出発点としての「問いの癖」を育てる教科であることを再確認する必要がある。

---

#### IV なぜ「WHATの問い」なのか

##### —深い学びを支える本質的問い—

本研究の中核は、「WHAT」の問いを授業の軸に据えた点にある。「どのような (HOW)」問いは事実の収集・整理には有効であるが、学習が表層にとどまりやすい。一方、「なぜ (WHY)」の問いは思考を深めるが、前提となる概念理解が不十分だと感情的・断片的な議論に陥りやすい。「WHAT (何か)」という問いは、対象の本質・個性・構造を捉えようとする問いであり、深い理解の土台となる。例として、

- 「東京とはいったいどんなところか」
- 「都市とは何か」
- 「アメリカ合衆国とはいったいどんな国か」

といった問いは、単なる知識量ではなく、構造的・理論的な説明を要求する。この問いに教師自身が答えられない限り、生徒に深い学びを促すことはできない。教師の教材研究の質が、そのまま授業の深さを規定することが示唆されている。

---

#### V 理論的知識を用いた地域理解の構造化

##### —アフリカの学習の実践から—

アフリカの学習においては、

- 植民地的社会構造
- 資源・人口と発展可能性
- 国家の脆弱性 (失敗国家論)

といった理論的知識を組み合わせ、「アフリカとはいったいどんなところか」というWHATの問いに迫っている。重要なのは、これらを単なる事実に知識として扱うのではなく、地域を説明するための「理論」として位置づけている点である。この構造化により、

- アフリカの本質的理解
- 他地域 (ラテンアメリカ等) への理論の転用
- 演繹的推論能力の育成

が可能となる。地理学習を「覚える教科」から「考える教科」へ転換する試みとして高く評価できる。

## VI 思考力・判断力・批判的思考力の育成

### —研究成果との整合性—

計量的研究により、

- 経験的推論力
- 社会的判断力
- 批判的思考力（メタ認知）

の相互関係が示されている点も、本実践の理論的裏付けとなっている。理論を用いた演繹的推論が社会的判断力を高め、それが批判的思考力の発達を促すという知見は、WHATの問いを軸とした授業構成の妥当性を支持する。このように構成された授業を1年次から積み上げたことで、関東での学習、さらに近畿の学習においては、これら3つの力の活用が見られている。同時に、生徒は表面的な事象の受け止めに終わらず、本質に迫ろうとする姿勢が見られる。

また、遠い地域・他人事の課題から始め、徐々に身近で感情が入りやすい問題へと接続していくカリキュラム構成は、冷静な判断力を育てる上で極めて有効である。

---

## VII WHATが生む対話と協働

### —教師集団の学びとしての意義—

WHATの問いを共有することは、生徒の学びだけでなく、教師の協働を促進する。単元の本質を巡って議論する過程で共通言語が生まれ、教材・資料・発問の検討が建設的に進む。授業後の振り返りも、単なる感想ではなく、問いの妥当性や深まりを軸にした対話となる。

この点において、本実践は「教員が問い続ける社会科授業」という理念を体現しており、校内研修・教科研究の在り方にも大きな示唆を与えている。

---

## VIII 結びに

### —育てようとする市民像—

本研究が最終的に目指すのは、

- 疑い、迷い、立ち止まって考える力
- 感情やポピュリズムに流されない判断力
- 権威やカリスマに依存しない自律性

を備えた成熟した市民の育成である。

解決できない問題を前に、なお問い続けること。その営み自体が、民主主義を支える力となる。本実践は、その可能性を社会科授業の中で具体的に示した点で、高く評価されるべきである。

今後は、中核的概念との接続やカリキュラム全体での整理を進めることで、さらに発展的な研究につながることを期待される。



# 歷史的分野



### 1 はじめに

全国中学校社会科教育研究大会（以下、「全中社大阪大会」という。）の立ち上げ当初、歴史的分野の研究体制は模索の段階にあった。その後、大会テーマが「一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～」と決定されたことを受け、歴史的分野においても、いかにして歴史学習を未来へつなげ、生徒の社会参画力を育成するかという命題に向き合うこととなった。地理や公民に比べ、過去の事象を扱う歴史学習は、社会参画との結びつきが見えにくい側面がある。この課題に対し、歴史学習ならではの視点から「社会参画力」を再定義し、それを具現化するためのカリキュラムと具体的な手立てを構築することを目的として研究が進められた。

### 2 歴史的分野としてのテーマ

歴史の授業において、生徒から発せられる「なぜ歴史を学ぶのか」という問いは、単なる素朴な疑問にとどまらず、「過去のことなんて勉強する意味がないのでは？」といった歴史学習の意義そのものを問うものでもあろう。「社会のことが分かる」とか「社会について考えたい」といった現代社会（VUCAの時代）の課題に対し、即断せず多角的に問い続け、より良い社会をめざそうとする「問い続ける力＝社会参画力」が身につくカリキュラムとは？、そしてそれはどのように社会につながっていくのか？、そのような問いを立てて研究がスタートした。

これまで、大阪では歴史的エンパシーを中心とした研究を行ってきたが、本研究では、あくまで現代を生きる学習者自身が主体であるという点に立ち返り、「現代と過去の往復」をキーワードに据えた。現代の諸課題と過去の歴史的な事象を往還することで、学習者は歴史家のように資料を読み解き（歴史家体験）、当時の人々の営みや意思決定の背景（文脈）を「なぜだろう？」「もしかしたら当時の人々はこう考えたのではないのか？」と過去との対話をするがごとく探究する。この過程で獲得される「概念的知識」こそが、現代社会を読み解き、参画するための基盤となると考えたのである。

一方、歴史学習によって社会に参画する力や社会を認識する力が養われるというのは、生徒にとって想像しにくいことであろう。先述のような理論を具現化するために、すべての単元において学習者を当事者意識へと誘う「参画の問い」を設定した。

さらに、探究の過程や思考の変容を可視化し、単元で得た概念的知識を記録できるよう、「1枚ポートフォリオ」等のツールを開発・導入した。学習者は単元で学んだことを通して「参画の問い」について考えることができ、参画の問いに対する学習者の考えの中に単元で身に付いた知識が表われるのである。また、単元ごとの学習者のポートフォリオを比較していくことで、学習者の概念的な知識の成長を見とることも意図している。

### 3 公開授業について

本大会では、上述の理論に基づき、以下の2つの授業公開（ライブおよび動画）を行った。「大正デモクラシーの時代」の授業では、公民的分野未履修の生徒にとって理解が難しい「政党政治」や「民主主

義」の萌芽を扱う。授業実践校の生徒の実態として、基礎的な語彙や読解に課題を抱える層も少なくなかったが、それゆえにこそ、歴史学習を通じた市民的資質の育成が課題でもあった。授業では、「市川房枝に現代の民主主義について手紙を書こう」という「参画の問い」を扱った。生徒はここまで探究してきた当時の民主化への熱量や課題を確認し、それを現代の日本の民主主義と比較・関連付ける活動を行った。タブレット端末のトラブル等はあったものの、生徒たちは単元で獲得した知識を活用し、自分なりの言葉で過去と現代をつなぐ表現を行うことができた。これは、歴史学習が現代社会への認識を深める有効な手立てであることを実証するものであった。

「武士の政治の展開」の授業では、室町時代の「土一揆」を題材に、権力が分散し民衆が台頭する時代の構造的変化を探究した。全4時間構成で組み立てた本単元の実践を、教室での生徒の姿に基づき、単元の流れと生徒の思考変容が読み取れるよう、40分程度の動画に再構成して発表した。導入段階では現代のデモ活動に対して「自分とは無関係」と感じていた生徒たちが、「なぜ室町時代に一揆が起こったのか」という問いを探究する過程で、当時の人々の切実な思いや行動原理に触れ、最終的には現代の社会運動に対しても「自分たちも立ち上がることがあるかもしれない」などと捉え直す姿が見られた。動画を通じて、生徒が歴史的事象を単なる過去の出来事としてではなく、現代の社会運動に対しても「自分事」として捉え直していく「潜在的な社会参画力」の表出を確認することができた。

#### 4 年間指導計画について

本研究の特筆すべき成果の一つは、すべての単元に「参画の問い」を位置づけた年間指導計画の策定である。研究部員全員が授業づくりに関与し、オンライン会議を活用して毎週検討を重ねる体制を構築した。「参画の問い」の設定は、既存の知識を問い直す高度な教材研究を要するものであったが、部員間での多角的な議論により、その質を高めることができた。また、探究学習の導入による授業時数の不足が懸念されたが、資料の精選や問いの構造化により、年間99時間内での実施が可能であることが確認された。これにより、単元テストや振り返りの時間を確保しつつ、深い学びを実現する現実的なモデルを提案することができたと考える。

#### 5 研究協議について

大会当日の研究協議では、参加者から「現代と過去の往復」というアプローチに対し、多くの意見が寄せられた(表1)。特に、公民的分野未履修の段階において、生徒がいかに現代社会の事象を自分事化できるかという点に関心が集まった。協議を通じて、学習者はすでに生活の中で獲得している概念的知識を持っており、適切な「問い」によってそれを引き出し、歴史的事象と結びつけることの重要性が再確認された。また、「参画の問い」が学習者の歴史学習への意欲喚起に寄与している点や、探究的な学びが市民的資質の育成につながる可能性について、肯定的な評価を得ることができた。

#### 6 成果と課題

本研究では、歴史的分野における社会参画力の育成をめざし、カリキュラム開発と授業実践を一体的に進めてきた。最大の成果は、組織的な研究体制のもと、全単元を通貫する指導計画と具体的な授業モデルを提示できた点にある。実践を通じ、生徒が「参画の問い」を軸にして歴史と現代を行き来し、社会への認識を変容させていくプロセスを確認できたことは大きな収穫であった。一方で、課題としては、すべての単元において十分な実践検証が行われたわけではなく、「参画の問い」の質には単元ごとのばらつきも見られる。また、1枚ポートフォリオに記述された生徒の変容を長期的に追跡・分析し、獲得

された概念的知識や社会参画力の定着度を検証することが今後の継続的な課題である。今後は、本大会で提案したカリキュラムの実践を重ね、生徒の具体的な姿（事実）に基づいた検証を進めることで、歴史教育における「問い・探究、そして参画」の意義をさらに深めていく必要がある。

(表1) 研究協議における質疑応答・意見まとめ

主な質問・意見の内容	授業者による回答・意図
歴史と公民の授業の両立（比較の難しさ）について。大正時代と現代の政治を比較すると、歴史学習の本質が失われ、公民的内容に偏ってしまうのではないか。	歴史学習を通じて現代の課題を考える際の「解像度」を向上させることが重要。歴史の段階では、現代の視点と歴史的視点を往還させながら、見方・考え方の深化に注力する。(寺井)
個別最適な学びと社会参画へのこだわりについて。参画を強調しすぎると、生徒が教員の敷いたレールの上を走らされている印象を受ける。生徒自身が問いを立ててゴールに到達するプロセスが重要ではないか。	個別最適化された学びは、探究の質が確保されていることが前提である。その中で、生徒自身のつぶやき（問いと納得）を重視している。ポートフォリオを通して声掛けを行い、表現意欲を支えながら、「見方の更新」を支援している。(寺井)
「共生社会」や「社会参画」と歴史学習の相性について。過去を対象とする歴史において、未来への意志を問う社会参画を、全ての単元（古代など）に設定することに無理はないか。	「社会科」における歴史学習として、導入部で現代社会に目を向けるため、全単元に「参画（にいぎなう）問い」を設定した。歴史は、公民的分野で資質・能力を花開かせるための「種づくり」の側面も持つ。(寺井)
生徒の歴史に対する立ち位置（歴史の中か外か）について。大正時代は「民主主義」という概念的な問いのため「歴史の外」の視点になりがちだが、室町時代は「(困難に)立ち向かう」という行動の問いにより、当時の人々の状況（歴史の中）に入り込みやすいのではないか。	毎時間の資料に基づいた「探究」の深さが重要である。導入で現代の感覚から予想を立てても、資料を通じて当時の状況（当時性）に基づき考えを深めることで、最終的に「歴史の中」の視点を獲得していく。(寺井)
生徒の意見の拾い方と時代像の把握について。授業中の「仲間」という生徒の発言から時代像を深めるやり取りは可能か。また、現代の目（視点）と当時の人々の目の違いをどう分析させるか。	生徒の意見を繋いで板書し、他の生徒に意見を促す工夫をしている。「デモ」のような現代的な概念による認識が出たとしても、それを当時の人々の困窮や主張を深く考えるきっかけにできれば、学びの価値がある。(柳江)
単元構成の精選と時間配分について。大正時代を6時間で構成すると時代像を十分に掴みきれず、多面的・多角的な考察が困難になるのではないか。	単元が長すぎると構造的な理解が難しくなるため、5～6時間程度が適切であると考えている。現代との繋がりを常に問いの軸に据えることで、内容を構造化している。(寺井)
歴史を単なる過去の暗記に留めず、現代との比較を通して、歴史が現代につながっていることを生徒に実感させることができていた	——
「社会参画」という、歴史的分野とは一見相性が難しいと思われるテーマに対し、全ての単元に「参画にいぎな	——

<p>う問い」を設定した試みは、意欲的で参考になった</p>	
<p>ポートフォリオに書かれた生徒の意見が素晴らしかった。生徒が日頃から自分の意見を表現することに前向きに取り組んでいる様子が伺えた。</p>	<p>—</p>

2021.11.14

一人ひとりの未来につながる社会科の創造  
問い・探究、そして参画へ

**なぜ歴史を学ぶの？**  
「参画の問い」を設定した単元の実践を通して

都立府中女子高校 大塚西立止正 社会科 専任講師

★ 歴史の授業をしていると...

なぜ歴史を学ぶの？

過去のことを学んでも役に立たないだろう...

生徒

★ 社会科が「社会」科であるために

社会のことが分かる！

社会について考えたい！

生徒 歴史では...？ 生徒

カリキュラムは？ 社会とのつながり？

★ 2018年近中社大坂大会では...

・歴史的エンパシーの研究

すべての単元で可能なのか？ それ自身が目的化していないか？

▶考えるのは「今」の自分

★ 「現代と過去の往復」

参画の問い

1枚 ポートフォリオ 学習者

過去 現代

探究学習 { 単元を貫く問い 単元の構造図

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

★ 歴史で身につく社会参画力とは？  
「現代と過去の往復」

歴史だからこそ学べることは...？

Volatility Uncertainty Complexity Ambiguity

過去はどうだろう？

★ 歴史で身につく社会参画力とは？  
「現代と過去の往復」

立ち上がらないと...!

踊り狂う...! Zesty Ambiguity

戦争は...

★ 歴史で身につく社会参画力とは？  
「現代と過去の往復」

過去の中での諸課題 しかも結果が分かる...!

★ 歴史で身につく社会参画力とは？  
「現代と過去の往復」

諸資料

どんな意義が？ 学習者

なぜ？

過去 現代

★ 歴史で身につく社会参画力とは？  
現代の課題に置き換えると...

諸資料

現代の諸課題

どんな意義が？ 私

なぜ？

本当かな？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？

★ 「参画の問い」とは？

どうなっているの？

現代的な諸課題

過去の中での諸課題

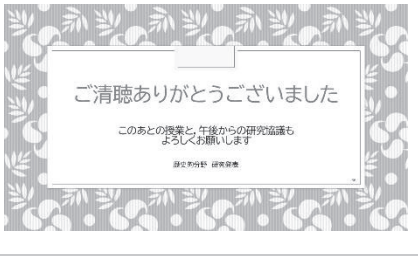
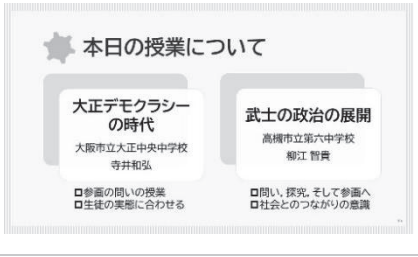
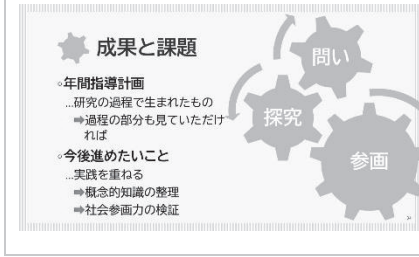
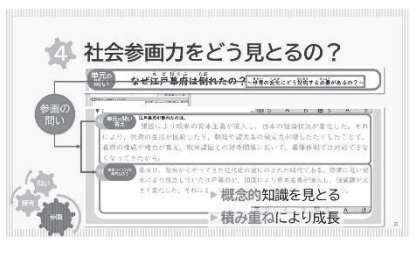
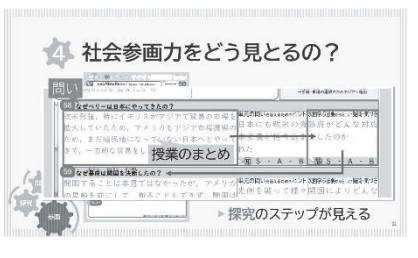
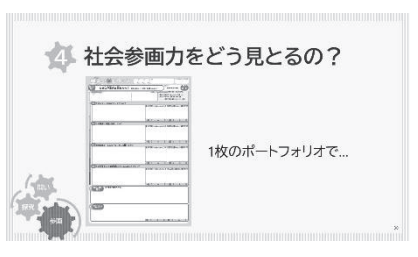
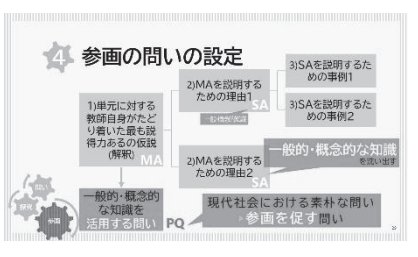
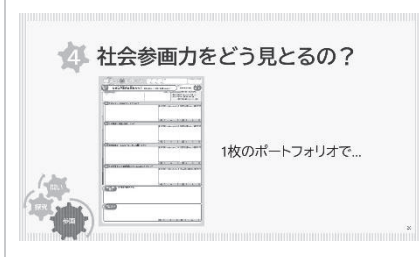
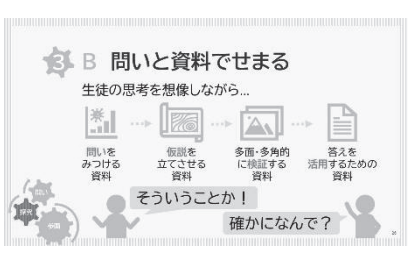
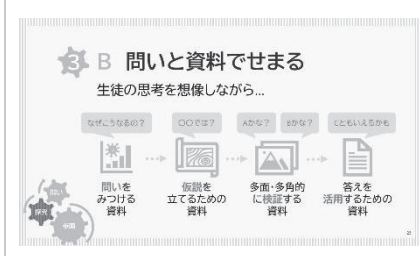
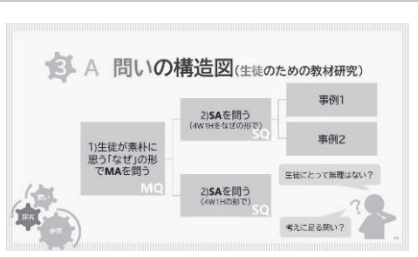
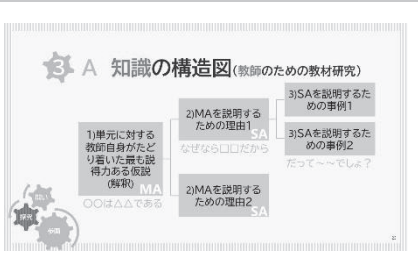
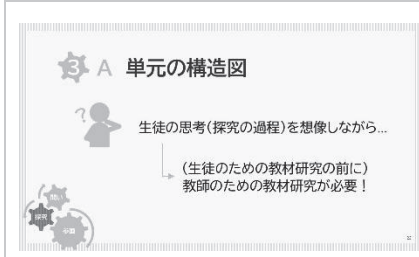
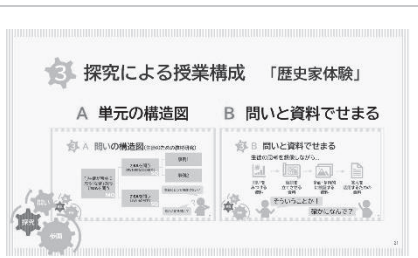
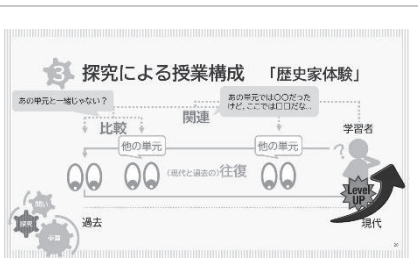
探究 → 概念的な知識を獲得

確かになぜなんだろう？

2 「参画の問い」とは？

3 探究による授業構成  
3-A 単元の構造図  
3-B 問いと資料

1 歴史で身につく社会参画力とは？  
4 社会参画力をどう見とるか？



研究の推移

年月日	内 容
令和5年 8月17日	第1回分野部会 ・メンバー、研究体制の確認 ・これまでの研究について確認
10月11日	第2回分野部会（大阪市中学校社会科研究大会） ・単元「律令国家の変化と貴族の政治」公開授業（上嶋一志 教諭）
11月19日	歴史的分野の classroom を立ち上げる
12月2日	第3回分野部会 ・全中社栃木大会、近中社和歌山大会について報告 ・研究理論について検討 ・年間指導計画について進め方を検討
令和6年 1月12日	第4回分野部会 ・3月に単元「日清日露戦争」において公開授業を行うことを決定 ・授業について検討
2月13日	第5回分野部会 ・単元「日清日露戦争」について検討
2月20日	第6回分野部会 ・単元「日清日露戦争」について検討 この間、単元「日清日露戦争」について LINE 上で検討
3月1日	第7回分野部会 ・単元「日清日露戦争」公開授業（松浦悟史 教諭）
3月7日	第8回分野部会（全中社実行委員会と同日開催） ・ここまでの研究についてまとめる ・年間指導計画について進め方を決定
3月29日	第9回分野部会 ・年間指導計画について担当組み分け ・実践授業の持ち寄り
5月14日	第10回分野部会 ・年間指導計画作成のスケジュール組み ・発表授業の決定
6月10日	この日より7月22日まで毎週月曜日5時間目の時間に年間指導計画の授業について発表・検討会を Google meet で行う（年間指導計画検討会）
8月2日	第11回分野部会（全中社全体会と同日開催） ・ここまで発表があった年間指導計画の授業について再検討、PQの検討
8月23日	第12回分野部会 ・年間指導計画について再検討内容の発表 ・年間指導計画の次回以降のスケジュールの確認 ・当日発表用授業の単元「大正デモクラシーの時代」について検討
10月9日	大阪市中学校社会科研究大会 単元「大正デモクラシーの時代」紙上発表
10月28日	この日より12月16日まで毎週月曜日5時間目の時間に年間指導計画の授業について発表・検討会を Google meet で行う（年間指導計画検討会の2巡目）
11月13日	第13回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」の授業検討会
12月26日	第14回分野部会 ・年間指導計画について再検討、PQの検討 ・会場について下見内容の確認 ・冊子掲載について

年月日	内 容
令和7年	第15回分野部会
1月17日	・単元「大正デモクラシーの時代」授業検討
1月26日	第16回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」授業検討
2月1日	第17回分野部会（近中社交流会と同日開催） ・年間指導計画の掲載書式統一の確認 ・当日の公開授業について ・当日の時程案について ・指導案について
2月6日	第18回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」プレ公開授業（澤山純一 教諭） ・資料の精選、課題の再構成など検討
2月27日	第19回分野部会 ・単元「大正デモクラシーの時代」プレ公開授業（神近篤志 指導教諭） ・授業について再検討
3月18日	第20回分野部会 ・単元「大正デモクラシーの時代」プレ公開授業（寺井） ・来年度発表予定の生徒の視察
5月8日	全中社全体会 ・会場レイアウト案、業務分担案、実施要項の提示
6月17日	第21回分野部会 ・当日授業についての検討 ・単元「武士の政治の展開」のビデオ撮り日程の決定 ・研究冊子についてスケジュールの確認、オンライン上で進めていくことの確認
7月4日	第22回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」プレ公開授業（柳江智貴 教諭）
7月8日	この日から9日・15日・16日の日程で単元「武士の政治の展開」のビデオ撮影
7月9日	第23回分野部会 ・単元「大正デモクラシーの時代」プレ公開授業（小谷彩花 教諭）
7月10日	年間指導計画の最終チェック（以後8月上旬までオンライン上で）
7月11日	第24回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」PQについて最終検討
7月28日	第25回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」動画編集についての検討会
8月5日	第26回分野部会（全中社実行委員会と同日開催） ・当日の運営、役割分担について ・分野別提案について
8月21日	第27回分野部会 ・単元「武士の政治の展開」動画編集（第2案）についての検討会
9月6日	QRコードの内容についてオンライン上で検討・編集作業（10月30日まで）
9月19日	第28回分野部会 ・単元「大正デモクラシーの時代」プレ公開授業（京田将典 教諭） ・QRの内容について確認 ・当日の担当ごとの役割確認 ・当日会場の展示物について
9月22日	興国高校においてビデオ映写テスト

年月日	内 容
令和7年	第29回分野部会
10月10日	・単元「武士の政治の展開」動画編集（最終案）についての検討会
10月14日	第30回分野部会
	・単元「日清日露戦争」公開授業（寺井・当日発表クラス）
10月20日	・単元「第一次世界大戦と日本」公開授業（寺井・当日発表クラス）
	第31回分野部会（全中社全体会と同日開催）
	・当日の発表内容について      ・当日の実施要項について      ・研究協議について
	興国高校会場打ち合わせ
10月23日	・単元「武士の政治の展開」動画完成
10月29日	当日研究発表用スライド・原稿完成
11月5日	リハーサル
11月12日	単元「大正デモクラシーの時代」公開プレ授業（当日発表授業）
11月13日	最終リハーサル

## 授業実践①「大正デモクラシーの時代」

歴 史 的 分 野 授 業 者

寺 井 和 弘 (大阪市立大正中央中学校)

### 1 はじめに

本単元を公開授業として選択した理由は主に二点ある。一つめは、私自身が大正時代に対して抱いていた歴史的な関心である。大正時代は「大正デモクラシー」や「大正ロマン」といった言葉に象徴されるように、一見して明るい印象の強い時代である。実際に本格的な政党内閣が誕生し、普通選挙法が制定されるなど、民衆の台頭が顕著に見られた時期であった。しかし、初の普通選挙が実施された頃には時代はすでに昭和へと移り、日本は軍国主義の道を突き進むことになる。民衆の権利が拡大したはずのこの時代が、なぜ直後に戦争の時代へと一変してしまったのか。この歴史的転換点の背景を探ることが、私自身の大きな探究テーマであった。二つめは、本単元を指導する上での困難さに対する挑戦である。政党内閣や普通選挙といった現代政治に通じる仕組みの誕生は重要であるが、公民的分野を未履修の生徒にとって、政党政治の仕組みやその意義を理解することはハードルが高い。歴史学習の前提となる政治制度の疑問に一つひとつ答えながら授業を進める必要があり、政治への関心が必ずしも高くない生徒を前に、私自身、この時代の指導に苦手意識を感じていた。また、世界規模で巻き起こった民主主義の風潮を、生徒の実感にどう結びつけるか。この課題を克服することが本授業の狙いでもあった。

### 2 単元構想について

本研究の当初、私は「なぜ民主主義が広まったのに、直後に戦争の時代へ突入したのか？」という大きな問いを授業の核に据えていた。しかし、研究協議を重ねる中で、一つの単元において昭和の軍国主義までを射程に含めることは、対象とする生徒の実態や時間的制約から困難であるという結論に至った。そこで本単元では、対象を「大正時代」そのものに絞り込み、民衆がいかにして政治の舞台へ登場したのか、その熱量と模索を深く掘り下げる構成へとシフトさせた。ただし、当初抱いていた「後の変容」という視点を捨てたわけではない。単元全体の構成において、前後のつながりを意識したカリキュラム・マネジメントを行うことで、当初の問いを維持する工夫を凝らした。具体的には、本時で「民衆が自らの声を届けようとした努力」を丁寧に追うことで、次単元の昭和期において「なぜその権利が手放され、あるいは抑圧されたのか」という問いが、より切実なものとして生徒の中に立ち上がるように設計したのである。本校の生徒は政治への関心が低く、資料読解にも課題を抱える者が多いが、こうした単元間の運動性を持たせることで、「民衆とは何か」「民主主義とは何か」という普遍的なテーマを、自らの生活や現代社会の在り方と結びつけて思考させることをめざした。

### 3 本時の指導案について

#### 第6章 二度の世界大戦と日本 第2節 大正デモクラシーの時代

##### 参画—デモクラシーとは何か

##### (1) 本時の目標

- ・ 当時の人々がデモクラシーの実現のため、さまざまな模索をしていたことに気づく。
- ・ 人々や社会の動きを通して、民主主義について考える。

##### (2) 本時の評価規準

- ・ 歴史的事象から現代社会とのつながりを見つけようとしている。

	発問 (◎○・)	資料	生徒から引き出したい知識
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人々の声が世の中に反映されていく時代を見てきた。この時代のことを何という？</li> <li>・ 大正デモクラシーの時代は長く続いたっけ？</li> <li>・ 大正時代の民主主義は長く続かなかった。現代の◎日本の民主主義は大丈夫？</li> </ul>	アメリカの例/日本の例	大正デモクラシー  大正デモクラシーの時代は短かった
展 開 I	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大正デモクラシーを進めた人々はどうなったの？</li> <li>・ 社会運動をしている人々は、どんな選択肢を取らざるを得なかったのかな？</li> <li>・ なぜこんな選択肢に絞られたのかな？</li> <li>・ 大正時代の人々の民主主義に対する行動はどうか？</li> <li>・ 民主主義に対する熱量や、政治への意識はどうだったといえるかな？単元マップを見返そう。</li> <li>・ 現代はどうか？民主主義の国はようになっていたっけ？</li> </ul>	市川房枝自伝  治安維持法と普通選挙法  民主主義指数の評価基準 第1回大選の投票率 民主主義国家の数の変化	戦争に反対して逮捕されるか、退却するか、現状を肯定してある程度協力するか 普通選挙法で一応意見を出す正当な道はできたけど、治安維持法で政府から外れる動きは制限されてしまったから あらゆる立場の人々が権利を主張した (生徒の考え) 民本主義が世界的な革命や民主化の風潮で広まった/そこまで民主主義への信頼はなかった 減少している
展 開 II	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大正デモクラシーの時代と現代を比べてみよう。</li> <li>・ 政府や選挙の仕組みは…？</li> <li>・ 人々の自由度は…？</li> <li>・ 民主主義に対する人々の行動は…？</li> <li>・ 民主主義に対する熱量や、政治への意識は…？</li> </ul>	民主主義指数の評価基準	(生徒の考え) 現代のほうが選挙権は広い 憲法で自由が保障されている/国民主権 いろいろな政治参加の方法がある/投票率は低い 政治に興味がない人が多い/民主主義が減ってきている
終 結	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎大正デモクラシー、戦争の時代を歩んだ市川房枝さんに「現代の民主主義について」伝える手紙を書いてみよう。</li> <li>・ 日本の民主主義について大丈夫かどうか、その理由を含めて自分の考えを入れよう。</li> <li>・ 実は市川房枝、戦後も長生きして、念願の議員になる。87歳のころにはトップ当選を果たす。</li> <li>◎改めて、現代と比べた大正時代がどんな時代だったのか、自分なりにまとめよう。</li> </ul>	単元マップ	(例) 大正時代に比べて憲法で人権尊重が定められている。/大正時代に比べて世界的な民主主義の流れが退潮傾向にある。  (例) 政府が民衆を気にせざるを得なくなった時代である。

# 単元の学びマップ

名前 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番 \_\_\_\_\_

思考判断表現② 読に向かう読③

単元名 **大正デモクラシーの時代 72~76** 歴史

単元の問い **なぜ 民衆の声 が 世の中に反映 されるようになったの？**  
 ~日本の民主主義は大丈夫？~

<p>単元の問い(予想) <b>民主主義とは…</b>                  みんなのことをみんなで決めること</p>	<p>予想 <b>これまで学んだこと</b>                  第一次世界大戦                  ○総力戦…国民と工業生産力の動員が勝敗分ける                  →社会運動が活発に(国民の権利主張・ロシア革命)                  ○ベルサイユ条約…帝国主義⇔民族自決の矛盾                  ○日本の参戦…大陸進出⇔欧米との対立</p>
<p>人々の力がつきた/政府が変わった                  大丈夫だと思う</p>	<p>人々が不満を持った                  日本も危ういのでは</p>

**72** なぜ人々は声を上げられるようになったの？

工業化によって都市部へ集中した人々が、苦しい生活をしてきた。そこに重税を課す政府に対して、不満が爆発し、人々の運動が盛り上がることで内閣が退陣した。

単元の問いを答えるためのヒント  
 次回学が必要があること・疑問・気づき  
 産業構造の変化→政府はどう対応し都市に人口が集中したの？  
 →大衆化

思 S - A - B 態 S - A - B

**73** なぜ政府は政党内閣を誕生させたの？

人々の動きが新聞報道によって全国的に広まった。その沈静化に軍隊が用いられるほど苦慮した政府は、国民の意見を反映できる政党内閣を成立させることで、人々の動きを抑えた。

単元の問いを答えるためのヒント  
 次回学が必要があること・疑問・気づき  
 米騒動→政党内閣の成立→国民の動きを抑える  
 全部人々のいう通りにするの？

知 S - A - B 態 S - A - B

**74** なぜ普通選挙法と治安維持法を成立させたの？

人々の動きは世界的な動きにも影響されて、様々な立場にまで広まった。政府はこのような動きを統合するために二つの法律をほぼ同時に成立させた。

単元の問いを答えるためのヒント  
 次回学が必要があること・疑問・気づき

知 S - A - B 態 S - A - B

**75** 単元の問い 答え **人々の声が反映されるようになったのは、大衆化した人々が国民として目覚めた** (から)である。なぜなら、都市化による人口集中で大衆文化やメディアも発達し、人々が大衆として行動するようになった。世界的な民主化の風潮も相まって、人々はさまざまな分野で「勢力」と化し、政府に及んでも国民の支持なしには存在し得ないようになっていった。

**75** なぜ大正デモクラシーは長続きしなかったの？

明治憲法下において民意の反映には限界があり、発展途上の政党政治は定着することができないなど、民主主義も未成熟であったため。

単元の問いを答えるためのヒント  
 これから学が必要があること・疑問・気づき

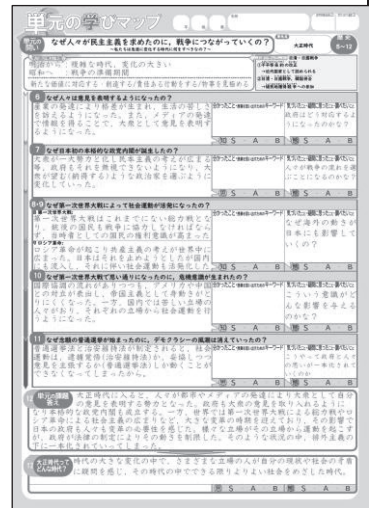
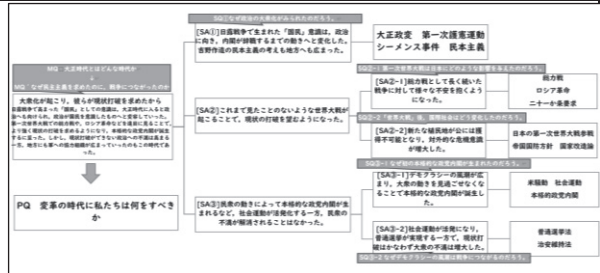
知 S - A - B 態 S - A - B

**76** 大正時代ってどんな時代？ **大正(デモクラシーの)時代とは(例)政府が民衆を気にせざるを得なくなった時代である。なぜなら、都市化とメディアの発達で民衆の動きが全国的に広まるようになり、多様な意見が生まれた。普通選挙法と治安維持法の同時制定も、政府が常に民衆の動きの対応に追われた結果である。**

思 S - A - B 態 S - A - B

#### 4 研究の推移

年月日	内容
令和6年 7月5日	第1回大阪市歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第1案を作成
7月24日	第2回大阪市歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第2案を作成
8月5日	第3回大阪市歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第4案を作成 各委員で資料を収集
8月23日	第4回大阪市歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第5案を作成 ・ワークシート、授業資料等を提示
8月30日	第5回大阪市歴史分野部会 ・指導案の作成 ・資料の再作成
9月12日	第6回大阪市歴史分野部会 ・指導案の確認 ・体裁の統一
10月9日	大阪市中学校社会科研究大会 ・単元「大正デモクラシーの時代」紙上发表
令和7年 1月5日	知識と問いの構造図第6案を作成 ・PQを「なぜ大正デモクラシーの時代が長続きしなかったの？」に変更
令和7年 1月17日	第15回全中社歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第7案を作成…PQ'に「日本の民主主義は大丈夫？」を追加 ・単元を「大正デモクラシーの時代」とし、「第一次世界大戦と日本」と切り離す ・問いと資料と答えの一覧表（各時の指導案のもととなるもの）を作成
1月21日	部会を経てあがった意見を反映し、知識と問いの構造図を修正
2月27日	第19回全中社歴史分野部会 ・知識と問いの構造図第8案を作成、対応した指導案を作成 ・大阪市立春日日出中学校 神近篤志教諭によるプレ授業 ・知識と問いと答えの一覧表をもとに実践を行い、生徒の答えについて実践結果を残す
3月18日	第20回全中社歴史分野部会 ・筆者によるプレ授業（当日発表の一つ上の学年で行う・第2次） ・第2次「民本主義を米騒動」について、ジグソー法を用いた授業からグループ学習に変更 ・ワークシートに書き込むものと書き込まないものを整理 ・PQについて再検討
6月17日	第21回全中社歴史分野部会 ・学習指導案の作成 ・各時の指導案の作成
7月9日	第23回全中社歴史分野部会 ・大阪市立大桐中学校 小谷彩花教諭によるプレ授業（第3次） ・第3次の修正 ・第4次の修正（市川房枝へのインタビュー形式に変更）



年月日	内容
8月30日	学習指導案の完成
9月19日	第28回分野部会 ・大阪市立三稜中学校 京田将典教諭によるプレ授業（第5次） ・第5次の資料の提示方法などを変更
11月12日	筆者によるプレ授業 ・別クラスで当日公開予定の第5次の授業 ・当日公開クラスで第4次の授業

## 5 当日の公開授業について

当日は「市川房枝に『現代の民主主義について』を伝える手紙を書こう」という学習課題を軸に授業を展開した。まず大正時代の民主主義を支えた仕組みや、当時の人々の行動・意識を振り返ったうえで、現代の状況との比較を行った。その比較を土台として、生徒たちが市川房枝に対して民主主義の現状や自身の意見を伝える手紙を作成した。生徒の記述からは、多様な視点による考察が見て取れた。ある生徒は、「大正時代に比べて現代の人々は生活に余裕のある人も多いので、今の状態を急激に変えようという考えは生まれにくい」と述べ、当時と現代の社会状況を対比した上で、現代の民主主義の安定性を判断していた。その一方で、「選挙権があっても投票にあまり行かないし、政治家が国民の意見を無視しているように感じる。独裁政治に近づいているのではないか?」「男女ともに政治参加できる権利があるのにそれを行使しない現状では、民主主義はいらないという考えになっていくかもしれない」と、現代の民主主義に対して危機感を表明する意見も多く見られた。授業の終末では、単元の総括として「大正デモクラシーの時代とはどんな時代か?」と問い直したところ、生徒たちは独自の解釈を導き出した。「国民の政治意識が高く熱がある時代」「民衆が自分たちの尊厳を唱えた時代」と本質を突いた表現や、現代との比較から「民主主義の化けの皮を被った何かの時代」と大正期のデモクラシーの限界を批判的に捉える記述もみられた。さらに、「日本が欧米に追い付いた時代」と、前単元の学習内容と関連づけて共通点を見出す生徒もおり、単元を貫く問いを通じて、自分なりの歴史像を構築できていたといえる。

## 6 研究協議の振り返り

公開授業後の研究協議では、ICTツールやテキストマイニングを活用し、参加者との双方向的な議論を試みた。協議の中で焦点となったのは、「歴史的分野における社会参画とは何か」という本質的な問いである。参加者からは、過去の事象と現代を往復させる本単元の構成に対し、「生徒が歴史を学ぶ意味を実感できる有効なアプローチである」との肯定的な評価を多くいただいた。一方で、探究を深めるための資料提示の精選や、公民的分野未履修の生徒に対する政治的仕組みの補足の在り方について、具体的かつ建設的な示唆も得られた。また、研究の核として開発してきた「1枚ポートフォリオ」による変容の見取りについても、多くの関心が寄せられた。生徒がどのような概念的知識を獲得したかを可視化する有効性が認められる一方で、全単元を通じた評価の継続性にはさらなる検討が必要であるとの課題も共有された。本協議を通じて得られた知見は、単に一つの授業の反省に留まらず、歴史学習を通じた主権者教育の可能性を広げるための貴重な一歩となった。



## 授業実践②「武士の政治の展開」

歴 史 的 分 野 授 業 者

柳江 智貴（高槻市立第六中学校）

### 1 はじめに

本単元に最初に向き合った時は、室町時代とは、幕府や将軍、戦乱など「武士中心の政治が展開された時代」というイメージを持っていた。しかし研究を進める中で、室町時代は、政治が機能しない中で、災害や飢饉、戦乱といった苦しい生活に直面していた庶民が、仲間と協力し、惣村という自治的な仕組みをつくり、自分たちの力で自分たちを守ろうとし、立ち向かった時代である、という考えを持つこととなった。歴史は自分の生活とは切り離された過去の出来事である、と認識している生徒が、室町時代の単元を学び、「現代でも同じようなことが起きているのではないか」「自分がもしその立場になったらどうすればいいのか」「立ち向かうためには何が必要なのか」、と考えるきっかけを作りたいと願い、この単元を選択した。また、奈良時代や鎌倉時代とは違い、室町時代に庶民を立ち向かわせた原因について学ぶことで、当時の人々の行動の背景や思いを感じ取る力を、より養うことができるのではないかと考えたことも、理由の一つである。

### 2 単元構想について

本単元は、室町時代の庶民が「惣村」という自治組織を通じて自らの生活を守り抜いた姿を学ぶものである。「惣村」を取り上げることで、「民衆は権力に従うだけではなかった」「自分たちの力で、自分たちの生活や権利を守ろうとしていた」という視点に気づくことで、歴史を「自分たちの社会の成り立ち」として捉える態度を養うことに期待をして、以下の構想とした。

「なぜ室町時代には一揆が起こったのか」という問いを軸に、政治・生活・共同体の3側面から探究を進める。第1次では、内部分裂により「争いを止められない幕府」の機能不全を学び、庶民の不信感を捉える。第2次では、応仁の乱や気候変動による飢饉から、庶民が「生存の危機」に直面した状況を理解する。第3次では、技術発展による「時間の余裕」と、村全体で納税する「団結の仕組み」に着目させる。一連の学びを通じ、歴史を「自分たちの社会の成り立ち」として捉え、民衆の主体的な姿を再発見させる。最終的には現代のデモ活動等と比較し、「自分が社会に対して立ち向かうのはいつか」を再考する。

当初は社会に無関心だった生徒も、学びを経て「生活の危機があれば立ち向かう」と意識が変化した。一人では解決できない課題に対し、「情報の共有」や「共通の目的」を持って団結する重要性を導き出す。歴史的認識を現代の「参画の力」へと繋げ、よりよい社会を築こうとする態度を養う構想である。

### 3 単元の指導案について（参画）

#### 第3章 中世の日本 第2節 武士の政治の展開

##### 第1次—第4時 参画 立ち向かう時ってどんな時？

###### （1）本時の目標

- ・立ち向かう時とはどんな時か、そのために必要な要素を考え、表現できる。

###### （2）本時の評価規準

- ・自分が立ち向かう時や、そのために必要な要素を、この単元で得た学びを生かして考えることができている。【主体的に学習に取り組む態度】

	発問（◎○・）	資料	生徒から引き出したい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの3時間で、学んだことを思い出してみよう。</li> <li>・室町幕府はどんな状況だった？</li> <li>・庶民の生活は？</li> <li>・立ち向かうことができたのは？</li> </ul>	単元マップ	頼ることができない幕府 争いや災害、飢饉で危機的状況 時間的余裕があり、団結する仕組みができた
展開Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで学んできた内容を使って、単元の問いに対する自分の答えを作ろう。</li> <li>・ここからはもう一つの問いに対して考える時間。</li> <li>◎立ち向かう時ってどんな時？そのためには何が必要？</li> <li>○今までに学習してきた時代と、室町時代を項目ごとに比較して立ち向かうならこっちだ、と思った方に丸をしてみよう。</li> <li>・政治で比べると？</li> <li>・環境で比べると？</li> <li>・庶民の様子で比べると？</li> </ul>	単元マップ	頼ることができなくて、守ってくれなさそうなのは室町幕府 収穫量が減少している室町時代 奈良時代は逃げていて、室町時代は団結できる仕組みがあった
展開Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この写真、覚えているかな？</li> <li>○この人たちが、なぜこういった運動を起しているのか、また参加していない人（立ち向かっていない人）はなぜ立ち向かわないのかを考えてみよう。</li> <li>・立ち向かっている人にあるものは？</li> <li>・立ち向かっていない人になくはないものは？</li> </ul>	デモの様子	デモ 賃金を上げろという抗議 【生徒の考え】 （立ち向かう人） 生活の危機に直面していて、自分がこのままではまずいと思ったから参加している。同じ考えの人たちが集まれば、意見も通りやすい。 （立ち向かっていない人） 参加していない人は、そもそも困っていない。現状に満足している。情報も持っていない
終結	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参画の問いの答えを出す前に、2時間目に見たこのスライド、どれに手を挙げた人が一番多かったか、覚えている？</li> <li>・最初は立ち向かわないと考えていたのに、単元の学びを通して変わったよね。</li> <li>・じゃあみんながこれから立ち向かう時ってどんな時？そのためには何が必要？室町時代の単元の学びを生かして、参画の問いの答えを出してみよう。</li> </ul>		立ち向かうが一番多かった

# 単元の学びマップ

名前 \_\_\_\_\_ 学年 \_\_\_\_\_ 学期 \_\_\_\_\_

## 単元の問い

なぜ室町時代には、一揆が起こったのだろうか？ ～立ち向かう時ってどんな時？何が必要？～

単元名 武士の政治の展開 歴史 7-1～7-4

<p>訴えたいことがあったから 上の者を倒そうと思ったから</p>	<p>何か困ったことや大変なことが 起こった時。勇気がある。</p>	<p>武士の政権の成立 ○武士の政治の始まり ・武士の台頭、初めて政権を握る ・鎌倉幕府の誕生、全国の支配 ・元寇による主従関係の崩壊、政治の乱れ</p>
---------------------------------------	--	---

### 7-1 なぜ室町幕府は、争いを止めることができなかったの？

鎌倉幕府が滅亡し、室町幕府が誕生したが、幕府内部での派閥争いや、各地の守護大名の台頭により、地方の直接統治が難しくなったことで、幕府の持つ伝統的権力が分裂したから。

単元の問いを答えるためのヒント  
幕府の支配が機能せず、地方では守護大名が権力を持ち始めていた。

次回学ぶ必要があること・疑問・気づき  
一揆をおこす必要性は？何が人々をそんなに？

知 S - A - B

態 S - A - B

### 7-2 なぜ庶民は立ち向かおうと思ったの？

政治が機能せず、応仁の乱の時には足軽による略奪が起こるなど、社会は不安定だったから。また、気候変動で農業生産が減少するなど、生活の危機を迎えていたから。

単元の問いを答えるためのヒント  
社会が不安定で、おまじけに気候の影響で生活も厳しくなっていた。

次回学ぶ必要があること・疑問・気づき  
危機的な状況を迎えていたから起こした以外にも、何かあるのか？

知 S - A - B

態 S - A - B

### 7-3 なぜ庶民はみんなで立ち向かうことができたの？

技術の発展により、庶民の生活には生産や時間の余裕が生まれていた。その中で、村のみんなで取り組む仕組みや全員で守るルールなどを作り、自分たちで自分たちを守る意識が生まれたから。

単元の問いを答えるためのヒント  
時間の余裕ができ、村の仕組みを整え、意識を生み出すことができた。

これから学ぶ必要があること・疑問・気づき  
政治も社会も不安定がないけど、これからどうなっていくのか？

知 S - A - B

態 S - A - B

## 7-4 単元の問い 答え

室町時代に一揆が起こったのは、  
不安定な社会の中で、庶民が力をつけて成長したから である。

そう思った理由は、  
幕府が持っていた伝統的権力が、守護大名の地方支配などで分裂し、戦乱や飢饉、災害の影響で社会が不安定になる中、庶民は新技術の導入や新しい作物の生産ができるなど時間や生産に余裕が生まれ、その中で自分たちで作った決まりや仕組みをつくり、協力や団結するようになったから。

## 7-4 室町時代って？

室町時代を一言でいうと、  
不安定な社会の中で、庶民が力をつけ成長した 時代である。

そう思った理由は、  
幕府は何から手を付けたらよいか分からなくなるくらい、様々な対応に追われ、戦乱や飢饉の影響で庶民の生活は最悪の状況を迎えていたが、その中で庶民は自分たちで運営する組織をつくり、集団で団結して状況を変えようと、一揆を起こすまで成長していったから。

#### 4 研究の推移

年月日	内 容
令和6年 10月16日	高槻市内の研究員を中心とした歴史分野会① 【初期仮設の策定】 幕府が守り切れないため民衆が自治を始めたという仮説や、足利義満時代の安定が民衆の力を蓄えさせた可能性などについて検討を行った。
11月13日	高槻市内の研究員を中心とした歴史分野会② 【概念の整理】 室町時代を「庶民が団結した時代」と定義。生産性の向上（二毛作など）や、気候変動（小氷河期）が社会に与えた影響を考察。
11月17日	各研究員で集めた資料や文献などの共有
令和7年 1月24日	高槻市内の研究員を中心とした歴史分野会③ 室町時代は、権力が末端まで分裂した時代である。伝統的な権力体制が崩れたことで、末端の庶民が自治を行うように変化していったのではないかと、という新しい仮説が生まれた。その仮説の検証のためには、 どんな情報が必要かについて議論を重ねた。
令和7年 2月6日	高槻市立如是中学校 澤山純一教諭によるプレ授業（第3次） 授業内容、資料の質と量、課題設定、授業時間配分、今後の授業改善について議論を行った。 「争い」の定義や、幕府と朝廷が同時に成立していることへの理解不足が見られた。 資料が多すぎて、読み取ることだけで精一杯になっていた。 課題の見直し、検討が必要である。などの意見が出た。
7月1日	高槻市立第六中学校 筆者によるプレ授業（第1次） 授業者主体の時間が多くなり、生徒の活動や思考する時間が短くなってしまっている。 導入部分から説明が多く、生徒が問いを自分ごとにてできているか。 などの意見が出た。時間配分、展開など大幅な修正を行った。
7月8日	授業撮影①（第1次） ①の振り返りと、②の最終調整
7月9日	授業撮影②（第2次） ②の振り返りと、③の最終調整
7月15日	授業撮影③（第3次） ③の振り返りと、④の最終調整
7月16日	授業撮影④（第4次）
8月～11月	撮影データ約180分を、インタビュー含め約40分にまとめるために協議を重ねた。

## 5 単元を通じた授業撮影について

全4時間で構成された単元の授業について、以下に各時間の記録をまとめた。

### (1) 幕府への不信と社会の混乱 (第1時)

当初、生徒たちは室町幕府が争いを止められなかった理由を「力がなかったから」と予想していた。しかし、資料から「天皇が二人いる異常事態」や「内部分裂」を読み解くことで、「幕府は政治も争いも気かけねばならず、どこから手を付ければよいか分からない状態だった」という具体的な政治的不全を指摘するようになった。

### (2) 庶民が立ち上がった背景 (第2・3時)

生活の困窮について学んだ生徒たちは、一揆の動機を「応仁の乱や気候変動で生活がより苦しくなり、耐えることができなくなったから」と分析した。さらに、惣村の自治に焦点を当てると、単なる暴動ではなく、「二毛作などの技術革新により生活の余裕と時間が生まれたこと」や、「自分たちで決まりを作り、税を協力して納めることで団結力が強まった」という組織的な側面に着目した意見が多く出された。

### (3) 社会参画への意識変容 (第4時)

学習前は「集団で立ち向かったことはない」「政治を気にしていない」と消極的だった生徒たちに、顕著な変化が現れた。現代のデモ活動と室町時代を比較する中で、「生活の危機に直面し、このままではまずいと思った時に立ち向かうべきだ」、「同じ考えの人が集まれば、意見も通りやすくなる」といった、社会の一員としての主体的な意見が導き出された。

以上のように、生徒たちは「室町時代＝戦乱の時代」という従来のイメージを超え、「苦しい生活の中で仲間と協力し、自分たちを守ろうとした時代」と歴史を再定義し、その学びを現代の自分の行動へとつなげることができた。

## 6 研究協議の振り返り

研究協議においては、「一揆とデモの関連が興味深かった」といった参画の問いに関する意見や、「ビデオで見た授業はとても協働的(共同)な学びが活発で、生徒同士が資料等から根拠を持って説明していたのが研究テーマ合っていてよかった」「各時間の問いが、生徒の学習段階に合っていた」といった単元の授業全体に関する意見が見られた。全4時間の単元計画が、生徒の思考に無理なく展開できたと感じている。

また、授業を終えたばかりの生徒にインタビューを行ったシーンからは、「小学校の社会科が暗記ばかりだったので嫌いだった、という女子生徒が、授業を受けて変容していた様子が特に印象的だった」という感想もあり、今回の実践を通して、社会科の学習に対する生徒の変容が見られたことを、改めて実感することができた。



## 歴史的分野指導助言

峯 明秀（大阪教育大学）

「一人ひとりの未来につながる社会科の創造」「問い・探究、そして参画へ」というテーマを掲げ、本日、歴史的分野の「なぜ歴史を学ぶのか」というタイトルで分野の提案がなされた。そして参画の問いを設定した単元の開発を通しての今日の歴史的分野の発表だった。

授業の様子について、「日本の民主主義は大丈夫？」という問いで、「えっ」と思うような授業の展開であった。今日はWi-Fiの調子がよくなかったが、アプリのポジショニングを使いながら意見の分布をみるという新しい社会科の授業の中で、ICTを積極的に取り入れた授業の有様も今回の研究の提案の1つであった。これからの社会科でICT無くして授業はなかなか考えられない。そのなかで積極的にそれを導入してきた。と同時に、日々の指導における生徒への寄り添い方とか、単元1枚ポートフォリオで、毎時間考えたことを1時間1時間残して1つにまとめておいて、そして最後に単元全体を振り返るといった工夫がなされている。そういった、子どもたちへの寄り添い方であったり、1枚ポートフォリオも枠を引いているだけでなく、そこにリード文を入れ、つなげて書きやすいように配慮がなされたりしている。このクラスは今日までに何度も見に行ったが、「この子どもたちがこんなこと言うのか」と大変驚いた。先ほど授業者が「5000倍」という話をしてしたが、本当に「この子どもたち、こんなに頑張れるの？」のように、子どもたちへの感謝しかない。中学校のほんの3年で現代の社会をとらえながら、現代の政治に対して意見が言える、本当に素晴らしいなと思った。

本質的な単元を貫く問いとか、どこの研究会でも言われているが、本当にそういうことができるのか。社会科の中における本質的な問いとは何だろうかというところ、民主主義が1つの価値であるとしたら、「民主主義、それでいいのか？」というのも今また論争として起きてきている。ただ、じゃあ民主主義ってそもそも何なのかとか、あるいは社会科の中で平和の授業を歴史でもやるし、地理でもやるし、公民でもやるけれど、本当に今起きている問題に対して、子どもたちが一体どういう姿になっていたらいいのか。社会科教員は平和を語るが、私たちは何をやってきたのかも問われている。教師自身がどこに重きを置いて授業をつくっているのかということが問われていると思う。柳江先生の授業の中でも、子どもたちへのそれぞれの状況を確認しながら、状況に埋め込まれた学習、子どもたちは子どもたち同士の発言の中から学びあっている。そこにいるだけで実は学んでいるというのが正統的周辺参加ということ。先生方の先ほどの（研究協議は）、まさに学びあいの姿の中で、今日参加したことによって、得たものがたくさんある。その右側のほうですが、研究協議で出された意見です。おそらくこういう意見が出るだろうと思っていました。「歴史的分野の授業で政治参加などの知識が十分でない場合、政治参加についての価値判断や意思決定をすることが適切なのだろうか」とか、「当時の時代状況と今の時代状況が異なる中で、安易な現代との結びつきにより誤った歴史認識が子どもの中で定着するのではないか」、「入試にも対応するため最低限の基礎的な知識が必要だ」まさに、今、歴史というか、中学校社会科に突き付けられている課題を見事に表した問いかなと思う。ただ、そもそも、学校の授業が楽しいのだろうか、子どもたちは歴史の授業を楽しんで受けているのだろうか。あるいは社会科を楽しんでいるのだろうか。先生自身は授業を楽しんでいるのだろうか。入試のために授業をやっているのだろうか。もちろん入試は大事だが、ただ、歴史は歴史としてどういうふうに扱うのがいいのか。

前の大阪の近畿大会では、歴史エンパシーに関する提案がなされた。歴史エンパシーというと、原田智仁先生が「もう一つの歴史の見方・考え方としてのエンパシー」って発表されたが、先ほど寺井先生がシンパシーを使っていたが、エンパシーは同情ということではない。同情とか哀れみとか感情移入ではなく、もっと先のものである。ただし、エンパシーを感じるためには、過去への深い理解が必要だから、その過去の歴史資料というのが、「なぜ当時の人がそんなことをやったんだろう、そういう行動を起こしたんだろうか」など当時の文脈に立たないと、当時の様子がよくわからないとそれは理解できない。歴史的エンパシーを感じるためには、異なる時代や文化を生きた人々に共感することの難しさがあるが、だけどその当時の文脈をより詳しく深く知ることが歴史エンパシーを感じる一歩である。

ただ、最近の歴史学の中にはもう一つ、歴史のレリバンスということが言われている。これは「過去の歴史が現代にどのような関連性、重要性を持つか」ということである。今日の提案の中で、最初に「歴史を学んで、先生、何になるの？」と問われたときにどう答えますかということ、分野の部長が話していた。先生方だったらどういうふうに答えるか。それは「入試に出るから過去のことはちゃんと覚えておけ」、「将来役に立つから」、「二度と同じ間違いを繰り返さないために歴史を学んでおけ」、という風に言うだろうか。この令和5年8月（の資料）というのは全体の研究部にひろめるために教育センターに集まって話した内容で、「テーマに込められた意味を大切にしてください」という話をした。それぞれのテーマを掲げた時に、それは何を意味するのか、ものすごく大事なんだと話した。

2つめの話題としては、社会科授業づくりの基本という話で、歴史に着目して、「それぞれの先生方の歴史の授業観、暗黙の授業観を可視化してください」とワークショップを行った。そして最後に、「研究するということはどういうことなのか」ということを2年とちょっと前に話をした。そのたびに研究方法や研究倫理やエビデンスの話をした。そのため、この大会の直前まで情報開示をどこまでして、そして個人情報はどういう形で保護するのかという話が出て、研究部の先生方が非常に悩んでいた。ただ、授業ではやはり個人名が出てきたり、ワークシートを單元の中でどう使ってきたのか見ないことには授業そのものを語れないので、この研究会に参加した先生方はもちろん教育実践経験しているわけだから、そこを信じて開示すればいいじゃないかということも言った。

大阪大会に期待するテーマはどう設定されたのかというと、「一人ひとり」という、これは大阪におけるというダイバーシティ大阪の、前の大会の時からずっと受け継がれてきたテーマなのでとても大事にしないといけない。そこには「すべての子ども」という意味が込められている。ただし、それは未来につながらないとそもそも研究をやることに意味がないのではないかと、未来の市民を意識している。社会科という教科を義務教育段階で学んで、そこで学んだことが将来・未来の社会をつくっていく市民にどう反映されるのか。さらにもう1つ言えるのは、テーマとは単に掲げてあるだけではだめで、ここにはそこにつながるために、社会創造していくような、そういう子どもたちを育てていくためにどんな方法を使うのかということが必要になる。サブテーマには必ず方法がないとだめで、内容と方法と目標が出てのテーマなのである。同じように大阪でも話したときに、「問い」と「探究」という方法、そして、「そして参画」なのである。「問い」と「探究」で「参画」は並列ではない。「そして」、それは参画につながっていくという意味なのである。「単元を貫く問い」というのは当然出ているし、そこにおける資料や議論を通して探究が必要なのである。そこには社会科のまさに教科の特性の、資料とか議論を通して探究する。そして「社会参画力」というのは、そこには自分事としてとらえられないと社会に参加できないということなのである。

じゃあ、今社会科で語られている研究者の世界とは、いわゆる社会科の研究の今の潮流がどこにあるのかということをお阪の先生方全体に話をした。社会科をそれぞれの先生方が語るのだが、今、社会科を分析・類型化するとどう分けられるのかという話をした。そして更に、学習指導案は何のために書いていくのかということだが、昨日も出ていたが、それは再現性である。それを追試してやってみることができることが指導案の意味である。昨日は学習指導案を細案レベルでという話をしていた。ぜひ追試して実践してみる、やってみる、ダメだったらそこを変えてみればいいということ。でも、それを第三者が見たときに何をどう見取るのかということ、目標においてはどのような知識を成長させようとしているのかが見えるか、「グループでやります」、「ICTを使います」ではなくて、どんな内容で、どういうことが知識としてそこに組み込まれていて、どういうふうに学習者はそれを獲得するのかというのが出てこなければならないし、どんな資質や能力を育てようとしているのかということが、目標だけではなくて、指導案の構成の中から見えてくる必要がある。あるいは単元のカリキュラムを作っているのだとしたら、単元のカリキュラムの中からどういうふうな体験や問いが組み込まれて、結果としてどういう知識や技能や態度が身につくのかということが示されて初めて指導案といえる。そういう意味で言うと、どんな方法で、どんな情報や資料、調査や作業、体験が組み込まれているのかということを見るのだという話をした。

研究発表会の授業というのはライブである授業が多いのだが、それは授業の舞台しか見えない。そこで参観者がそれぞれ意見を言うが、それぞれの参観者はそれぞれの授業観によって、その人の授業観でその舞台の授業を見るわけだから、当然見え方は違ってくる。実は重要なのは提案されたその内容に対してどういうふうに授業が組織され、単元の構造化が図られ、毎時間毎時間の授業が組み立てられているのかということ。参観者はその中の一部を見に来るという形になっている。だから、今日の場合は1時間はライブで授業の舞台レベルを見、そして数時間からなる室町の授業は授業の構成を見て、それは本当にそうなるのかどうかを検証してほしいという願いがあった。分野の提案を見ると「問いと資料で迫る」、そして今日は「大正デモクラシー」と「武士の政治の展開」ということをそれぞれ主張の中で出されていた。あえて大正デモクラシーの単元の授業の最後のところをもってきて、参画のための問いをまさに出してきた。だから、今日の授業を見ると、おそらくどういう問いの構造になっていて、今日のところまで来たのかと疑問に思われるだろうし、「なぜ歴史を学ぶの」の問いの中から、「これ、歴史か？公民では」というふうに思われたらう。「歴史的事実をふまえられているのか？」「自分事としてとらえられている生徒がたくさんいるが、これは日ごろの積み重ねの大きさだな。」これは先生方の意見をひろったものである。ただ、もう一つ気を付けてほしいのは、子どもたちが日常で使用している生活言語と、そして教科書の、特に歴史なんて非常に難しい言葉が出てくるので、学習用語としての、教科学習で使用する言語は違うということ。だからそれをどういう形で理解させようかと苦悩し、工夫されているところも、実は今日の見どころであったと思う。今日の場合、単元の構造図自身をなかなかQRコードで見るとは大変だが、単元ポートフォリオを見れば、子どもたちがどういう風に学んで、この授業がどう構造化されているのかということが見えてくる。

先生自身も単元の構造図を書くときに、とても困っていたので、ChatGPTに聞いてみたらどうかというアドバイスもした。一人の授業者が色々調べてみても歴史のいろんな底の中になるバックボーンになるような知識を得るには限界がある。そうすると生成AIや最近のICTの技術を使うということは当然ありうる話だと思う。そうして大正デモクラシーの知識と問いの構造図というものを作って、授業研究のネットワークで、研究部の先生方がこれを共有し、ああでもない、こうでもな

いと意見を言う。こういう研究の在り方、研究のネットワークというのがまさにこの大会をきっかけとして広がっていった。これは素晴らしいことだと思う。授業者だけがやっている、一部の研究の分野部長や一部の人たちだけが研究のためにやっているのではなくて、これがそれぞれに還元されていった。そしてこの大会を機にあつという間に先生方が成長している姿を私は間近に見てきたと思っている。

先生方にも勉強してもらう必要があるので大阪教育大に来ていただき、研究部の先生に「歴史学ってどういうことなの？」という話をした。「解釈と認識で歴史の中の事実って何？」という話で、「正しい解釈」というのが歴史の中で、かつてはあった。私とかが大学の時とかはやはりマルクス主義の唯物史観とはこういうものだといわれた。解釈の枠組みが多様になり、1950年代、「正しい」認識は常に変化していくという潮流になり。それは史料批判をすれば正しい認識に至るというランケ以来の実証主義も、実はもしかしたら否定される。なぜかというアナル学派は歴史とは選択なのだ、その歴史学者の焦点の当て方によって、歴史家が明確な意図でもってそれを見ていくので、それぞれの歴史家の数だけ描かれている歴史が違ってくる。そういう意味ではリングスティック・ターンというのは1980年代に、言語論的転換の中で正しい認識は不可能だという議論が起きてきた。そうすると、その中で正しい認識にいたるとは何なのということが言われて。1970年代から始まって現代にきている歴史学のトレンドそのものについても話をした。そんな中で、これから研究するんだとしたら、学会レベルでいったいどんな話がなされているかというのを、自分たちで学んでくださいと。今、質的研究や量的研究があって、どういう方法でどういう風にデータを取っているか？という話をした。データのとり方、質的研究の特徴であり、あるいは観察ということも、ということが観察をするということなのかという話もし、フィールドノートをちゃんと丹念に付けることが大事だという話もした。そして逐語記録の中で、一体それを最終的にどういう風に解釈すればいいのかという、そもそもの研究方法、あるいは今どんな研究が求められているのかということの話、そして、それは先生の論なのか、それは別の人が考えた論なのか、どこに出ているのかなど出典先を明らかにしておかないと研究とは言えないと厳しく話をした。

今回の研究発表会は、2030年のOECDの2030のまさに潮流の中で学習指導要領が変わり、そして来年あたりは、学習指導要領が変わる。私は今2030の話を出したが、もうすでに10月には2040の話が出て、ティーチャーズ・コアの、いわゆる今度は先生方のウェルビーイングの話が出ている。教育の世界はそういうことを考えながら、一人一人のウェルビーイングをどういう風に大事にしていくなのかということ、研究部で話をしながら、そして行き着いてきているところは、社会的自己認識に帰ってきているんだなと思った。「自分が社会の中でどのような存在かを理解し、他者や社会との関係性を自覚すること」。もしかすると社会科とはこういうところにやっぱり落ち着くものなのかなというような気がしている。この後、教育実践で、だれの、何のための研究なのか、先ほどの中に歴史で出した問いは先生の問いだったの？学習者の問いだったの？という話が出ているが、そもそも研究自体が誰の何のための研究なのかということ問うて、そしていま私は、研究者という立場で紹介されたが、私は研究者というのか実践者というのか、先生方も実践者なのか研究者なのか、境界はあるけれど、先生方は間違いなく教育実践研究者である。だとしたら、その集まった今回を契機に、更に実践研究を続けて、知の共創をして頂けたら、大変有意義な会であった、となると思う。

以上で終わらせていただきます。本当にご苦勞様でした。

# 公民的分野



## 1 はじめに

今年、2025年、大阪・関西万博が開かれ、世界各国から多くの人々が大阪を訪れた。今から20年前、2005年は戦後初めて人口の自然現象が起きた年である。合計特殊出生率が過去最低1.26を記録し「出生率ショック」と呼ばれた。人口減少により、日本の経済が衰退する恐れが現実化し、少子化が国の大きな課題としてクローズアップされ、少子化対策が取られるようになった。しかし、2024年の合計特殊出生率は1.15であり、少子化対策が続けられているものの効果はあがっていない。出生率ショックから20年になる今年、経済問題と少子化問題を公開授業として発表した。

## 2 公民的分野としてのテーマ

大阪大会の研究テーマは「一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～」である。「問い続ける生徒」をめざしたい生徒像として設定したのは、基調提案にある通りである。授業を通して「問い続ける」ためには、生徒にとって切実性が感じられる問いが必要であり、また社会の一員としての実感が不可欠であると考えた。そこで、公民的分野では「問い続ける生徒」を「ライフステージを足掛かりに、自分事として問い続ける生徒」と再設定した。切実性をもって社会の一員として問いを考え続けるためには、自分がチェンジメーカーになることができると気づくことが原動力の1つになる。チェンジメーカーとしての自分に気づくことができるように授業研究を進めることになった。

チェンジメーカーの定義は多岐に渡っている。時には社会起業家を意味するときもある。今回の大阪大会では、中学生が実現できるチェンジメーカーとして「自分のいる場所でより良い変化を起こそうとする人」と定義した。自分のいる場所でより良い変化を起こすためには、ライフステージを足掛かりに自分事として問い続ける必要がある。また、本大会は社会参画力の育成をテーマに掲げている。「チェンジメーカー」として必要とされる資質である「主体性と当事者意識」や「協働性とコミュニケーション能力」「ローカルな行動力」など、これらの資質は本大会で提示した社会参加の3類型と親和性が高い。社会科教育においてチェンジメーカーを育てるためには、現代社会のリアルな課題に触れさせること、多角的な視点と批判的思考力の育成、行動と振り返りが必要である。このようなことを繰り返しながら、本大会においてチェンジメーカーとして定義した「自分のいる場所でより良い変化を起こそうとする」から「自分たちのいる場所でより良い変化を起こそうとする」に生徒の視座が高まることを期待した。

チェンジメーカーとしての自分を軸に単元構想した具体例として現代の民主政治の単元を挙げる。チェンジメーカーの定義である「自分のいる場所でより良い変化をおこそうとする」ためには、まずは生徒の実態から育てたい生徒像を考える必要がある。「政治に関心がない、生活に困窮している家庭が多い。」という真住中学校の実態があり、そのような生徒に対して、「生活が大変だからこそ政治参加に興味を持ってほしい」という私の思いから「粘り強く議論に参加しようとする」「安易に多数決に逃げない」というめざす生徒像を掲げた。民主主義を「私たちの問題を私たちが決めること」と定義したうえで、生徒の普段の生活から民主主義について考えられる単元を構想した。最終的に自分の

いる場所である学校でよりよい変化がおきるように、ベルマークで購入するものをどのように決定するのがよいのかということを取り上げ、参画の問いPQにした。

次に、授業の中の構成である。課題に対して切実性を感じられるように各授業の問いをまずは主観的に考察できるように工夫した。1時間の授業のなかで、予想をたてたうえで、資料を用いて班で対話しながら問いに取り組む。そして、授業の終わりに授業の問いであるSQを個人で考察する。個々の主観で予想を立てていたものが、対話を通じて個々の主観がつながっていき、資料を用いて考察をすすめることで、客観性をもった考察になり、最後個人で考えるときには「自分のいる場所」から「自分たちのいる場所」に視座が高まった状態で考えられるように構成している。

### 3 公開授業について

「消費」単元の公開授業ではお金がテーマである。自分が使ったお金が商品を手に入れるためだけではなく、そのお金がどうめぐっていくのかに想いを馳せながら、消費行動を振り返られる人になってほしいというねらいがある。「消費」は家庭科でも学習する内容である。「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせる家庭科による「消費」と「現代社会の見方・考え方」を働かせる社会科による「消費」の違いを意識した単元構想を行った。市場経済・自由主義経済をまず学習し、次に消費者や企業の責任について考察させた。これらの学習を基盤に消費行動の影響を共感させ、最後にお金がめぐることによって家計や企業だけでなく景気にも影響を与えることに気づかせる単元を構想した。「消費」単元のプレ授業では、「安いもの買うに決まってるやん。」「ついつい買いすぎるから自分の買い物は下手かなあ。」という生徒のつぶやきがみられた。第4次のプレ授業において資料を読み取る中で「買い物って悪い影響しかないやん」と消費の問題点について考えつつ、「エシカル消費をもっと実践してもらうにはどうすればよいのか」という問いに対して「他人事ではなく自分事として考える意識の高さ」という意見が出てきた。生徒の視野が広がり、視座が高まっている様子が見受けられた。社会参加の3類型として、この単元は「行動」にあたる。今までの消費行動を内省することで、社会参画の「行動」に気づき、これからの消費行動を考えるきっかけを与える単元としての位置づけである。

「少子化」単元の公開授業では、ループ図を用いて考察を深めた。大きな社会課題であっても、自分たちに何ができるのかを考えられる人になってほしいというねらいがある。本単元は終章で学習することを想定している。中学校で学んできた「現代社会の見方・考え方」を働かせる公民的分野から、高等学校で学ぶ「人間と社会の在り方についての見方・考え方」を働かせる公共への橋渡しとなる単元である。公民的分野の学習の始めに設定されている現代社会の中で少子高齢化をすでに学習している。地理的分野・歴史的分野そして公民的分野の国際社会までを学習したことをふまえて、現代社会の大きな課題である「少子化」に焦点をあてて多面的・多角的に考察できるように単元を構想した。「少子化」単元のプレ授業では、「少子化なんか俺らには何もでけへんわ」という生徒の言葉から授業が始まった。第7次②のプレ授業では、参画課題である「どうすれば人生の選択が自由にできる社会になるか？」の対し、「難しいなあ」と言いながら沈黙する場面があった。まずは自分の中でじっくりと考えをまとめている様子が見られた。「社会保障などの充実も必要だが、自分自身も知識を取り入れて選択肢を広げるために努力をしないとイケない」というまとめが見られた。社会参加の3類型としては「内省・自覚」にあたる。大きな社会問題である「少子化」の考察を通じて、私の在り方、私たちの在り方、社会の在り方を考察し、「幸福、正義、公正」の見方に気づくことをめざした単元である。

#### 4 年間指導計画について

公民的分野の100時間の配当のなか、探究する時間の確保も念頭に置いて計画を立てた。公民的分野の内容である「私たちと現代社会」「私たちと政治」「私たちと経済」「私たちと国際社会の諸課題」に分類し、内容ごとの概念を習得し理解が深まるようにそれぞれの単元を構想した。本大会の大きなテーマは参画であるが、すべての単元で参画の問いをいれるのではなく、内容や単元とのつながりを考えて参画の問いをどの単元で設定するのが良いのかについても検討した。今回提示している年間指導計画は、90時間である。実際の学校現場においてテストなど、授業をすすめる以外に時間を使うことが多い。はじめから授業計画だけで100時間かかる計画では実践することができない。今回提示している計画が実際に各学校で実践できるように90時間におさめた。

#### 5 研究協議について

公民的分野は大阪市立天王寺中学校を会場として本大会を開催した。大会当日も会場校である天王寺中学校では、在校生が通常の学校生活を送っていたこともあり、学校のタイムスケジュールと本大会のタイムスケジュールとの調整を行うことになった。その結果、午後からの予定に十分な時間を割くことが難しくなり、研究協議の時間も十分に設定することができなかった。そこで、たくさんの意見を参会者と共有するために、「Padlet」というシステムを導入した。分野別提案や公開授業、年間指導計画についてはそれぞれで意見を入力してもらい、研究協議では本大会の大きなテーマである「社会参画」について、各校での実践を集約することにした。実際の「Padlet」への投稿を確認すると、大会終了後にも投稿されており、限られた研究協議の時間の中では十分な時間を確保できなかったことが分かった。「Padlet」を導入したことで、大会に参加した後に感じたことも含めて共有できたのは大きいと感じる。参会者が「Padlet」にアクセスするとどのような意見が出て、それに対してどのような返答があったのかを一覧で見ることができるのも利点であると感じた。

#### 6 成果と課題

成果を2つ提示する。1つめは単元を通じてどのような生徒を育てたいのかを軸に単元を構想するようになったことである。社会参画力を育成するために、公民的分野としてチェンジメーカーを軸においたことで、育てたい生徒像がより明確になった。大阪がこれまで取り組んできた「いま・ここ」を大切に、目の前にいる生徒を前提に単元を構想し、授業づくりをすすめることができるようになったのは大きな成果であると考えている。

2つめは学校や分野をこえて協力できるプラットフォームが準備できたことである。本大会では公民的分野は大阪市、堺市、北河内、中河内、南河内、大阪教育大学とともに研究を行った。それぞれの教員が今回の研究を「自分事として問い続けながら」、TeamsやGoogle Classroom、Zoomなどオンラインを活用して検討するプラットフォームができた。これらのプラットフォームを活用して分野をこえた協力が広まったことも成果の1つである。

課題を2つあげる。1つめはチェンジメーカーの資質として必要である批判的思考力の育成が十分にできたとは言えないことである。単元を通して考察することで、自分自身は問い続ける姿勢を持つことができた。しかし、生徒が自分の意見や他者の意見を互いに検討できる十分な時間が授業内で取れず、主体的に批判的に考察できたとはい切るまでには至らなかった。

2つめは探究の時間を十分に取れなかったことである。批判的思考力の部分とも重なるが、ワークシートや1枚ポートフォリオに記入することに精一杯になり、ときには時間内で記入が終わらずに家

庭学習になることもあった。評価の方法もふまえ、考察する時間をどのように確保するのか、限られた授業時間のなかで何に重きを置くのか、資料の精選や単元の組み立ても含めて引き続き検討していく必要がある。本大会での提案をふまえて引き続き実践しながら、時間の確保や今回十分に検討しきれなかった評価についてはこれからの課題としたい。

#### 参考文献

仲 美由紀(2025)「第58回全国中学校社会科教育研究大会、第31回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会 公民的分野分野別提案」



## 公開授業について

### 大阪市「消費」単元

お金がテーマ

日常の消費行動を振り返ることができる人になってほしい

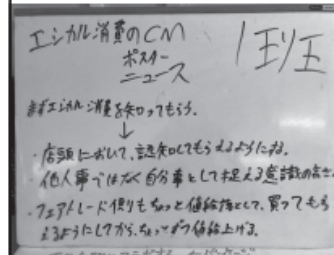
### 附属平野「少子化」単元

ループ図を使って探究を進める

大きな社会問題でも自分に何ができるか、社会がどうなるか、といったことを考えることができる人になってほしい

7

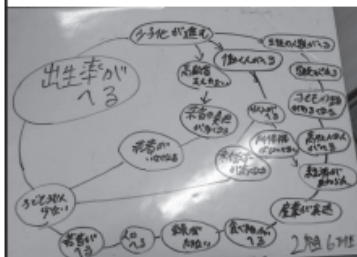
## 「どのような消費者をめざす？」



「安いもの買うに決まってるやん」  
「安全性ないもの買ったら危ないやろ」  
「ライフプラン？20代で働いて、家買って、30代でペットも買って・・・」  
「消費者トラブル、家庭科でやったで」

8

## 「なぜ、少子化が進むのか？」



「少子化なんか俺らには何もできへんわ」  
「結婚するの大変やな」  
「お金なかったら無理やん」  
「うちの家はな・・・」

9

## 年間指導計画

- ・探究の時間の確保  
参画の課題を設定する単元を検討
- ・公民的分野「100時間」  
実際は、テスト等があるので「90時間」で計画

10

## 成果と課題

いま・ここを大切に  
生徒が主役

### 成果

①それぞれの教員が授業づくりをするときに、該当する単元を通じてどのような生徒を育てたいのかを軸に単元を構想するようになったこと

②学校や分野を越えて協力できるプラットフォームが準備できたこと

教員が「自分事として  
問い続ける」

11

## 成果と課題

### 課題

①批判的思考力の育成が十分にできたとは言えないこと  
単元を通して自分自身は「問い続ける」ことはできたが、自分や他者の意見を批判的に考察するまでには至っていない

②探究の時間を十分に取れなかったこと  
資料の精選や授業・単元の組み立てにさらなる工夫が必要

12

## 公民的分野研究体制

- ① カリキュラム、研究協議検討チーム
- ② 公開授業大阪市チーム（「消費」）
- ③ 公開授業附属平野チーム（「少子化」）
- ④ 大会誌校正チーム
- ⑤ 大会ホームページチーム

## 研究の推移

年	月	内 容
令和5年	8月	メンバーの確認 社会参画力の定義、公民的分野としての方向性 手取義弘大阪教育大学教授による「主体的」をテーマにした社会科授業の可能性の提示 大会ホームページチームの確定
	9月	各授業実践の紹介 カリキュラムチーム、公開授業チームの確定
	10月	<b>大阪市中学校社会科研究大会紙上発表「企業と労働」</b>
	11月	<b>大阪教育大学附属平野中学校公開授業「少子化」和倉彰久</b> 公開授業の単元の決定、大阪市チームと附属平野チームの確定 大阪市チーム「経済」附属平野チーム「少子化」 カリキュラムチーム、単元の構成についての確認 生徒の思考の変遷を検討
	令和6年	2月
	5月	ライフステージを意識しながら問い続けることを軸にすることを確認 身近なところから社会とのつながりについて考える単元の構想を計画
	6月	カリキュラムチーム、政治分野の年間指導計画の検討 Google Classroomの活用についての検討
	7月	カリキュラムチーム、政治・現代社会・国際社会分野の年間指導計画の検討 参画の問いについての検討 大阪市チーム、公開授業を経済分野の「消費」単元と決定 単元を貫く答えとして「自立した消費者」とする
	8月	「ライフステージを足掛かりに問い続けることから社会につなげていく」を指針とする 社会参画について、手取教授から「社会の中で生きていく子ども」から「社会は変えていけると考える子ども」という視点を教示される 大阪市チーム、「消費」の単元構造図の作成 単元を貫く問いを「どのような消費者をめざす？」に決定

令和7年	9月 10月 11月 12月 1月	<p>各授業の指導案の作成、検討</p> <p>附属平野チーム、「少子化」単元の開発</p> <p>単元を貫く問いと「なぜ、少子化は進むのか？」に決定</p> <p>出産が結婚を前提としており、未婚化と晩婚化が少子化に大きな影響を与えていると確認</p> <p>「自分の人生の選択が自由にできる社会になるか」を軸に単元を構想</p> <p>単元構造図の作成</p> <p>大阪市チーム、「現代の民主政治」単元の開発</p> <p>単元を貫く問いを「私たちの問題を私たちが決めるってどういうこと？」に決定</p> <p>単元構造図の作成</p> <p>カリキュラムチーム、政治・現代社会・国際社会分野の検討</p> <p>公開授業分の年間指導計画の確認</p> <p>参画の問いをどの単元で設定するかを検討</p> <p>大阪市チーム、「現代の民主政治」各授業の指導案の作成、検討</p> <p>参画の問いの検討</p> <p>各授業のワークシート、スライド資料の検討</p> <p>各チームの進捗状況の確認・共有</p> <p>各地区の公開授業の案内</p> <p><b>大阪市立天王寺中学校「消費」授業実践 大島翔太</b></p> <p>附属平野チーム、単元構造図の検討</p> <p>少子化の要因を「個人」「家庭」「公助」「共助」に設定</p> <p><b>大阪市立大正中央中学校公開授業「現代の民主政治」新開遼</b></p> <p>大阪市中学校社会科研究大会公開授業「現代の民主政治」仲美由紀</p> <p>附属平野チーム、単元構造図の検討</p> <p>各授業の問いと資料の検討</p> <p>大阪市チーム、「消費」授業実践の共有</p> <p>消費行動の影響についての検討</p> <p>各授業の問いと資料の検討</p> <p><b>大阪教育大学附属平野中学校公開授業「少子化」堀口健太郎</b></p> <p><b>大阪市立長吉西中学校公開授業「消費」川村由美子</b></p> <p>カリキュラムチーム、経済分野の年間指導計画の検討</p> <p>大阪市チーム、各授業の問いと資料の検討</p> <p>参画の問いと授業についての検討</p> <p><b>堺市立金岡南中学校「消費」授業実践 水野佑耶</b></p> <p>附属平野チーム、少子化の要因を「結婚」「家事・仕事」「行政」「地域」に分類</p> <p>各授業の問いと資料の検討</p> <p>各チームの進捗状況の確認</p> <p>カリキュラムチーム、実践をふまえた年間指導計画の調整</p>
------	-------------------------------	---

	<p>2月</p> <p>3月</p> <p>4月</p> <p>5月</p> <p>6月</p> <p>7月</p>	<p><b>大阪市立大正中央中学校「消費」授業実践 新開遼</b>  大阪チーム、各授業の問いと資料の検討  ワークシート、スライド資料の検討  附属平野チーム、各授業の問いと資料の検討  ワークシート、スライド資料の検討</p> <p><b>大阪市立梅香中学校公開授業「消費」森下翔悟</b>  大阪授業チーム、消費行動と景気についての授業検討</p> <p><b>大阪市立長吉西中学校公開授業「少子化」川村由美子</b>  カリキュラムチーム、年間指導計画の校正作業  公開授業の単元の年間指導計画の見直し  総時間数の調整  附属平野チーム、各授業の問いと資料の検討  単元構成の検討  大阪チーム、各授業の指導案の検討  Jflecと授業資料の検討</p> <p>各チームの進捗状況の確認  社会参加の3種類の確認  求める生徒像「ライフステージを足掛かりに問い続ける生徒」  「チェンジメーカーとしての自分」生徒の視座を高める授業づくりを確認  分野別提案の検討</p> <p>分野別提案の検討</p> <p><b>堺市立鳳中学校公開授業「少子化」町田翔</b>  大阪チーム、各授業の指導案の検討</p> <p>カリキュラムチーム、年間指導計画の見直し  公開授業・研究協議の持ち方についての検討  各チームの進捗状況の確認  公開授業・研究協議の持ち方についての検討  大会冊子掲載の資料についての確認  大阪チーム、学習指導案・指導計画・単元構造図の検討、確認  附属平野チーム、第6～8次の授業構想  手取教授からループ図の提案  学習指導案・指導計画・単元構造図の検討、確認  手取教授から、チェンジメーカーの定義、チェンジメーカーとしての資質と学校教育の役割について指導を受ける</p> <p>各チームの進捗状況の確認  分野別提案の検討  公開授業の持ち方についての検討  大会冊子原稿の見直し  二次元コード掲載原稿についての確認  大阪チーム、各授業の指導案の検討</p>
--	---	--

		附属平野チーム、各授業の指導案の検討 各授業のワークシート、スライド資料の検討
8月		各チームの進捗状況の確認 大阪市チーム、各授業の指導案、資料の出典の確認 附属平野チーム、各授業の指導案の検討 各授業のワークシート、スライド資料の検討
9月		<b>大阪市立真住中学校公開授業「少子化」仲美由紀</b> <b>大阪市立大桐中学校公開授業「消費」小谷彩花</b> 附属平野チーム、公開授業の再検討 各授業の指導案の検討 大阪市チーム、公開授業の再検討 各授業の指導案の検討
10月		附属平野チーム、各授業の指導案、資料の出典の確認 二次元コード掲載資料の確認 <b>大阪府金融広報委員会公開授業「消費」仲美由紀</b> 大阪市チーム、公開授業で使用する資料の検討
11月		当日配布資料の検討 公開授業で使用する資料の最終確認 <b>大阪市立天王寺中学校「消費」大島翔太</b> 大阪市チーム、公開授業に向けての最終調整 <b>大阪教育大学附属平野中学校公開授業「少子化」和倉彰久</b> 附属平野チーム、公開授業に向けての最終調整

### 運営の推移

年	月	内 容
令和5年	8月	公民的分野の会場を大阪市立天王寺中学校に決定
令和6年	11月	大会二日目の実施要項の検討 必要物品、運営の役割、天王寺中学校で借りる場所や物品の検討
令和7年	1月	大会二日目の時程の検討 必要物品の検討
	4月	大会二日目の実施要項の検討、確認 公開授業の持ち方について、参会者にどうやって授業を見てもらうのか？ 研究協議の方法についての検討 大会二日目の役割と必要な人数 大会二日目の役割分担、チーフの確定
	6月	大会冊子校正チーム、本大会の校正ルールの確認 公開授業（大阪市・附属平野）、年間指導計画の役割分 担
	7月	公民的分野の校正作業ルールの流れの確認 大会冊子校正チーム、大会冊子掲載資料の校正

8月	分野別提案・公開授業の学習指導案・指導計画・単元構造図の校正 大会二日目の実施要項の確認 参会者と天王寺中学校の生徒の動線の確認 大会二日目参加の専門委員・協力員の確認 大会運営に必要な人数の最終確認 東武トップツアーズと受付業務の確認 大会参加者名簿、名札、当日配布資料の受け渡し等 天王寺中学校で借りる物品と購入する物品の検討 会場の確認 大会前日準備、大会二日目の役割分担の確定 各役割での打ち合わせ・検討 研究協議で使用する Padlet の検討 必要物品の購入
10月	協力員のよびかけ 大会冊子校正チーム、二次元コード掲載資料の校正、資料の出典の確認 各授業の指導案・ワークシート・1枚ポートフォリオ・資料の校正
11月	協力員の役割分担の決定 大会二日目の実施要項の最終確認 大会当日に使用する会場校の場所の確認 会場図の確認 専門委員・協力員合同の各役割での打ち合わせ 借りる物品と購入する物品の確認 天王寺中学校で保管している物品の場所・鍵の管理についての確認 大会前日準備の確認 会議不参加の協力員に大会前日準備・当日の動きや役割の説明 物品の購入
前日	附属平野中学校の生徒の送迎バスの発着場所の確認 午前の部の会場設営 当日配布資料の用意 附属平野中学校の控室と来賓の控室の準備 トイレ等の清掃 研究発表（佐賀県）のリハーサル 東武トップツアーズ、受付準備 Wifi 環境の確認
当日	大阪紹介の DVD 映像の確認 分野別提案のリハーサル 正門付近で安全確認（天王寺中学校の登校時間・昼食時間・大会終了時間） 参会者にスマートフォンの電源を切ってもらうように依頼 午前終了後、午後の部の会場設営

ホームページについては、会議終了後に更新



### 「消費」単元構想について

グローバル化が進展している現代では、新型コロナウイルス感染症や大阪・関西万博の開催など様々な要因が経済に大きな影響を与えている。また、SNSの発展により、個人の活動が社会に与える影響力を拡大させている。変化の激しい現代社会を生きる生徒にとって身近な経済活動から社会に与える影響を考察し、自分が社会とつながっていることに気づくことは大きな意義があると考えた。

今回の授業では、お金を軸とした「消費」単元を構想した。「お金の向こうに人がいる<sup>[1]</sup>」ということを理解し、生徒の視座を高めることを目的とした。従来、授業でお金を扱うときには、お金の役割である「交換の手段」「価値の尺度」「価値の保存」を基に指導することが多い。本単元では、自分事として生徒に考察させるために、お金を役割ではなく、お金の働きがもたらす効用について焦点をあてることにした。お金は単に欲しい財やサービスを手に入れるためだけではなく、「お金を流すことで労働が結びつき、ものが作り出され、そのものがもたらす効用が人々を幸せにする<sup>[1]</sup>」ものであると定義して、単元を構想した。

本校の生徒の多くは、比較的すぐに自分の欲しいものを手に入れることができる家庭環境で生活している。進路を考える時期に入り、生徒自身がお金について考える場面が増えてきた。そこで、生徒がお金で財やサービスを購入するときに、目の前の商品だけではなく、支払ったお金がどのように社会や将来に影響するのかについて考察してほしいと考えた。現代社会は人々が支え合うことで成立している。そのような社会において、お金がさまざまな場面で媒介となっていることを認識することが必要である。また、お金と個人、お金と社会、個人と社会の関係性を考察することにより、社会への関わり方を選択・判断しながら、「個人の幸せ」と「よりよい未来社会」の実現が可能であることを生徒に考えさせたい。学習を終えて、生徒が買い物をするときの消費行動の変化を期待したい。例えばフードロスの観点から、消費行動の1つである「てまえどり」の商品を買ってみるという意識が生まれて、日常生活の中で行動に移す生徒を期待している。

単元の内容としては、価格の決め方、消費生活、消費者の権利、消費者問題、消費行動による影響、景気などを学習事項として設定した。単元内容を通して、経済活動の意義や意味を身近な生活と結びつけて、消費者の行動が社会に与える影響力を理解させる。また、消費者としてどのように行動することが、よりよい社会やよりよい消費生活の実現に繋がるのかを構想した上で、行動に移すことができる生徒の育成をめざしたい。

また『ライフステージを足掛かりに、自分事として問い続ける』生徒をめざして、単元を構想した。単元を貫く問い（MQ）として「わたしはどのような消費者をめざす？」を設定し、日々の消費行動を省察しながら、消費行動がもつ意義や役割について多面的・多角的に考察できる単元構成を行った。本単元における「チェンジメーカーとしての自分」を、「自分の消費行動の影響を考えて行動に移すことができる生徒」として定義した。生徒が、お金を通じて社会とのつながりを実感し、よりよい社会の実現をめざして行動に移す意欲がもてる授業をめざす。

### 参考文献

[1] 田内学（2021）『お金の向こうに人がいる』ダイヤモンド社

## 本時の指導案について

### 第4章 私たちの暮らしと経済 第1節 消費生活

#### 第4次

##### (1) 本時の目標

- ・買い物が投票と言われる理由を多面的・多角的に考察し表現する。
- ・エシカル消費の普及について、主体的に考察し、表現する。

##### (2) 本時の評価規準

- ・買い物が投票と言われる理由を多面的・多角的に考察し表現している。【思考・判断・表現】
- ・エシカル消費の普及について、主体的に考察し、表現している。【主体的に学習に取り組む態度】

##### (3) 本時の展開

	発問(◎○・)	教授・学習活動	資料	生徒から引き出したい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・投票したことある？</li> <li>○投票って何？</li> <li>◎なぜ、「買い物」は投票と言われるのだろう？</li> <li>・この商品は何？</li> <li>・この商品を作った会社はどこでしょう？</li> <li>・消費者が商品を買うとどのような影響がある？</li> <li>・消費者が商品を購入すると会社はどうなる？消費者が商品を購入しない会社はどうなる？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T 発問する。</li> <li>S 答える。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S 答える。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S 予想する。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S 答える。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S 答える。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S 答える。</li> <li>T 発問する。</li> <li>S WS に記入。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ラルフ・ネーダーの紹介</li> <li>・買い物は投票 なんだの本の紹介</li> <li>・switch の写真</li> <li>・任天堂歴代の主なゲーム機販売台数</li> <li>・任天堂の業績推移</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会選挙</li> <li>・ゲームの投票等</li> <li>・選ぶこと</li> <li>・商品を選んで買うから</li> <li>・商品をつくった企業を応援するから</li> <li>・switch</li> <li>・任天堂</li> <li>・商品がたくさん売れるともうかる。</li> <li>・成長する 倒産する。</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>○[A] 買い物にはどのような力があるのだろうか？</li> <li>・フェアトレードの認証商品を購入したらどうなる？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T 発問する。</li> <li>S 資料を読み取り考え、WS に記入。</li> <li>T 適宜、補助発問(・)を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スライド資料 資 A①～③</li> <li>①フェアトレードの仕組み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フェアトレードの商品を買えば、生産者へのお金が増える。</li> </ul>

	<p>・あなたならどのグミを選ぶ？その理由は？</p> <p>・消費は将来どのようなことを引き起こす可能性がある？</p> <p>○[A] 買い物にはどのような力があるのだろうか？</p> <p>・エシカル消費って知ってる？</p> <p>・フェアトレードのチョコレートっていくらぐらいするの？</p> <p>・エシカル消費ってみんなはどれぐらい興味があるのだろうか？</p> <p>・興味がある人はどれぐらい実践してるの？</p> <p>○[B] エシカル消費に取り組む人々を増やすためにはどうしたらいい？</p> <p>◎なぜ、「買い物」は投票と言われるのだろうか？</p>	<p>T 適宜、補助発問(・)を行う。</p> <p>T 適宜、補助発問(・)を行う。</p> <p>T 発問する。 S 資料を読み取り考え、WSに記入。</p> <p>T 発問する。 S 答える。</p> <p>T 発問する。 S 答える。</p> <p>T 発問する。 S 答える。</p> <p>T 発問する。 S 答える。</p> <p>T 発問する。 S 資料を読み取り考え、WSに記入。 S 考えた意見を全体で共有する。</p> <p>T 発問する。 S 考えた意見を全体で共有する。</p>	<p>②3種類のグミの表</p> <p>③大量消費がそのまま続くことのイラスト</p> <p>・エシカル消費の図</p> <p>・フェアトレードのチョコレート</p> <p>・エシカル消費の興味の数合い</p> <p>・エシカル消費の実践の数合い</p> <p>・エシカル消費に取り組んでいない理由</p> <p>・エシカル消費の例</p>	<p>・A 安いから。 B 健康を考える。 C 環境を考える。</p> <p>・環境破壊につながる。</p> <p>・買い物をすることで、社会に良い影響も悪い影響も与える力がある。</p> <p>・知ってる。 ・聞いたことある。 ・500円ぐらい？</p> <p>・約45%。 ・約36%。</p> <p>・認証マークを大きくわかりやすくする。 ・SNSやポスターなどでもっとエシカル消費について知ってもらおう。 ・てまえどりなど買い方の仕方を考える。等</p> <p>・買う物を選ぶことで、会社や社会、環境に良い影響も悪い影響も与えることができるから。また、エシカル消費をすると生産者や地域を支えることができ、貢献につながるから。</p>
<p>終結</p>	<p>◎なぜ、「買い物」は投票と言われるのだろうか？自分の言葉でまとめよう。</p>	<p>T 指示する。 S 1枚ポートフォリオに答えを記入。</p>		

<b>単元 問い</b>	<b>わたしはどのような消費者をめざす？</b>	社会2公民 単元NO.1
------------------	--------------------------	--------------

あなたのお金の使い方はうまい？へた？ (自分の考え) うまい ・ へた ・ わからない	<b>理由</b> 例 うまい…欲しいものを買うために貯金をしている。 へた…全部すぐにお金を使ってしまう。 わからない…そもそもうまい、へたの基準がわからない
---	---

公民1 答え	①なぜ、同じ商品なのに価格が違うのだろう？ 例 市場経済において商品の価格は、社会情勢や商品の希少性等に関連した需要量と供給量のバランスによって決まるから。	<b>生徒の思考</b> 商品が安くなる時を知っていたらお得
公民2 答え	②賢いお金の使い方って何だろう？ 例 収支のバランスを考え、将来の選択の幅を増やすことができる使い方。	<b>生徒の思考</b> 収入と支出を明確にし、将来のための計画は大切
公民3 答え	③なぜ、消費者トラブルを放置してはいけないのだろう？ 例 消費者には消費者の権利が認められており、消費者トラブルに遭うと、自分の生活が不利益を被り権利が侵害されることになる。また自分だけでなく、将来の他の人の不利益を生むことにもつながるから。	<b>生徒の思考</b> トラブルに遭っても泣き寝入りせずに済みそう
公民4 答え	④なぜ、「買い物」は投票と言われるのだろう？ 例 買う物を選ぶことで、会社や社会、環境に良い影響も悪い影響も与えることができるから。また、エシカル消費をすると生産者や地域を支えることができ、貢献につながるから。	<b>生徒の思考</b> 買い物はお金を通じた社会への投票であり社会を変えられる
公民5 答え	⑤なぜ、お金は「天下の回りもの」ということわざがあるのだろう？ 例 消費者がものを購入したり、投資をしたりすることで社会にお金が循環し、さまざまな人やものをつなぐきっかけになるうえ、国内外の景気や人々の生活等にも影響を与えているから。	<b>生徒の思考</b> お金はさまざまなものを繋げ、人々の生活と社会に影響を与えている

**単元の問いに対する自分の答え**

**「自立（自分や他者、社会も幸せをめざすように判断することができる）した消費者」**

すなわち、財やサービスを購入するときに、情報を取捨選択し、収支のバランスを考え、被害を受けたときには法の下で適切な対応をとることができる。また、各自の消費行動が自分の生活だけでなく、現在および未来にわたって国内外の社会情勢や環境にまで影響を与えることを自覚して行動できる消費者。

<b>3年 組 番 名前</b>	<b>【総合評価（観点③）】</b> A B C 再
------------------	-------------------------------

## 研究の推移

令和6年11月 大阪市立長吉西中学校公開授業「消費」 授業者 川村 由美子

### [実践内容]

第4次の公開授業を実践した。エコマーク付きのノートとエコマーク無しの安価なノートのどちらを自分は購入するかを考えさせたあと、本時の問いである「私たちの消費行動はどのような影響を与えているのだろうか？」の答えを予想させた。消費者が買い物をすることで生まれる影響について、Aの資料から、会社の成長と原因別倒産状況、SNS上の商品の評価、消費者の意思と選択の資料を用いて班で考察させた。Bの資料からは各認証マークの意味やフェアトレード商品の国内市場規模と購入額の推移、エコマークの認定商品の推移、エシカル商品の消費量推移の資料を用いて班で考察させた。その後、私たちの消費行動はどのような影響を与えているのだろうか？の答えを個人で考察させ、全体に共有した。

### [検討内容]

Aの資料を生徒に考察させる際、消費者の意思と選択の資料（消費者の意思が企業の商品開発等に影響を与える）に関しての有無を検討。この資料は消費者が生み出す影響の要素ではなく答えになっていることから、消費者の意思と選択の資料を不要とし、他の資料をより工夫することとした。また、Bの資料からは消費者が生み出す影響として、社会を良くも悪くも大きく変革させる影響を与えていることに気づかせるにあたり、エシカル消費についての具体的な数値を示す資料の工夫と改善が必要となった。

令和7年 2月 大阪市立梅香中学校公開授業「消費」 授業者 森下 翔悟

### [実践内容]

第4次の公開授業を実践した。エコマーク付きのノートとエコマーク無しの安価なノートのどちらを自分は購入するかを考えさせたあと、中学生の自分ができる投票には何があるかを考えさせた。具体例として、学校生活における生徒会選挙等に気づかせたあと、買い物も投票と言われていることを紹介し、本時の問いである「なぜ買い物は投票と言われるのだろうか？」の答えを予想させた。SQ①「私たちの買い物は会社にどのような影響を与えているのだろうか？」という問いを立て、会社の営業利益の推移と株価の変動のグラフ、会社の原因別倒産状況の資料を提示し、班で考察させた。次に、SQ②「私たちの買い物は社会にどのような影響を与えているのだろうか？」について商品についている様々な認証マークの意味やエシカル商品の消費量推移、エシカル消費に取り組む理由についての資料を提示し班で考察させた。その後、「なぜ買い物は投票と言われるのだろうか？」の答えを個人で考察させ、全体に共有させた。

### [検討内容]

Aの資料探究の際は、各班の読み取りができていた。Bの資料探究の際、SQ②の「社会」という語句に生徒が戸惑いを感じており考察が進まなかった。また資料の読み取りが環境問題に視点が集まっていた。生徒の読み取りの内容から、各資料が環境の視点に偏りすぎていたことが分かった。そこで、消費が社会や地域に良くも悪くも影響を与える視点に気づくことができるような追加資料が必要となった。

令和7年 9月 大阪市立大桐中学校公開授業「消費」 授業者 小谷 彩花

### [実践内容]

第4次の公開授業を実践した。本時の問いである、なぜ「買い物は投票」と言われるのだろうか？の答えを予想させたあと、SQ①「私たちの買い物は会社にどのような影響を与えているのだろうか？」という問いを立て、会社の営業利益の推移と株価の変動のグラフ、会社の原因別倒産状況の資料を提示し、

班で考察させた。次に、SQ②「なぜ、今日応援消費が注目されているのだろうか？」という問いを立て、商品についている様々な認証マークの意味や消費行動が環境問題に与える影響、エシカル消費に関しての資料から班で考察させた。会社への影響や応援消費の注目から、消費行動が自分以外に与える影響を個人で考察させ、「なぜ買い物は投票と言われるのだろうか？」の答えを全体に共有させた。

#### [検討内容]

SQ①である「私たちの買い物は会社にどのような影響を与えているのだろうか？」の答えの要素となる資料について検討を行った。会社の成長に関して提示した株価の資料は生徒にとって、わかりづらそうだと感じたことから、株価ではなく、具体例な販売台数と売上げの資料等に変更することを検討した。SQ①、SQ②ともに消費が与えるメリットとデメリットを考えられるよう、資料を更に工夫する点が改善点となった。また、本時の問いである「買い物は投票」と言われる理由を考察させるなかで、投票を考えさせるのではなく、投票した先のことを考えさせることがねらいとなるように授業構成の内容を再度、検討することが必要となった。

令和7年10月 大阪府金融広報委員会公開授業「消費」 授業者 仲 美由紀

#### [実践内容]

第4次の公開授業を実践した。本時の問いである、なぜ「買い物は投票」と言われるのだろうか？の答えを予想させた。その後、買物が企業に与える影響をスライド資料を用いて一斉で考えてから、「買い物にはどのような力があるのだろうか？」という問いを立て、消費が及ぼす影響について資料を用いて班で考察させた。フェアトレードや商品の選択、環境問題に与える影響を示す資料を提示した。消費を多面的に捉えた上でエシカル消費を取り上げ、良いとわかっているエシカル消費だが実践できていない現実を示して、エシカル消費をすすめるためにはどうすればよいのかを班で考察し提案させた。最後に授業の問いである「なぜ買い物は投票と言われるのだろうか？」について個人で考察させた。

スライド資料で提示した消費の企業への影響については考察する時間を短縮したが、1枚ポートフォリオを確認すると企業の影響について言及することができていた。消費の影響については、現行のフェアトレードの資料ではお金の流れがわかりづらいようだった。消費によるマイナス面の影響を捉えることができるかを懸念していたが、プラス面を考えることの方が難しそうだった。エシカル消費については、提案が一面的にならないように、高額なフェアトレード商品を紹介し、「てまえどり」などの消費行動もエシカル消費につながることを示す資料を提示した。

#### [検討内容]

授業の問いである「なぜ、買い物は投票とよばれているのだろうか？」を考えるために、投票とは選ぶことであると確認してから問いに取り組みさせたが、買物と投票という普段は一緒に考えない言葉に戸惑っていた。政治分野で「現代の民主政治」をまた学習しておらず、投票の概念を理解していないことも影響したのではないかと考えた。フェアトレードの資料を工夫することと、エシカル消費の提案をするときの資料を検討し、もっと自分事として考えることができるように検討した。また、投票については公開授業までに「現代の民主政治」を終えることができるので、変更することなくこのままの流れでいくことになった。

## 公開授業について

導入では、生徒に買い物が投票と言われる理由を予想させたあと、買い物が企業に与える影響に関して、スライド資料を用いて一斉に考えさせた。その後、「買い物にはどのような力があるのだろうか?」という問いを立て、消費が及ぼす影響について資料を用いて、班で考察させた。その際、フェアトレードや商品の選択、環境問題に与える影響を示す資料を提示した。消費を多面的に捉えた上でエシカル消費を取り上げ、良いとわかっているエシカル消費だが実践できていない現実を示して、エシカル消費を増やすためにはどうすればよいのかを班で考察し提案させた。最後に授業の問いである「なぜ買い物は投票と言われるのだろうか?」について各班で考察させた。生徒から提示された答えは以下の通りである。

### SQ. なぜ、「買い物は投票」と言われるのだろうか?

#### 【生徒の予想】

- ・自分で選択しているから
- ・いろいろな商品がある中から買うものを選ぶから
- ・買われた商品は出している会社の利益となるから

### 問い①. 買い物にはどのような力があるのだろうか?

#### 【各班の答え】

- ・フェアトレードなどの認証商品を購入することで、生産者の生活を良くすることができ、生産を持続的にさせる事ができる。また、良くない商品の大量消費が続いていくとゴミの処理が追いつかなくなったり、海が汚染されたりして、自然環境に悪い影響を及ぼす。
- ・フェアトレードなどの仕組みを通して生産者にお金がわりやすくするメリットがあるが、買い物で大量消費が行われることで環境に悪影響を与えるデメリットもある。
- ・生産者に富をもたらす力がある。また、消費は環境にも影響をもたらすので買い物をする時点で環境に配慮しているものを買う必要がある。

### 問い②. エシカル消費を増やすにはどうしたらいい?

#### 【各班の答え】

- ・水筒を持ち歩くようにする
- ・認証ラベルを確認する
- ・必要なものを必要な分だけ買う
- ・すぐに消費する予定のものは手前から取る
- ・エシカル消費の認知度を上げるために、それに当たる商品のパッケージを工夫したり SNS で宣伝する。
- ・社会としてはエシカル消費に関するものやサービスの価格を下げる必要がある。私達はエシカル消費について理解し、自分たちで行動に移しながら他の人々に広めていくことが大切。

### SQ. なぜ、「買い物は投票」と言われるのだろうか?

#### 【各班の答え】

- ・自分が選んだ商品によって環境への影響が左右される点が、自分の意見によって実施されるものが変わる投票と同じだから。
- ・買い物のお金は票に値する。会社は政党にあたる。なぜなら消費者がお金を払う（投票する）ことで会社を成長させることができるから。
- ・人々の購買行動によってサービスや環境を改善していくなどの影響を与え、世界の環境や製品の方向性などを変えていくから。
- ・消費者がお金を出して商品を購入することはその会社や生産者を支持するという意思表示になるから。

#### [考察]

第4次の公開授業において、なぜ「買い物は投票」と言われるのだろうか?の問いに対しては、授業のねらいとしていた「買う物を選ぶことで、会社や社会、環境に良い影響も悪い影響も与えることができ

るから。また、エシカル消費をすると生産者や地域を支えることができ、貢献につながるから」の内容を生徒から導き出すことができた実感している。そして、自分の買い物が社会に変化をもたらす可能性があることに気づいた生徒も多いと強く感じられる結果となった。また、単元を通じて生徒に考察させるなかで、「自立した消費者」＝「自らの消費行動が現在および未来に影響を与えることを自覚している消費者」をゴールと設定した。消費単元を通じて、生徒が出した答えのなかには「自分軸以外に視野を広げ、今よりも自分も社会もより良くしたい」という答えを書いた生徒も多くいたと認識している。

#### 【生徒の答え】

単元の問いに対する自分の答え

自分の収入と支出に合わせて、計画的にお金を使う消費者。特に、お金が社会をどのようにつなげ、循環しているのかも理解することが大切。このことで自分がエシカル消費などの買い物の選択をするときに、社会や環境にどのような影響を与えているかを考えることができる。

#### 【授業後の生徒の変容】

消費単元の導入と終末には買い物をする時の基準を生徒に考えさせた。また、消費の授業を通じて6つの項目から、1番自分の考えが変化した部分はどこかを考えさせた。結果は以下の通りである。

#### 【考えが1番変化した項目】

1位 認証ラベル（83人）      2位 安全性（33人）      3位 価格（25人）  
4位 品質（21人）      5位 SNS映え（4人）      6位 流行（3人）

#### 【考えが変化した理由（生徒の意見）】

##### 【認証ラベル】

- ・認証ラベルからエシカル商品を選んで買う、そうすることで環境問題に変化が起きたり、負荷が少ない素材や生産者の利益を守ることができるため、考えが変化しました。
- ・エシカル消費などを思い出して、必要な分だけを買うなどといった、よりよい買い物の仕方ができると思ったから。
- ・今日、商品においても持続可能性を問われるようになってきている。消費によって発生する影響をうまく利用し、社会課題の解決に向けて努める義務が消費者にはあると思う。
- ・生産の課程で行われている様々な取り組みを知ることによって、社会や環境に良い影響を与えられるとわかったから。
- ・授業を通じて、エシカル商品は少し価格が高いけど、環境の負荷を減らしたり、人権保護をする目的もある等の理由も知り買おうと思ったからです。

##### 【安全性】

- ・消費者の権利として、安全であることは重要だと再認識したから。
- ・消費者トラブルを防ぐために安全性を重視した方がいいと思ったからです。
- ・安い値段で買えることは良いことだが、少し値段が高くて安全で長く使用できるなら、買い直しをしなくていいので結果的にはあまり変わらないと考えました。

##### 【考察】

考えが大きく変化したものとして、認証ラベルと安全性が多く選ばれた。理由には、消費行動の影響や社会とのつながりにふれることが記載されている。消費の単元を通じて生徒が「チェンジメーカー」としての自分を意識して、視座を高めることができたのではないかと強く感じている。消費行動が社会に与える影響を認識した上で、生徒がこれから買い物をする際の行動に現れることを期待したい。

## 研究協議のふりかえり (Padlet より抜粋)

Q①A のグミを選択した生徒がいなかった。価格も書いてあると中学生らしい本音？が出たのではないかな。「買い物は投票」の導入と終末の生徒の意見に変容はありましたか？

A①価格のご意見、ありがとうございます。プレ実践のクラスではグミ A を多く選択したクラスもありました。ただ、公民的分野会としては、価格よりもグミ A の産地が不明の点に生徒の選択肢の不安を大きくすることになったのではないかと推察しています。公開授業では買い物は投票の予想と終末の生徒の解答(班)は授業と研究協議でお示しした通り、生徒の視座が高まったと感じています。

Q② [単元構成について] 基調提案にもありましたが、内容のまとまりとしての単元では長すぎるので、「単元」を細分化して軽重をつけて研究していると思います。今回は、「消費」でしたが、「企業」「政府」でも、問いはありますが、「経済」という中項目では考えない方が生徒の思考も整理しやすいという認識でこのような提案になったということでしょうか？

[授業について] MQ『なぜ、「買い物は投票」と言えるのだろうか?』ですが、この問いに至るまでの生徒が、切実性や必要性を感じる導入ではなくて、先生からの要望に近いように感じました。生徒から「生徒会選挙」という言葉が出ました。生徒の思考だと政治単元での投票の強さは知っていると思いますが、有権者ではない中学生は投票できません。

でも、経済では中学生(主権者)でも投票できるので、よりよい社会を実現するための手段として、政治以外にも経済という手段でも変革できるという視点もありかなと思いました。生徒は資料の読み取りは非常によくできていました。ただ切実な問いとして生徒だけでなく大人も「その商品を買った方がよい(まえどりやフェアトレードなど)のは分かっているが、そうはしないのはなぜか?」をまずは考えないと、形だけ、教師が求める答えを察して答えるだけになることの方が多い気がします。

1・2時間目の学習から考えれば、「品質が同じなら、安いものを買うのが賢い消費者」であり、財源(収入)という有限性や機会費用(選択しなかった方で最もメリットがある)という考え方もエシカル消費と結びつくとさらに深まると思いました。資料の代案もしくは追加資料として、GDPにおける家計(消費者)が占める割合は約53%で、企業が約16%、政府が約21%です。何気ない消費者の消費行動が、経済の半分を占めているという資料があれば、本時の問いに対する重要性を感じられたのではないかと思います。生徒の切実な問いや社会参画のはしごとするなら「すべての買い物でエシカル消費は収支のバランスでできないが、10回に1回、プレゼントで買ってでもいいかにもするためにはどうすればいいか?」という方がかなり地に足の着いた問いなのではないかと思います。

A②今回は「お金」を軸に経済を再構成しています。経済の三主体にプラス金融を入れて構成しました。お金のもつ役割について、この単元では考察しています。切実性については、生徒の実態から育てたい生徒像を踏まえ、問いを考えています。問いを考えていくなかで生徒に切実性をもつことができる授業を考えました。GDPにおける家計の資料に関してですが、生徒が探究する時間とのバランスを考えた時に使用するには至りませんでした。参画の問いに関しての新しい視点のご意見ありがとうございます。引き続き、検討させていただきます。

Q③本日の授業ありがとうございました。

買い物は投票!という視点からの授業は子どもたちに思考力を養う素晴らしい授業だと思いました。子どもたちの資料の読み取りはしっかりできていたと思います。その調べた資料を読み取った内容を他のメンバーと比較して、意見交換をさせて、自分が気がつかなかった視点を見つけられたらよかつ

たのかなと思いました。班にされていた分、もう少し意見交換があればよかったのかもしれませんが、まとめようとする力は子どもたちにはあったと思います。

A③今回の研究発表では、多くの先生たちに見ていただくなかで、生徒たちも緊張していた関係もあり、積極的な意見交換が普段より少なかったと感じています。ご意見ありがとうございます。

Q④投票=正しいものを選ばれる

消費は環境、経済面、欲望など様々なものに害されてなかなかかわかっちゃいるけど、エシカル消費のような、前向きな消費ができない。さて、どうする？という考え方が、本授業のポイントかと思ったが、その認識は正しいか？その認識が正しければ、その認識を獲得し、共有できている班は少なかったように思う。先生の中で、納得できる結果か？それとも、もう一步というところか？

A④ご意見いただいた考えの認識で合っております。また、ご意見いただきましたジレンマの部分も含めて、授業構成いたしました。しかし、授業時間の関係もあり、その部分をお見せできなかった点については、工夫する余地があったと思います。ご意見ありがとうございます。

Q⑤貴重な授業提案、ありがとうございました。

【参考になった点】①資料が精選されておりわかりやすい。生徒が選びやすい。②授業の流れが完成されている。授業時間に余裕があった。③（おそらく）子どもたちの能力が高い。

【もう少し考えたい点（参考になった点と表裏一体と考えていただければと思います）】

①資料が示唆的、結論ありきすぎる。例えばグミは、価格より健康の方を選ぶべきかなということ、授業、ましてやこのような大きな場所ならば、かしこい子どもならわかるはず。実際、価格は誰も選んでいませんでした（物価高の昨今だから安い方がいいかもと言っていた女子生徒はいましたが支持されず…）。ということは、授業や思考が深まっていない、価値観や思考の揺さぶりや学び、もっと言うとかしこい消費者、社会の形成者としての深まりが少ないとも言えるかもしれません。価格は実際の価格、商品成分表をそのまま載せる等でもよかったかなと思います。

②授業にライブ感がない。先生がお作りになっていたプレゼンは、ほとんどのスライドに既に結論が入力されていました。つまり、エシカル消費（はよい、するべきだ）という結論ありきに感じられました。エシカル消費ができない人もいるだろうし、この商品はエシカル消費するが、この商品ではない（できない）という選択肢にも触れるべきではなかったかと思います。メイドインジャパンのみ、無添加のみ、フェアトレードのみ…確かにそれは理想ですし潤う人はいますが、逆もあるわけですから…。授業の最後に先生からの講話でそこに触れるだけでもあった方がよかったかなと思います。

③資料に具体的企業や商品がわかるものがあつた。わかりやすいのはよいことですが、このような大きな場所では、宣伝や批判につながる恐れがあります。マークの紹介だけでもよかったのかなと思います。

A①グミに関しては様々な商品を組み合わせる表を作成しております。生徒にとって身近なグミをきっかけにし、買い物を考えられる仕掛けとして資料を作成しました。

②基調提案でもありましたが、指導案は仮説であると考えて、研究を進めてきました。生徒が資料から読み取った内容が指導案通りの意見になっておりましたので、仮説である指導案は有効であったと考えています。

③今後の参考にさせていただきます。ご意見ありがとうございます。

### 「少子化」単元構想について

少子化については、公民的分野の「私たちと現代社会」の中で、グローバル化、情報化などとともに少子高齢化問題として学習した。その際、日本の人口ピラミッドの変遷を1930年から2060年（予測）までを概観し、合計特殊出生率の低下や国の対策について（少子化社会対策基本法・高齢社会対策基本法など）主に法制度を中心に学んだ。またこのときの、「少子化が進むとどのような問題が起こると思うか？」という問いに対しては、労働人口の減少、学校数の減少、社会保障費の負担増、経済の衰退など、これからの日本社会に対して起こりうるマイナス面の記述が多くみられた。少子化問題を前向きにとらえる内容の記述は少なく、このことから少子化の問題は多くの生徒にとってネガティブな問題としてとらえられていると考えられる。そこで、今回新たに開発した単元「少子化」の学習を通してまず、自分の人生の在り方と社会の在り方はつながっていることを理解させたい。さらに、自分の人生の選択を自由にするためには、社会を変える必要があることに気づかせ、社会は変えていけるというマインドを抱くこと、つまり、「チェンジメーカー」になることができるという自覚をもつことが必要である。このような態度を身につかせ、中学校を卒業し、例えば有権者になったときに、投票することがあたり前の人間になることを期待している。

本単元は、公民的分野のいわゆる政治・経済・国際社会の後の終章として学習することを想定し開発されたものである。つまり、社会科の総まとめのテーマとして少子化を設定している。

そもそも、なぜ少子化をテーマとして授業を開発したかということ、少子化問題は個人のそれぞれの人生の自由な選択の結果だけではないからである。少子化問題を考えることは、単に人口減少社会から生ずる経済規模の縮小などの様々な問題に迫るのみならず、個人の自由な選択ができないという社会の不自由さの一面を認識させ、そこから個人の生き方と社会の在り方を考えることにつながるのである。つまり少子化は、自分の人生の選択を自由にするためには、社会の在り方も考えなくてはならないことに気づける教材なのである。しかし、社会の在り方を考え、社会をデザインし変えることは、そうたやすくはない。そこで今回の単元では、社会は変えることができるというマインドを持つことを目標とした授業設計にした。自分の人生はもちろん、社会も変えていけるというマインド、つまりチェンジメーカーになる扉の入口に立つ準備ができた状態で中学校を卒業してほしいという思いも込められている。

少子化問題を授業としてデザインするとき、租税からのアプローチ、社会保障からのアプローチなどいくつかの切り口は考えられるが、今回開発した授業は、少子化問題の解決を阻むものとして「6つの壁」〔①結婚の壁・②出産の壁・③家事の壁・④仕事の壁・⑤政治（行政）の壁・⑥社会（地域）の壁〕を設定し、この問題の現状や課題を理解させ、さらには、改善策を提案させるものである。本授業では、少子化問題を可視化するためにループ図を作成し、構造的にとらえさせることにした。少子化問題は一般的に解決が困難な問題として捉えられており、中学生にとっては遠い存在にある。そこで、ループ図を用いて少子化問題を改善できる施策を自分のライフステージを手掛かりに多面的・多角的に考えさせることで、少しでも社会は変えていくことができると感じさせる授業をめざしている。公民的分野の終章にあたる本単元「少子化」の学習を通して、より良い社会の在り方を考察できる生徒を育てたい。

本時の指導案について

少子化 指導案

第7次 (第8時)

(1) 本時の目標

- ・少子化問題を改善できる、より効果的な施策を班のメンバーで考え、私たちの社会の問題として考察し表現し構想することができる。
- ・少子化問題の学習を通して、自分の人生及び私たちの社会の在り方を考察し、人生の選択が自由にできる社会の実現に向けて主体的に追究することができる。

本時の評価基準

- ・少子化問題を改善できる、より効果的な施策を班のメンバーで考え、私たちの社会の問題として考察し表現し構想しようとしている。 [思考・判断・表現]
- ・少子化問題の学習を通して、自分の人生及び私たちの社会の在り方を考察し、人生の選択が自由にできる社会の実現に向けて主体的に追究しようとしている。 [主体的に学習に取り組む態度]

	発問(◎○・)	教授・学習活動	資料	生徒から引き出したい知識
導入	○前回の発表を振り返る。  ・チェンジメーカーマインド(社会全体を一気に変えることは容易ではないが、全体を見て変革のツボを発見できれば小さな力で大きな変化を起こすことができる。諦めない気持ちを醸成する。)について、授業者から説明する。	T 発問する。 S 3班ほど発表する。 T 説明する。	各班のループ図に意見を書き込んだホワイトボード	・前回の内容
展開	◎「私たちがどうすれば、人生の選択が自由にできる社会になるか」を考えよう。 ・「人生の選択が自由にできる社会になる」からスタートして、ループ図を描こう。 ・自分が一番大切にしたいところはどこだろうか？描いたループ図から選ぼう。	T 発問する。 S 班でホワイトボードに描きこむ。 T 発問する。 S WSに描きこむ。 T 発問する。 S WSに記入する。	各班のループ図	例 ・人生の選択が自由にできる→やりたい職業に就くことができる→働く意欲が上がる→資格を取るなどスキルアップをする→給料が上がる→人生の選択が自由にできる

展 開	○大切にしたいことの実現のために必要なことを考えよう。	T 発問する。 S WSに考えを記入する。		(例) ・大切にしたいこと →やりたい職業に就くことができる 実現のために、自分でその職業に関する知識を身に付けるなど、個人で努力する。その上で、大学等に通うために金銭面などの援助が必要になる場合があるので、大学受験を援助する等の対策を国や自治体単位で行っていく必要がある。
終 末	◎「私たちがどうすれば、人生の選択が自由にできる社会になるか」を考えよう。  ・授業者からのまとめ	T 発問する。 S 一枚ポートフォリオに記入する。  S 発表する。  T 発問する。		・機会の平等がシステムとして保障され、誰もが自分のやりたいことにチャレンジができる社会を目指していく。

参画の 問い	私たちがどうすれば自分の人生の選択が自由にできる社会になるか？	公民 少子化			
予想	30歳になった時、私は結婚している？（していない？）子どもはいる？（いない？）				
「なぜ少子化が進むのか？」					
公民1 答え	①少子化が進むと私たちの暮らす社会は、どうになってしまうのか？ 労働力が減少することによって経済や産業が衰退する。 また地域・社会の担い手が減少することによって、伝統や制度の維持が難しくなる。	A B C 再			
公民2 答え	②なぜ「結婚しない」という選択をする人の割合（＝未婚率）が増加したのだろうか？ 恋愛・結婚のための行動を起こしていない人が増えた。そのような人々は収入が低い傾向にある。経済的に不自由を感じる人々（特に若者）の増加は未婚率が増加した大きな要因と言える。	A B C 再			
公民3 答え	③なぜ第三次ベビーブームは起きなかったのか？ 不景気の中で雇用形態が変化したにも関わらず、結婚・子育て世代（第2次ベビーブーム世代）に対する行政による十分な就労や子育てに対する支援が実施されなかったから	A B C 再			
公民4 答え	④なぜ、男女間（夫婦間）の家事育児に不平等感が生まれてしまっているのか？ 過去からの伝統的な性別役割分業（男は仕事、女は家事）の考えが根強く残っていること、その中で現代の女性の社会進出の増加も重なり、女性への負担が昔と比べて大きくなってきているから。	A B C 再			
公民5 答え	⑤なぜ、都市部は出生率が低いのか？ 都市部の核家族化が進み、地域のコミュニティーが少なく、子どもを見守る、あずかるなど、地域全体で育てる風潮が薄くて親が孤立しやすいから。	A B C 再			
単元の問い「なぜ少子化が進むのか？」 (例)	出産は結婚が前提の中で、未婚化や晩婚化が進んでいるから。またその進行には様々な要因が複雑に絡み合っている。	A B C 再			
参画の問い「私たちがどうすれば人生の選択が自由にできる社会になるか？」 (例) 機会の平等がシステムとして保障され、誰もが自分のやりたいことにチャレンジができる社会をめざしていく。					
3年	組	番	名前	解答例	【総合評価】 A B C 再

## 研究の推移

令和6年3月 大阪市立長吉西中学校 授業者 川村 由美子

### [実践内容]

第7次①②の公開授業を実践した。第7次①では、これまで第1次から学習してきた内容が、少子化を阻む「6つの壁」である結婚・出産・家事・仕事・行政・地域それぞれとどのように関わっていたのかを確認した。参画の問い「どうすれば自分の人生の選択が自由にできる社会になるのか？」を提示してから、各班が担当するテーマを「6つの壁」から1つずつ選択し、班ごとに調べてスライドと発表原稿を作成した。発表の内容は主に3点である。第1に、各班が担当するテーマが少子化にとってどのような壁になっており、課題があるのか。第2に、課題をどのように解決するのか。第3に、考察した解決案によって問題が起こる人や状況はないのか。発表が用意できた班から、参画の問いについて交流した。

第7次②では、各班の発表を行った。各班の発表を聞きながら、それぞれの発表についての質問や批判を考えて全体で交流した。発表後、参画の問いを考察するために、少子化について学習してきた中で、人生の選択が自由にできていないと感じた内容について検討した。検討した内容をふまえて、参画の問いについて交流したうえで、1枚ポートフォリオに記入した。

### [検討内容]

第7次②の発表では、各班がスライドを用いて発表し、批判を担当する班の質問にも答えることができていた。ただし、6班すべてが発表した後に、参画の問いを検討する時間の確保が十分ではなく、参画の問い自体の考察が難しかった。また、少子化を阻む「6つの壁」の1つである「行政」について、第4次で少子化と行政の関係を考えるまでに至っておらず、発表において少子化の解決案として補助金など提案は出るが、多面的に検討することができていなかった。そこで、多面的に少子化と行政との関係が検討できるように、第4次の授業の資料を見直すことになった。また、少子化問題を生徒にスムーズに考察させるために、経済面での問題を先に取り上げてから男女格差の問題が検討できるように、単元の構成を変更することになった。

令和7年5月 堺市立鳳中学校 授業者 町田 翔

### [実践内容]

第7次①②の公開授業を実践した。第7次①では、これまで学習してきた少子化の解決を阻む「6つの壁」のうち、どの壁を優先的に打破するべきなのかについてグループで検討した。その際に優先的に打破する壁を選択する根拠として、「実現性・緊急性・即効性・持続性・包摂性・功利性」の6つの観点から検討させた。また、グループで議論・提示したものについて、他班から批判的意見を募り、各班が設定した優先する観点と打破する壁について双方向の議論を行った。

そのうえで第7次②では、「6つの壁」の優先度についてダイヤモンドランキングをグループで作成し、少子化を解決するためにどの壁・どの主体に優先的に働きかけるべきなのかについて考察した。各班の発表を受けて、参画の問い「どうすれば人生の選択が自由にできる社会になるか」について、ポートフォリオに個人で記述し、数名が発表した。

### [検討内容]

思考ツールであるダイヤモンドランキングを活用することで、それぞれ個別に存在していると考えられていた「6つの壁」について、それぞれが繋がっていることに生徒は気づくことができた。しかし一方で、現代の社会課題の複雑さを痛感し、「どうやっても解決できないのではないか」というような意識

を持つ生徒や、社会課題の解決を「行政の壁」に依存する班があった。また、参画の問いの文言が、単元を通して考察してきた少子化の内容と少し離れていて思考しづらい様子が見られた。

そこで、社会課題の複雑さを認識しながらも、目の前の小さな課題を解決することが大きな社会課題の解決に繋がっていくというような、前向きなマインドを持たせる必要性が感じられた。そのためには、「6つの壁」にばかり注目させるのではなく、参画の問いである「どうすれば」という言葉に注目して参画の授業を構成することが必要ではないかと考えた。またそうすることで、単元の問いから参画の問いへの生徒の思考の変化もスムーズにできるのではないかと考えた。

そのためにはチェンジメーカーに求められる資質・能力について再検討したうえで、単元の構成を改めて見直すことも必要ではないかと考えた。

令和7年9月 大阪市立真住中学校 授業者 仲 美由紀

[実践内容]

第7次②の公開授業を実践した。「どうすれば少子化が改善されるか？」について前時で班ごとに発表資料を作成した。その際に、「なぜ少子化が進むのか」のループ図から、どの要因を変えれば少子化のループが変わるのかを見つけさせ、変えるためにはどのような対策が考えられるか、また、変更することで生じる新たな問題点も含めて検討させた。各班の発表を受けて、自分の力で少子化を変えられる場所はないかについて改めて検討させたうえで、参画の問いである「どうすれば自分の人生の選択が自由にできる社会になるか？」について個人で考察させた。

[検討内容]

ループ図を用いた各班の発表はスムーズに進行した。少子化を改善する対策についても、そこから生じる問題点の対策も含めて多面的に考察することができていた。しかし、少子化から参画の問いに移行するところが分かりづらく、参画の問いにある「人生の選択」という言葉を、少子化の中から考えるのか、少子化以外も含めて考えてもよいのかを悩んでいる様子が見られた。

単元を貫く問いである「なぜ、少子化が進むのか？」と参画の問いである「どうすれば自分の人生の選択が自由にできる社会になるか？」が生徒にとって齟齬なく考察できるように、第7次①の授業と参画の問いを検討した。第7次①の授業の問いを「どうすれば少子化が改善されるか？」ではなく、「どうすれば子どもを産むという選択が自由にできる社会になるか？」に変更し、一度「選択の自由」を考えさせることにした。また、参画の問いについては主体を明確にすることで思考が深まることを期待し、「私たちがどうすれば、人生の選択が自由にできる社会になるか？」に変更した。公開授業まで懸念だったループ図については、第6次で生徒は10～15分程度で作成することができていた。そこで、第7次②でもループ図を用いて、参画の問いに取り組みせることになった。今までは問いに対して答えを記入させると、これまで学習してきた内容を羅列し、すべて文章に取り込もうとする傾向がみられた。しかし、ループ図でレバレッジポイントを確認してから単元を貫く問いを記入させると、生徒が思考を整理しながら記入するようになった。このことから、参画の問いを深く考察するために、ループ図を用いることは有効であると考えた。また、少子化の単元を通して、少子化の問題点に焦点があたりすぎ、必要以上に生徒自身の未来が心配になる場面が出てきた。しかし、参画の問いでループ図を用いて考察すると、これからの生徒の人生を応援する気持ちになることができた。第7次②は終章の最後の授業として計画したものである。中学校を卒業して、次の進路に送り出す授業として、この形がふさわしいのではないかと考えた。

## 公開授業について

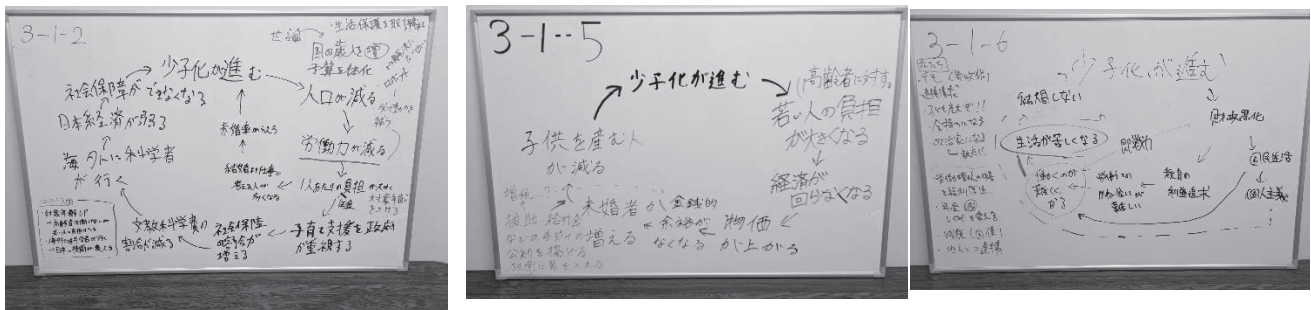
本授業は社会科の終章である。授業の導入から生徒主体で行えるように構成した。導入では、前時に考察した前時の授業の問いである「私たちがどうすれば、子どもを産むという人生の選択が自由にできる社会になるか」についての発表を行った。具体的な対策とその対策を行った結果、社会の課題になることを確認し、さらにその対策について発表した。その後、授業者から、「社会全体を一気に変えることは容易ではないが、全体を見て変革のツボを発見できれば小さな力で大きな変化を起こすことができる。この考え方をチェンジメーカーという。諦めない気持ちを醸成することが大切である。」ということを生徒に伝え、また、「私たちがどうすれば、人生の選択が自由にできる社会になるか」という参画の問いを提示した。生徒は「人生の選択が自由にできる社会になる」を起点にループ図を作成した。そのうえで、ますます「人生の選択が自由にできる社会になる」にはループ図の要素の中で特に何が必要かを考えさせた。この考察を基に、参画の問いである「私たちがどうすれば、人生の選択が自由にできる社会になるか」を考察させて発表させた。単元を通して生徒から提示された答えは以下の通りである。

### MQ. なぜ少子化が進むのか？

#### 【生徒の予想】

- ・子どもがほしいと思わない。責任が持てない。二人めはお金に余裕がない。
- ・少し前までワークライフバランスが重視されておらず子育てがしにくい社会になったから。
- ・インフレが進んだため子どもをつくと生活が苦しくなってしまうため。キャリアを優先した。
- ・娯楽が増えたから。
- ・子どもを持ったら育てるのが大変という考え方ができたから。子どもを3人も4人も育てるのは大変だということを子どものときに知った。

### MQ. なぜ少子化が進むのか？



#### 【生徒の答え】

- ・物価が上がり生活が苦しくなったから。働く人が増え、また少子化が進み、社会保障金が増え、一人ひとりの負担が大きくなっての悪循環になっているから。
- ・未婚率が上昇している。さらにたとえ結婚したとしても、金銭面や共働きが増えたから。
- ・第二次ベビーブームのあと、就職氷河期の政策により非正規雇用は増えて未婚率が増えた上に、共働きの人が多くなり、子育てに時間をとれなくなったため、子どもを産もうという人が少なくなったから。
- ・地方の問題を解決するために進むことができず、都市部が発展していく中で、都市部の人々は共働きが増え、核家族も多いので毎日忙しく、家事・育児への不満感はつらくなるばかりであるのに、雇用形態は悪化しているので、未婚という選択をとる人が増えているから。
- ・生産者に富をもたらす力がある。また、消費は環境にも影響をもたらすので買い物をする時点で環境

に配慮しているものを買う必要がある。

## PQ. 私たちがどうすれば人生の選択が自由にできる社会になるか？

### 【生徒の答え】

- ・地方創生によって日本に無駄がなくなることで、人口が増えた未来にも耐えられる社会をつくること  
ができる。また、日本の経済がそれによって回る好景気になったり、都市部以外の需要が大きくなる  
ことで地価の上昇も止められたりする。そうすることで、核家族の割合も小さくなり助け合いができ  
ようになり、日本が代々守ってきた文化なども守ることができる。
- ・一人ひとりお金も時間も余裕が生まれることが重要だと思った。そのためには、国自体が経済の余裕  
が必要だと考えて、一つの問題に対して長期的な政策を行う政党に変更することで、最終的には人生  
の選択が自由にできる社会になると考えた。
- ・私たちは少子化などの問題について意欲を示すことが、まず大切だと思った。しかし、それを自分た  
ちから深く考えることができなくなっているのが現実。なので、そこには、国からの金銭的な手助け  
が必要だし、そうすることで、少しでも個人個人の選択の幅が広がり、国全体の意識が芽生えるので  
はないか。
- ・人生の選択を自由にするには、人が増えることが結果的に重要だと考えた。人が増えることで納税す  
る人が増えて社会保障が大胆に上昇、社会保障費を女性や貧しい人、学生など全員が平等になるため  
に使う。お金があるので行きたかった大学を諦めることなく行くことができる。子育てを手助けする  
政党に投票する。
- ・自由のためには、お金が必要であるので、大学を出て正規雇用者として働くことで、経済的に安定で  
きくと思う。お金が必要な理由としては、子育てをするという選択にもお金がかかるため。
- ・結婚率の低下が少子化により経済的余裕がなくなっていると考えたため、結婚や出産についての公約を  
掲げている政党に積極的に関心をみせ、結婚や出産がしやすい社会をつくることで、社会的にも個人  
的にも余裕を持つことができる。様々な方面（結婚、出産、職業選択）での選択が自由になる。
- ・国のお金をどこに使うのかによって、人生の選択の自由度は変わる。自由をどう捉えるかにもよるけ  
れど、経済的な安定が自由度にも影響するから、経済的に「安定できるような政党に投票したり、ど  
うお金を使うと経済が安定するのかを正しい行法から自分でも考えて知るようにする。
- ・私たちの世代で未婚率が減ることで子どもが増える。そうすると税金を納める人が増え、社会保障の  
充実が実現する。そこから貧富や性別の差が減り、人生の選択が自由にできる社会になるのではない  
かと考えた。

### [考察]

本授業は小学校3年生から始まった社会科の終章として新たに単元を構想したものである。少子化は  
これからの社会にとって非常に大きな課題であり、持続可能な社会の形成者としての子どもたちに切実  
に考えてほしい課題である。公開授業のときに、生徒から「こういう授業は意味がないと今まで思っ  
ていたけれど、実際に今回の授業をして考えが変わった。こういう授業は社会を変えるために必要なんだ。」  
という発言があった。この生徒の発言こそが今回の授業の集大成である。社会科は「対立と合意」「効  
率と公正」という軸から考察し構想した。今回提示した単元は公共への橋渡しになる単元である。公共は  
「幸福・正義・公正」が設定されている。少子化をふまえて自分の人生の選択を自由にできるかを考  
えることは、中学校社会科の「対立と合意」「効率と公正」という見方・考え方から公共の「幸福・正義・  
公正」の見方・考え方につながると確認することができた。生徒が次のステージで、中学校で学ん  
できたことを土台として実りある毎日を送ることができることを願っている。

## 研究協議のふりかえり（Padlet より抜粋）

Q①新しく提案性のある授業でした。生徒だけでなく、私たち教師側もチェンジ・メーカーでないといけませんので、新しいものを提案することにこそ意義があると思います。現代社会の特色として「少子高齢化」を学びますが、「少子化と高齢化」がセットだからこそ問題（つまり人口構成のバランスが悪いことが構造的な問題）なのであって、そこを切り離して考えることが果たして、リアルな社会認識を形成できるのかというのは議論の余地があると思います。先進国はどこも少子化になります。これは止めることはできないという研究も数多くあります。日本の場合、急激に高齢化率が高まり、少子化もコロナを経て急激に減少しました。ゆるやかな減少や増加であれば、政府も対策を打ちやすい。

A①少子化というテーマ設定については、今回は「少子化」への意識が弱くならないように、敢えての設定です。私は第二次ベビーブーム世代ですが、それこそ、なぜ第三次ベビーブームがおこらなかったなど、少子化にしぼることによって見えてくる問いもあります。さらに少子化につながることは、中学生にとって近未来に自身に迫ってくる問題でもあります。このような意図を踏まえてのテーマ設定となりました。

Q②彼の最後の発言の背景には、人生の選択が自由になるための、授業そのものの在り方に思考が向かっていると見とりました。仲間と自由に物を考えて自由に話し合うことができること。まぎれもない社会参画でした。誰がまとめ役になることもなく、それぞれが語り誰かがループを書き込む姿に心が温まりました。明るい未来を感じました。ありがとうございました。

Q③目標とされている「チェンジメーカー」というキーワードが実感できるような授業でした。生徒からも実際に、「社会を変えられると感じた」という言葉が出てくるというのが何よりも大きな成果だったのではないかと思います。

Q④チェンジメーカーとして、社会的な問題に自分たちがどのように関わっていくのかという視点において、生徒は、今の自分にできることを踏まえて議論しているところが印象的でした。特に発表する場面においては、「自分たちにできることとして」という前置きした発言などは、自分事として捉えている姿がよくわかりました。すごく意見も活発に出る生徒さんであるため、班ごとに出た意見を班同士で吟味し、検討する場面や質問する場面を見てみたいと思いました。

A④ご意見ありがとうございました。機会があれば、本校の研究発表会にもお越しください。毎年11月に実施しております。参加費用は無料です。

Q⑤経済的な理由で子どもを持つことができないという理由以外の立場は、見落とされていたと思うが、あえてか、必要ないとおもっているか。生徒の立ち位置は、生まれ育った環境に影響されるから一箇所になるのは、わかるが、先生からの問い返しが必要に感じたが、そのあたりはどう考えられたか。

A⑤普段の授業では、ご指摘の点も意識して行っているつもりです。

Q⑥まとめの課題に位置付けられる本時の問いについて、人生において自由な選択ができるようにはなく、自由な選択は今すでにできているのだから、多様な生き方が認められる社会における社会保障のあり方などを考えさせた方が、大きな政府・小さな政府論などから社会参画につながる思考が出やすかったのではと思います。いかがでしょうか。

A⑥現在も自由な選択はできていない人（例：進学、結婚等々）がいるという認識です。むしろ、ますます拡大しないことを願いながら授業を行いました。

Q⑦授業ありがとうございました。生徒たちの回答や意見から、政府の財政支出、経済支援や地方活性化などを他者に求める意見が多かったと思いますが、生徒たちは子どもが何人欲しいだとか、田舎への移住を自ら進んで望めるかということも踏み込んで意見を聞いたら面白かったかなと思っています。そこに踏み込めれば、政治や経済面だけではなく、現代の偏重した価値観や利己主義的な考えの問題にも触れることができ、一回目授業の ethic と関連付けて、教育環境や日常的に触れるメディア、道徳観や倫理観などにも少子化の要因を求められるのではないかなと思いました。

A⑦子どもの数等は、単元の導入時に考えさせていました。また、これまでの授業では、人生において何を優先するか（例：お金、地域、仕事、仕事の内容、家族、友人、趣味等）考えさせる場面もありました。今回は様々な要素の中で、社会に対して前向きな気持ちをもってもらうことを優先させた結果、このような授業になりました。

Q⑧【参考になった点】①ループ図を先生も生徒も効果的に使いこなしている。赤字の付け足しも効果的。教師が子どもたちに提示したことはあるが、子どもたち自身に考えさせ作らせるのは、公民的分野に限らずさまざまな分野や場面で活用できそう。そして、前半で「政治家のような生徒」が発言していた「よいドミノを倒し続けること（素晴らしい表現力ですね!）」が、本時のループ図で自然にできていた。②ICTはあくまで手段であり、ICTでなくとも素晴らしい授業は可能だと示してくれた。子どもたちの能力も（おそらく）高い。③最後の先生の講話が、熱意と示唆に富んだものであり、授業のまとめ&振り返りにふさわしかった。

【気になった点】①ループ図の内容、また赤字の内容が、結局はお金面になりがち。多面的多角的な思考を促すために、ループ図の一要素をあえて指定してもよかったかもしれないと思います。②課題が抽象的でしたが、今の世の中は人生を自由に選択できない世の中なのではないでしょうか。自分が中学生だった時よりはかなり自由度が高くなったように思いますが…。③授業の最後のまとめ&振り返りの場面や、先生の熱く示唆的な講話は、抽象的な課題にはふさわしくないものがあつたように思います。オープンエンド、みんな違ってみんないい、でもよかったような

A⑧歴史的にみると、大きな流れとして自由・平等の方向に進んでいるとは思いますが。しかし、現在も自由な選択はできていない人もいます。またこの授業は、社会科最終授業を想定したもので、最後の発言も、そのことを前提としてものであることをご理解ください。

Q⑨生徒の記述力や発信力に脱帽しました。また、ループ図をうまく活用して、少子化問題を構造化して理解を深めていたところが大変参考になりました。授業においては、自由な選択ができるようになったからこそ未婚率が増えたのではないかと認識しております。今回の授業で人生の選択が自由になるには？という問いを作った意図がよくわからなかったですので教えてもらえればと思います。少子化の施策を吟味したり、考えている場面があまり見れなかったように思います。

A⑨少子化問題を考えるなかで、人生の選択が自由にできていない問題が複数あるというところから、この問いにたどり着きました。終章として構想した單元ですので、公共とのつながりも考えた問いになっています。少子化については前時まで検討した下地を使ったうえで公開授業をご覧いただきました。

### 1. 公民的分野の提案のキーワード① チェンジメーカー

1つめの重要なキーワードは「チェンジメーカー」である。これまで社会科の重要な概念とされてきた、「主権者」や「公民的資質」、近年OECDラーニング・コンパス内で用いられる「エージェンシー」のように、「より良い社会を作っていこう、自分のいる場所をより良くしていこう」という指向性や能力を育むことがより一層重視されるようになってきている。「チェンジメーカー」も、そのように社会を受け入れるだけでなく、変革していこうという指向性をもっているが、「社会は変えられる」という前提がなければ、主権者育成も公民的資質もエージェンシーも形骸化した概念となってしまう。そのため、公民的分野の提案は、生徒自身が社会を変えられる存在としての自分を「発見」することに特に価値づけるために「チェンジメーカー」という語を用いており、2本の授業のいずれもが、チェンジメーカーとしての自分を「発見」できるような授業構成となっている。

### 2. 公民的分野の提案のキーワード② 視座

2つめの重要なキーワードは、「視座」である。社会科では、地理や歴史などの自分が今住む社会と異なる社会について学ぶ機会が多くある。そのような学習を通して、家庭や学校の中で生きる中学生・子どもといった日常生活者の視点を変えていく、より高次にしていくことが視座を上げるということである。視座を上げることで、今の自分を取り巻く社会やこれからの社会の未来、そして自分自身の未来を遠くまで見通すことができるようになる。

### 3. 公民的分野の提案のキーワード③ IからWeへ

3つめの重要なキーワードは、「IからWeへ」である。これは、「私たち」の概念を拡張していくことを意味している。生徒にとっては、家庭や学校といったコミュニティは身近で理解しやすく、そこで発生する問題などに対しても、自分(たち)の問題として捉えることができる。であるならば、この「私たち」を実感できる範囲が広がることこそが、社会の問題を「私たち」が解決していくうえで必要不可欠となる。実際の社会に目を向けると、国や文化、さまざまな状況などの「壁」によって、生徒自身にとっては「私たち」と感じにくいような人々が生活している一方で、互いが「私たち」という意識をもつことでその分断がなくなり、ともに問題の解決に取り組むことが社会を変える力になり得るのである。

### 4. なぜ若者は「社会を変えられる」と思えないのか? : ループ図による分析

日本の若者は世界の若者に比較して、社会はより良くなる、より良く変えることができると考える割合が低い傾向がある。このような「世界を変えられる意識の低さ」を生む原因をループ図によって分析することで、生徒を取り巻く「社会」「家庭」「学校」の諸要素が生徒の意識にどのように影響しているのかを明らかにし、またこれから何をしていけばよいのかという指針を立てることができる。例えば、社会における「出る杭は打たれ

る」という風潮は、生徒を社会課題に積極的に関わることから遠ざけることとなる。それによって成功体験が得られなくなり、生徒の自己肯定感や自己効力感が失われてしまう。生徒自身の自信の喪失は、課題そのものへの関心を遠ざけることとなり、より一層生徒が社会課題に向き合う扉は閉ざされてしまう。また、不安定・未確定な社会だからこそその教師や親といった生徒を取り巻く大人たちの現状維持志向・失敗回避志向は、生徒・子どもを未熟で受動的な存在と位置付けてしまい、やはりそのことが生徒と社会課題が会う機会、そして自信を失わせることにつながるのである。

このようなループ図による分析は、先に述べたように、ループを構成する諸要素のどこに働きかけることで、このループを減速・逆転させるかを考えることを可能にする。そのようなループの流れを変えることができる、働きかけるポイントをレバレッジポイントという。レバレッジとは「てこ」を意味し、てこのように小さな力で大きな流れを変えていくために、どこでどのような働きかけがいいのかを考えていく機会が、社会科の授業だけでなく、学校教育の営みの中でも重要ではないか。そして、公民的分野の2つの授業実践は、このレバレッジポイントを探るような実践として価値づけられるものである。

## 5. それぞれの公開授業について

1つめに、大島先生による実践「消費」についてである。生徒にとっても日常的な行動である「買い物」を「投票」「意思表示」と捉え直すことのできる授業展開となっていた。これにより、まだ選挙権のない中学生の行動であっても、それが社会を作っている要素になっているという、視座を高め、チェンジメーカーとしての自分を発見でき、これからの生徒の行動を変えていく可能性を秘めた授業となっている。ここからさらに、生徒の思考をより深めていくためにどんな資料や問いが必要か、また、生徒の学力や地域などの実態に応じてどのような工夫が必要かといった議論ができる、提案性のある授業となっていた。

2つめに、和倉先生による「少子化」の授業についてである。ループ図を使うことで、生徒が掴み切れないような複雑な問題である「少子化」を一定可視化し、その中で何ができるかを考えていくことを可能にした。また、この授業の本質である、「どのような社会にしていきたいか?」は「社会は自分たちの力で変えていける」ということを前提にした問いであり、実際に生徒たちは「どのような社会を作りたいか、そのために何をすべきか」という姿勢で授業に臨み、主体的に課題を解決しようとしていた。今回の授業のような抽象的な問い・課題に対して生徒が作成したループ図が応えうるものだったかという点ではまだ成長の余地があるが、生徒の発言にあったように、この問いを考え・議論する時間に十分な意味があったと考えられる。

## 6. 2つの授業を通して

2つの授業を通して考えたかったことは、私たちが今いる社会は平坦な地面ではなく、傾斜地であるということである。私たちがこのまま何もしなければますます悪くなってしまいう社会へと転がっていつてしまう可能性を持った社会に生きているということである。では、そのような社会の中で私たち社会科の教員は何をすべきなのか。まずは、生徒たちとともにそのような意識を共有することである。そして、そこから何を变えていくべきなのかを議論し、考える授業が求められていく。この社会の主役であって、誰でもない私たちが私たちの視野を広げながら、Weの枠を広げながら、社会をより良くしていくんだ、そういう意識を作っていくような授業を作っていくことが今後求められる。



# 公民的分野指導助言

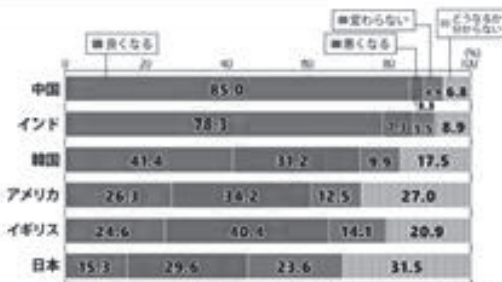
大阪教育大学 平取義安

©2020 大阪教育大学

## 公民分野の提案について

- ・チェンジ・メーカーとしての自分  
 自分のいる場所でもりよい変化を起こそうとする人  
 公民的資質、主権者、エージェンシー
- ・社会についての視座を高めていくこと  
 どのまで視野に入れるか
- ・IからWeへ  
 「私たち」の拡張

©2020 大阪教育大学



日本経済産業省国際調査センター「海外社会に対する意識（2019年版）」2019年

©2020 大阪教育大学

	日本	アメリカ	イギリス	中国	韓国	インド
海外社会に関心を持つことをしたいと思う	84.0	78.0	77.0	63.0	70.0	63.0
自分は責任がある世界の一角だと思える	57.0	78.0	59.0	57.0	52.0	54.0
ボランティア活動に参加したい	54.0	76.0	59.0	57.0	55.0	57.0
国際活動のチームに参加をしたい	54.0	76.0	59.0	57.0	55.0	57.0
自分は大人だと思える	53.0	75.0	77.0	60.0	50.0	57.0
自分の力で、海外社会を変えたいと思う	44.0	73.0	77.0	60.0	50.0	50.0

日本経済産業省国際調査センター「海外社会に対する意識（2019年版）」2019年

©2020 大阪教育大学

表附11：自覚と社会意識の向上に、以下の中意識が関与する。(平均値、有効n=1,000)  
 \*「自覚」+「社会意識」は自覚意識の総称である。日本独自の概念である。

項目	自覚	政治的	経済的	社会的	環境	その他
自覚意識の向上に、自覚意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%
自覚意識の向上に、政治的意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%
自覚意識の向上に、経済的意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%
自覚意識の向上に、社会的意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%
自覚意識の向上に、環境意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%
自覚意識の向上に、その他意識が関与している	94%	94%	94%	94%	94%	94%

©2019年 大森教育大学



©2019年 大森教育大学

### 社会を変えられる意識の低さの要因 (1) 社会

- 低い自己肯定感・自己効力感：**  
 他国と比較して、日本の若者は「自分に満足している」割合が低く、**自己有用感**（自分が社会の役に立っているという感覚）も低い傾向にある。これは、自身の行動や意見が社会に影響を与えようという**自己効力感**の欠如に繋がる。
- 成功体験の不足と教育：**  
 正解主義的な傾向の強い教育や、社会と連携した実践的な学びの機会が少ないため、「自ら問いを立て、行動し、失敗から学ぶ」という経験が不足しがちである。
- 社会構造的な制約：**  
 「失敗してはいけない」という強い同調圧力や社会風潮が、若者が主体的に発言したり、リスクを留して行動することを抑制する。社会参加や政治参加の機会・意識が他外国に比べて低く、社会課題を「他人ごと」として捉えやすい環境がある。

©2019年 大森教育大学

### 社会を変えられる意識の低さの要因 (2) 学校

- カリキュラム・教科書の影響**
  - 中立性の強調と主体性の欠如：公民科の教科書は、特定の価値観を押し付けられないよう中立性を根拠に重視する傾向があり、このため、社会課題を「解決すべき喫緊のテーマ」としてではなく、「様々な見解がある問題」として遠巻きに解説するに留まりがち。
  - 「正解」の提示：民主主義や法の支配といった理念は教えるものの、その理念を現実社会でどのように実現するかというプロセス（行動）や富強が省略され、学習者が「自分事」として捉える当事者意識が生まれにくい。

©2019年 大森教育大学

## 社会を変えられる意識の低さの要因 (2) 学校

### 2. 授業の影響

- ・知識伝達とインプット中心：多くの授業は、限られた時間内に膨大な知識を記憶するために、教師から生徒への一方的な知識伝達を中心。
- ・「失敗の場」の欠如：複雑な社会課題へのアプローチには、議論の失敗、意見の食い違い、行動の失敗が不可欠であるが、正解のある知識確認型の授業では、生徒が安心して「間違える」機会や、「対立を乗り越えて合意を形成する」体験が提供されず、その結果、若者は社会活動を「リスクの高いもの」として認識してしまう。

©2019 大阪教育大学

## 社会を変えられる意識の低さの要因 (2) 学校

### 3. 教師の意識の影響

- ・システム内での行動：教師は、部活動、事務作業、保護者対応、そして入試対策という重圧の中で働いており、この多忙な環境下では、準備に時間のかかる「探究型授業」や、予備はめトラブルにつながりかねない「社会との連携・実践活動」を避けるインセンティブが強く作用する。
- ・現状維持バイアス：教師自身が既存の評価システムの中で成功を収めてきたため、「知識の検定」や「集団行動の重視」が重要であるという現状維持バイアスを持ちやすく、自ら生徒の「失敗しても良いから行動する」意欲を積極的に引き出すのが難しいという側面がある。

©2019 大阪教育大学

## 社会を変えられる意識の低さの要因 (3) 家庭

### 1. リスク回避の学習：

- ・親は、リスクを取って挑戦することよりも、安定と規範遵守を優先する価値観を教え込む。これにより、社会を変えるために不可欠な異議を唱えることや新しい行動を起こすことに対して、若者は強い心理的なブレーキをかける。

### 2. 自己効力感の阻害：

- ・親が子どもの失敗を回避しようと過干渉になる結果、子どもは自分で問題を解決したり、困難な状況を乗り越えたりする機会が奪われる。この「親が何とかなしてくれる」という経験は、「自分で何かを成し遂げられる」という自己効力感の形成を阻害する。

©2019 大阪教育大学

## 社会を変えられる意識の低さの要因 (3) 家庭

### 3. 価値観の再生産：

- ・親が持つ「社会は簡単に変わらない」「体制に従うのが賢明だ」という諦めや無力感が、言語的・非言語的に子どもに伝達され、子どもはこれを内面化し、やがてその子が親になった時に同じ安定志向のループを次世代に繰り返す社会的再生産へとつながります。

©2019 大阪教育大学



## おわりに

第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会  
第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会  
副実行委員長 山口 和宏（堺市立登美丘中学校）

令和 7（2025）年 11 月 13 日、14 日の両日にわたり開催されました「第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会（兼 第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会）」は、多くの皆さま方の温かいご支援とお力添えを賜り、盛会のうちに幕を閉じることができました。大会の成功に向けて多大なるご尽力をいただいた関係諸機関の皆さま、そして全国各地から足を運んでくださった参加者の皆さまに、まずは心より深く感謝申し上げます。

今大会の歩みを振り返り、大阪における社会科教育の研究をさらに深め、次なる世代へと引き継いでいくため、その軌跡をこの一冊にまとめました。これは単なる記録集ではありません。いつか再び大阪の地で全国大会が開催されるその時に、あとに続く方々が迷うことなく歩めるよう、当時の熱量と試行錯誤を記した「道しるべ」であり、私たちが未来へ託す「レガシー」であります。

### 構想と胎動 — ゼロからの出発

今大会の道のりは、令和 4（2022）年 6 月 21 日、わずか 5 名の校長が集まった準備会から始まりました。「大阪府下の各市町村から、いかにして志を同じくする先生方に集まっていただくか」「大会の根幹となる主題をいつまでに決定すべきか」等。白紙の状態から、組織の骨組みを一つひとつ組み立てる作業は、まさに手探りの中での出発でした。

しかし、そのわずか二日後、アウリーナ大阪で開催された第 1 回実行委員会では、私たちの不安を吹き飛ばすような光景が広がっていました。会場が手狭に感じられるほど、府内各地から多くの先生方が集結してくださったのです。初対面の先生が大半であったにもかかわらず、そこでは「問い」「探究」「一人ひとり」「評価」といった言葉が飛び交い、会場は早くも熱を帯びた議論の場となりました。この時の先生方の瞳の輝きこそが、4 年にわたる長い道のりを支える原動力となったことは間違いありません。

### 苦難の会場選定 — 焦燥感包まれる中でのありがたいお話

大会の準備を進める中で、最も大きな壁として立ち上がったのが「会場の確保」でした。当初、令和 7 年 11 月第 2 木・金曜日を開催日として想定し、令和 6 年度まで大会実行委員長を務めていました小野寺氏（前大阪市立新豊崎中学校長）とともに大阪市内を中心に奔走しました。ホテルから公的な大規模施設まで、文字通り足で稼いで確認して回りましたが、現実には非常に厳しいものでした。1000 人規模で全体会が開催でき、かつ予算面での採算性をクリアできる会場は、実質的にどこにも見当たらないという絶望的な膠着状態に陥ったのです。

「このままでは大会そのものが立ち行かなくなるのではないか」という焦燥感に包まれていた私たちに、救いの手を差し伸べてくださったのが、興國高等学校様でした。2000 人収容可能な素晴らしいアリ

一ナを提供してくださるというお話をいただいた時の安堵と感謝の念は、今でも言葉に尽くせません。この困難を乗り越えた経験は、組織の結束をより強固なものにしてくれました。また会場を提供していただく中で、疑念を持たれないように細部も調整をさせていただきました。

## 実働四年の情熱 — 研究と組織の深化

令和5年度に入ると、大会の骨格はより具体性を帯びていきました。大阪教育大学の峯明秀教授、龍谷大学の中本和彦教授、大阪教育大学の手取義宏教授という、斯界を代表する先生方に指導助言を依頼させていただき、研究体制を盤石なものとししました。

特筆すべきは、大会主題の決定プロセスです。私たちが大切にしてきた「一人ひとり」「未来へつながる」、そして開催年を象徴する「大阪・関西万博」というエッセンスを凝縮し、『一人ひとりの未来につながる社会科の創造 ～問い・探究、そして参画へ～』という主題が決定しました。

令和6年度からは、事務局、総務部、運営部、研究部、会計部、編集部の各セクションが、役員会や実行委員会で情報共有をしながら、実務が動き始めました。授業公開をライブ公開で行うのか、あるいは動画公開とするのか。広告掲載の依頼から、生徒移動のためのバス手配、予算の細かな調整に至るまで、役員・実行委員の先生方は、日常の多忙な校務の合間を縫って、献身的に準備に奔走してくださいました。

大会が目前に迫った令和7年度は、少なくとも月に一度の頻度で会議を重ねました。特に編集部においては、大会冊子製作にかかる膨大な原稿の校正や印刷業者との調整に追われ、大会直前まで心血を注いでくださいました。こうした役員・実行委員・研究員の皆さま一人ひとりの「社会科教育への情熱」こそが、今大会を支える強固な礎となったのです。

## 大会の結実と、未来への提言

迎えた大会当日。構想を含めれば5年、実働4年に及んだ日々が、800名を超える多くの参加者（参加システム申込者は861名）の皆さまの笑顔とともに結実しました。大阪・関西万博の年に、ここ大阪から「参画」へとつながる社会科授業のあり方を全国へ発信できたことは、大きな成果です。事後アンケートでいただいた非常に高い満足度の数値は、私たちの取り組みが間違っていなかったことを証明してくれました。一方で、未来への課題も見えてきました。教育研究会組織の有無による市町村間の協力体制差や、持続可能な協力体制の構築など、時代に合わせて組織のあり方をアップデートしていく必要があります。

次に大阪で全国大会が開催されるのは、随分と先のこともかもしれません。その頃には、教育の方向性も、社会のシステムも、今とは全く異なる姿になっていることでしょう。しかし、時代がどれほど移り変わっても、教育の根本にあるのは「一人ひとり」のつながりです。もし皆さまが、大会運営の荒波の中で立ち止まりそうになったなら、どうかこの一冊を紐解いてみてください。「かつての仲間たちが、どのように壁を乗り越えたのか」その記録が、必ずや皆さまの背中を押す一助となると信じています。

## 結びに代えて

最後になりましたが、温かいご指導を賜りました峯教授、中本教授、手取教授、そして専門的な見地から示唆をくださった藤野視学官、小関・磯山両教科調査官に深く感謝いたします。また、記念講演で華を添えてくださった株式会社千房の中井貫二社長、会場を提供してくださった関係者の皆さま、そして、何よりもこの4年間、志を一つに歩み続けてくれた役員、実行委員、研究員の皆さまの力が結集したからこそ、この大会は成功を収めることができました。皆さんと共に汗を流し、語り合った日々は、私の生涯の宝物です。本当にお疲れさまでした。そして、本当にありがとうございました。

この記録が、大阪の、そして日本の社会科教育のさらなる発展に寄与することを願い、終わりの言葉とさせていただきます。



# 参 考 资 料



## 令和7年度 大阪府公立中学校社会科教育研究会研修会

- 1, 日時 令和8年1月27日
- 2, 場所 たかつガーデン
- 3, 研修会実施に当たり

「第58回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会（兼 第31回近畿中学校社会科教育研究大会）」の2日めの分野会は、各会場に分かれて開催しました。各分野の授業実践報告は、下表のとおりです。

	授業実践①	授業実践②	会場
地理的分野	動画視聴・解説	動画視聴・解説	サンスクエア堺
歴史的分野	ライブ授業公開	動画視聴・解説	興國高等学校
公民的分野	ライブ授業公開	ライブ授業公開	大阪市立天王寺中学校

令和7年度「大阪府公立中学校社会科教育研究会研修会」は、全中社大阪大会各分野報告が別会場だったため、参加できなかった他分野の報告を聞く機会として企画されたものです。今回は府中社事務局の依頼により、「歴史的分野・授業実践Ⅱ」の授業者と報告者を招致し、実施する運びとなりました。

### 4, 研修会の予定

1 会長あいさつ
2 授業動画視聴・解説 単 元：歴史的分野「武士の政治と展開」 授業者：柳江 智貴 教諭（高槻市立第六中学校） 報告者：柳江 智貴 教諭・鈴木 良 首席（高槻市立第二中学校）
3 研究協議…4名程度のグループでの研究協議 ○授業実践を「問い・探究・参画」の視点から気づいたことについての協議 ○大会主題からみた成果と課題についての協議
4 おわりに 会長あいさつ

### 3 研修の様子

全中社大阪大会「歴史的分野」では、子どもたちの「いま」の姿を届ける「ライブ授業公開」と、成長の軌跡を辿る「動画視聴・解説」のハイブリッド形式での発表に挑戦しました。この異なる二つの視点を通じ、現代と過去の課題を結びつける「参画に向けた問い」を軸とした単元構成を提案し、多くの示唆を得ることができました。

当日は会場が溢れるほどの熱気に包まれましたが、班別協議の規模によっては議論を深めきれなかったという課題も残りました。しかし、今回の研修会ではその課題を考慮して、4名程度の少人数班による意見交換を行い、内容をより深く協議することができ、単元をより大局的に捉え直すことができました。またビデオにまとめた授業の様子を改めて活用できる機会を持つことができことは意義深いと考えています。

大阪の社会科教育にとって、全中社を終えた「これから」こそが真に重要な時期です。これまでの研究成果を大切に継承し、さらに深化させていくことが求められています。今回の研修会での新たな気づきを原動力に、より充実した教育活動を展開しながら、今後の大阪府の社会科教育の発展につなげられればと思います。

[文責：山口和宏]

第 58 回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会 第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会  
令和 7 年度 事業報告

大会主題 一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～

主催団体 全国中学校社会科教育研究会 近畿中学校社会科教育研究会  
大阪府公立中学校社会科教育研究会 大阪市中学校教育研究会社会部  
堺市中学校教育研究会社会科部会

後 援 文部科学省 滋賀県教育委員会 兵庫県教育委員会 奈良県教育委員会  
和歌山県教育委員会 京都市教育委員会 大阪府教育庁  
大阪市教育委員会 堺市教育委員会 大阪府各市町村教育委員会  
大阪府町村教育長会 大阪府都市教育長協議会 大阪府公立中学校校長会  
大阪市立中学校校長会 堺市立中学校校長会 大阪府公立中学校教育研究会  
公益財団法人日本教育公務員弘済会大阪支部

実施方法 大会主題「一人ひとりの未来につながる社会科の創造～問い・探究、そして参画へ～」を柱に、全体会により中学校社会教育の充実振興と社会科教員の授業力向上を図るとともに、3分野の公開授業・研究協議を行った。

開催日時・場所 全体会 令和 7 年 11 月 13 日（木）13:00～16:00 興國高等学校  
分科会 令和 7 年 11 月 14 日（金）  
・地理的分野 9:30～16:20 サンスクエア堺  
・歴史的分野 9:10～16:15 興國高等学校  
・公民的分野 9:30～16:35 大阪市立天王寺中学校

参加者数 861名（来賓・視察等除く）

実行委員会等

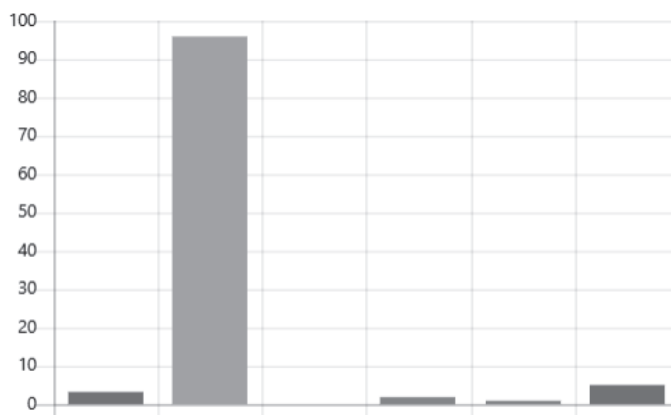
・ 4月18日(金)	役員会	15:30～17:00	大阪市総合教育センター
・ 5月20日(火)	拡大役員会	15:40～17:00	ホテルアウィーナ大阪
・ 6月25日(水)	役員会	15:30～17:00	大阪市総合教育センター
・ 7月8日(火)	全体会	15:30～17:00	大阪市総合教育センター
・ 7月14日(月)	拡大役員会	15:30～17:00	大阪市総合教育センター
・ 8月5日(火)	全体会	9:00～12:30	大阪市総合教育センター
・ 8月5日(火)	会場下見	13:45～17:00	興國高等学校
・ 9月10日(水)	各部長会	16:00～17:00	大阪市立木津中学校
・ 9月24日(水)	拡大役員会	15:30～17:00	大阪市立木津中学校
・ 10月1日(水)	各部長会	16:00～17:00	大阪市立木津中学校
・ 10月20日(月)	全体会	15:30～17:00	大阪市総合教育センター
・ 11月12日(水)	前日準備	15:00～17:00	興國高等学校
・ 11月13日(木)	準備・全体会リハーサル	9:00～11:30	興國高等学校
・ 2月20日(金)	役員会	16:00～17:00	大阪教育大学天王寺キャンパス

第58回全国中学校社会科教育研究大会大阪大会（兼第31回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会）

総括アンケート

★あなたの勤務先は、どの校種ですか。

● 小学校	3
● 中学校	96
● 高等学校	0
● 大学	2
● 義務教育学校(小中一貫校)	1
● その他	5



★基調提案は、大会主題に迫る基調提案となっていましたか。

● そう思う	48
● どちらかといえばそう思う	38
● どちらかといえばそう思わない	1
● そう思わない	0



★大会2日めはどの分野に参加しましたか。

● そう思う	48
● どちらかといえばそう思う	38
● どちらかといえばそう思わない	1
● そう思わない	0



★地理的分野の分野別提案は、研究主題や分野別のねらいに迫るものになっていましたか。

● そう思う	48
● どちらかといえばそう思う	38
● どちらかといえばそう思わない	1
● そう思わない	0



★地理的分野の授業実践は、研究主題や分野別のねらいに迫るものになっていましたか。

- そう思う 13
- どちらかといえばそう思う 9
- どちらかといえばそう思わない 0
- そう思わない 0

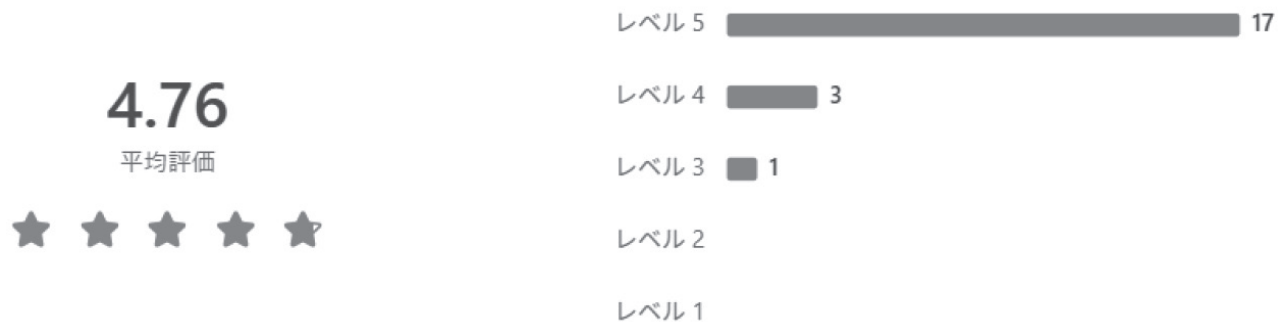


★地理的分野の研究協議では、研究主題や分野別のねらいについてよく協議できていましたか。

- そう思う 13
- どちらかといえばそう思う 9
- どちらかといえばそう思わない 0
- そう思わない 0

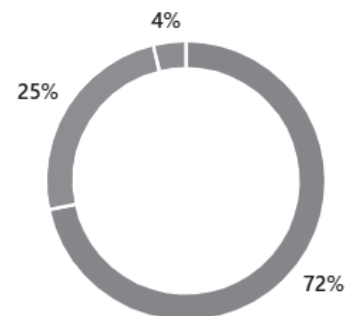


★大会2日めに参加した満足度について、満足度が大きいほど星の数を多く記入してください。(地理)



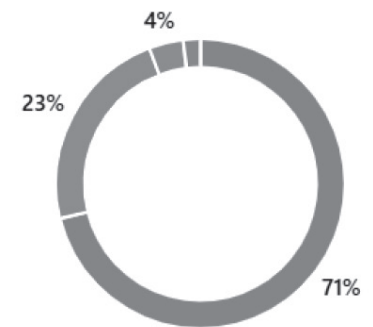
★歴史的分野の分野別提案は、研究主題や分野別のねらいに迫るものになっていましたか。

- そう思う 38
- どちらかといえばそう思う 13
- どちらかといえばそう思わない 2
- そう思わない 0



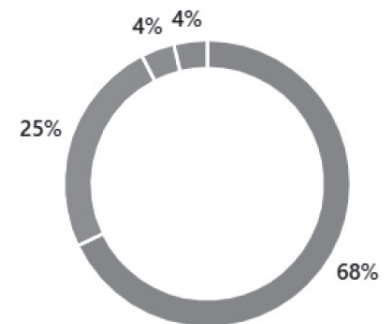
★歴史的分野の公開授業やビデオによる授業実践について、研究主題や分野別のねらいに迫るものになっていましたか。

- そう思う 37
- どちらかといえばそう思う 12
- どちらかといえばそう思わない 2
- そう思わない 1

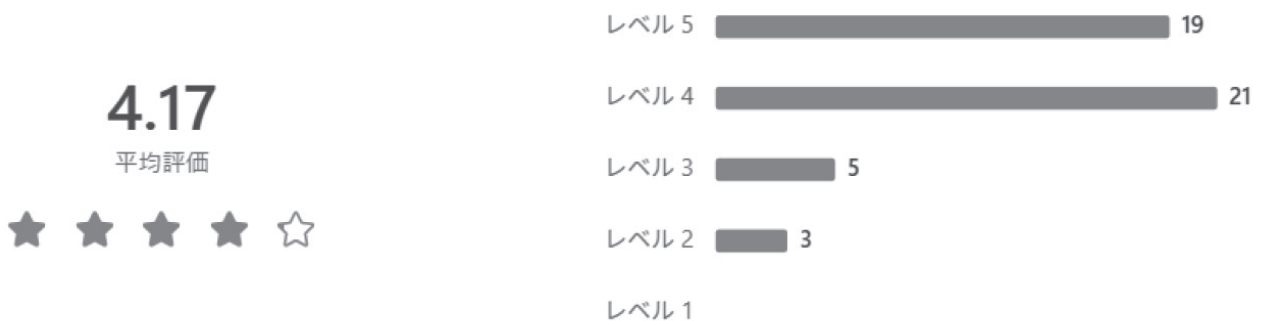


★歴史的分野の研究協議では、研究主題や分野別のねらいについてよく協議できていましたか。

- そう思う 36
- どちらかといえばそう思う 13
- どちらかといえばそう思わない 2
- そう思わない 2

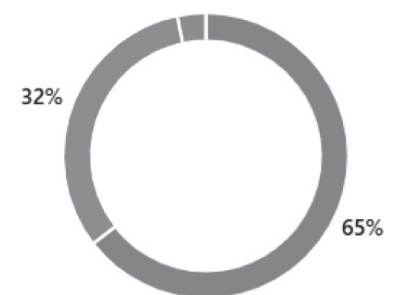


★大会 2 日めに参加した満足度について、満足度が大きいほど星の数を多く記入してください。(歴史)



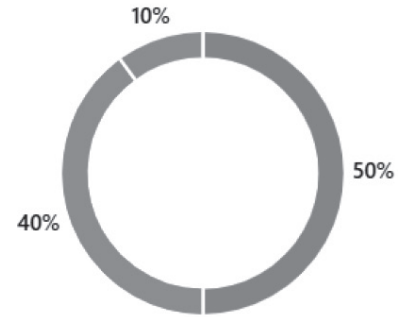
★公民的分野の分野別提案は、研究主題や分野別のねらいに迫るものになっていましたか

- そう思う 20
- どちらかといえばそう思う 10
- どちらかといえばそう思わない 1
- そう思わない 0



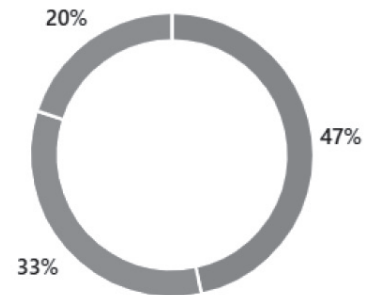
★公民的分野の公開授業について、研究主題や分野別のねらいにせまるものになっていましたか。

- そう思う 15
- どちらかといえばそう思う 12
- どちらかといえばそう思わない 3
- そう思わない 0

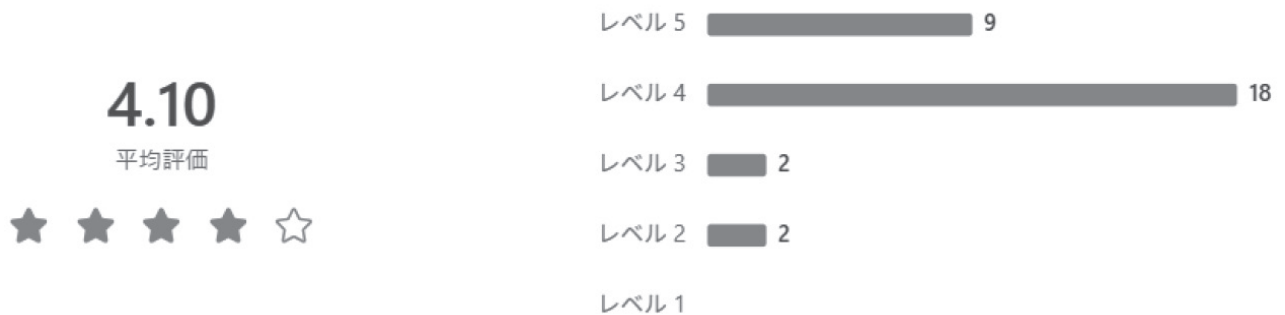


★公民的分野の研究協議では、研究主題や分野別のねらいについてよく協議できていましたか。

- そう思う 14
- どちらかといえばそう思う 10
- どちらかといえばそう思わない 6
- そう思わない 0



★大会 2 日めに参加した満足度について、満足度が大きいほど星の数を多く記入してください。(公民)



第 58 回全国中学校社会科教育研究大会 大阪大会  
第 31 回近畿中学校社会科教育研究大会 大阪大会  
大会のまとめ

発行 令和 8 (2026) 年 3 月 31 日  
発行者 大阪大会実行委員長 渡辺 慶人  
大会事務局 大阪市立矢田西中学校 内 事務局長 藤原 純司  
〒546-0024 大阪市東住吉区公園南矢田 2-12-47  
電話 06-6697-1891 E-mail: zentyusha2025@gmail.com  
編集 大阪大会研究部・編集部  
印刷 あさひ高速印刷株式会社  
〒550-0002 大阪市西区江戸堀 2-1-13  
TEL: 06-6448-7521 FAX: 06-6447-1896